

# 遠洋 水産研究所ニュース

平成 9 年 8 月

## 創立 30 周年特集号



(宮下 富夫氏 撮影)

### 目次

創立30周年に当たって(嶋津靖彦).....	2	まぐろ研究30年を振り返って(鈴木治郎).....	29
遠洋漁業存続の必要性(石川賢廣).....	4	外洋資源部は残り物の集まり	
遠洋水産研究所30周年にあたって(川本省自).....	5	(川原重幸、加藤秀弘、宮下富夫、谷津明彦).....	30
研究者が水産政策を主導する時代が到来(藤波徳雄).....	6	海洋・南大洋部の最近10年の	
ネット裏から見た遠水研30年(米澤邦男).....	7	活動と将来展望(宮地邦明).....	33
創立30周年を祝して(上田大和).....	8	総務部沿革アラカルト(野村真郷).....	35
海洋生物資源研究の機関車たれ(島 一雄).....	8	30周年記念号に向けて(團野貞明).....	38
遠洋研30周年に想う(多々良 薫).....	10	折戸の四季(山村 豊).....	39
思い出と期待(林 繁一).....	11	地元知られていない世界的な研究所(松村皐月).....	42
遠洋水研職員OB会の結成を祝う(大隅清治).....	12	遠研、遠水研、遠洋研、遠洋水研(嶋津靖彦).....	42
遠洋水産研究所と私(伊藤 準).....	13	寄せ書き(色紙).....	43
遠洋水研よ永遠に(畑中 寛).....	14		
時代の流れとマグロの研究(須田 明).....	15	《資料編》	
研究者を育てる事、研究者として育つ事(千國史郎).....	17	国際会議等参加、乗船調査、研究業績の実績.....	44
望函庵記(山中一郎).....	18	在外研究一覧.....	44
第4楽章への期待(上柳昭治).....	19	国外研究員の研修実績.....	45
30周年に思う(大滝英夫).....	19	国際研究集会、国際漁業委員会及び海外指導等への参加実績.....	46
自分の中の遠洋水研時代(高木健治).....	20	海上及び海外調査への実績.....	67
ひとむかし前のはなし(阿部真雄).....	21	遠洋水産研究所が関係する国際条約・協定及び国際機関.....	77
遠洋水産研究所の3年半の思い出(佐伯靖彦).....	23	遠洋水産研究所と各漁業との関わり.....	78
調査船人生(高橋利治).....	24	漁業生産量、生産額の経年変化.....	79
遠洋水研と私 — 開洋丸・照洋丸を通じて — (山中完一).....	25	遠洋水産研究所組織体制の変遷.....	86
北洋資源部この10年(若林 清).....	27	遠洋水産研究所職員一覧.....	87
		俸給表別職員数の推移.....	94
		遠洋水産研究所関連年表.....	95

## 創立30周年に当たって



嶋津 靖彦

遠洋水産研究所が難産の末に誕生したことは初代所長の矢部さんが創立30周年特集号に詳しくお書きになっている。研究所の建物もほぼ完成した1966(昭和41)年春に入省した私たち4人は、うち1人が遠洋水研委員であると聞かされていた。しかし、八郎瀧干拓事業団設置法案

で国会が難航して遠洋水研の設置は翌年にずれ込み、記念すべき入所第1号は若林君(現北洋資源部長)が射止めることになったのだ。私は遠洋水研に創立後最初の10年に1回目、次の10年に2回目、そしてこの3月に3回目の異動辞令をもらって今日を迎えている。

遠洋水研では創立以来10年ごとの区切りに「遠洋」特集号を発行していて、改めて過去の2冊を読み返すとそれぞれの時の様々な思いやエピソードや事実が読みとれる。10年目の区切りに、福田所長は我が身を刺されるヨブの艱難に思いを寄せて痛切な文章をお書きになっている、あたかも今日の姿を予見していたかのようにも思われる。登り坂にあって遠洋水研の発足を迎えた我が国の遠洋漁業は73年の399万トンで頂点として減少に転じ、創立21年目までは200万トン台を維持したが、95年にはついに100万トン、3000億円を割り込むに至った。来し方の30年を振り返るならば、遠洋水研の関係する漁業\*を取り巻く最近10年間の変化は誰もが驚くほどに大きい。

しかし、その芽はずでに最初の10年間に胚胎していたのであり、そのことこそが福田所長の嘆きの根元だったのではないかと。世界の海洋秩序の趨勢を決めることになった第3次国連海洋法会議の開催(73年~)、国連人間環境会議での米国による商業捕鯨の10年モラトリアム提案(72.6)、国連海洋法条約を先取りした米国200海里漁業水域の施行(77.3)は、確かに遠洋水研の創立10周年に先立つ出来事であった。創立30周年の節目に立ってささやかな検証を試る。

### その1. 200海里体制の定着と研究対応

国連海洋法条約は10年の会期を要して採択された(82.12)が、これを先取りする沿岸各国の200海里水域の設定にともなって我が国のトロール漁業は大きく後退し

(\*脚注: 遠洋水研が関係する漁業は 以西底びき網漁業を除く遠洋漁業全般、捕鯨業およびいるか漁業、近海かつお・まぐろ1そうまき、近海まぐろはえ縄、沿岸まぐろはえ縄、かじき等流し網等の沖合漁業(一部は沿岸漁業)がある。この守備範囲は基本的に設立当初から変わらないが、遠洋漁業によって遠洋水研の対応振りを代表させて語られることが多い。95年の ~ の漁業による生産量は130万トン、生産金額は4000億円に達する。)

た。73年には北太平洋での底びき網漁業の生産量は288万トンを超えていたが、95年にはわずかに9万トンとなって、この間の遠洋漁業の生産量の落差の第1因となった。いうまでもなく、主役はスケトウダラである。

米国水域では実質的に87年に外国漁船に対する余剰量の割当てがゼロとなって我が国の漁業は撤退した。これに代わって遠洋水研が実証したベーリング公海資源に漁獲が集中することになり、ペ公海スケトウダラ条約の締結(94.8.95.12発効)に至った。北洋での底魚資源研究は現在この条約の対応と併せて、研究室が独自に継続してきた天皇海山群の漁業資源調査が中心となっている。この経過を振り返るとき、200海里宣言から10年にして外国漁船のフェーズアウトを有言実行し遂げた米国に改めて感心するというほかはない。

我が国の南方トロール漁業は最盛期の77年にはニュージーランド、南西大西洋、アフリカ南岸等9水域に展開し39万トンの生産量を上げたが、各海域での資源状況の悪化と資源管理の強化によって次々と撤退を余儀なくされ、95年には32年振りに10万トンを割り込む状況となった。このような中で、かつて3名の所長を輩出した栄光を誇る遠洋底魚研(発足当時は遠洋トロール研)は本年4月1日をもって廃止された。

北太平洋のかに漁業、さけます漁業はソ連の200海里水域設定(77.3)の影響を大きく受け、かへの研究を行ってきた北洋資源第二研は、84年のソ連水域における漁業の消滅により88年の当所の組織再編の財源となって研究の歴史を閉じた。その後さけます資源に関しては、国連海洋法条約を受けて、INPEC条約から母川国主義の確認と沖取りの禁止を定めた新たな条約が形成され(NPAFC:93.2発効)、この条約に基づく委員会への対応、特に海洋生活期における生態と環境収容力の変化への応答の解明についての調査・研究が今日の主要な研究課題となってきた。さけます生態研から再編された生態系研究室(94.6.24)が一貫してアクティブな研究活動を展開し、多くの研究成果を上げていることは明るい話題である。

一方、アカイカを対象とする流し網漁業は78年ころから北太平洋の公海域に拡大し、最盛期の87年には16万トンを超える漁業にまで成長したが、海鳥や海産哺乳類などの混獲問題が世界的な関心を集めることとなった。これに対応するため当研究所に外洋いか研究室を新設(88.10.1)したが、国連総会での大規模流し網漁業の禁



止決議(89.12)を受けて我が国のいか流し網漁業は93年に中止した。この研究室ではその後代替漁法の技術開発を進め、ついに大型のアカイカ向けの釣り漁法の開発に成功したことから、今後は混獲のないクリーンな漁業による資源の利用の展望が開けてきた。研究室の対象はさらに大西洋、インド洋にも拡大しつつある。

### その2. 海産哺乳類の漁業と研究対応

国連人間環境会議における米国の唐突なモラトリアム提案から10年、IWCにおける捕鯨国、反捕鯨国の票取りゲームは商業捕鯨モラトリアムの決定(82.7。ただし、3年後から実施)によっていったん決着した。この決定に対する異議申し立てを我が国が85年に撤回したのは、米国の国内法に基づく漁獲割当て量削減等の制裁を回避するためのぎりぎりの交渉の結果であった。この年に90万トンあった対日割当てが90年までにはゼロとなることは見えていながらも、巧みな時間差攻撃を仕掛けられたのだった。この結果、87年の沿岸捕鯨漁期、87/88年の母船式捕鯨漁期、88年のマッコウ漁期以降我が国の大型捕鯨業は消失した状態にある。以上が20周年の区切りまでの経緯である。

その後は南極海(87年~)および北太平洋(94年~)におけるミンククジラ特別捕獲調査に、小規模ながらも調査研究と技術の伝承の場をつないできた。小型捕鯨業は対象種をIWC管轄外のツチクジラ、ゴンドウクジラに代えて細々と生き残っている。この間我が国の科学者が中心となってIWCにおける鯨類資源の評価・管理手法の改革に関する科学的根拠の形成に取り組み、ほぼこれらについて決着を見ることができた。科学の世界では商業捕鯨の再開への準備は整ってきており、あとは本会議での3/4以上の賛成票の獲得に向けて努力が続けられている。遠洋水研ではまた、我が国沿岸のいるか類資源とこれを対象とする漁業についての調査・研究にも努力を傾注している。現在の小型捕鯨業およびいるか漁業に対する捕獲上限値の設定はTAC(漁獲可能量)そのものであり、海産哺乳類の資源の評価と管理に責任を持つ遠洋水研の業務として、行政上もこれを明確に位置づけることを望みたい。

国連人間環境会議でのモラトリアム提案に至った国内世論の高まりを受けて、米国は「海産哺乳動物保護法」(72.12)を制定した。これをよりどころとして、4か国間の条約によって毛皮資源として利用されているオットセイについては、もはや生態系の健全さの指標として保護すべき野生生物へと思想を転換すべきだと主張したが、

84年の条約改訂会議での再々度の単純延長の合意について米国議会の批准が得られなかった。これがもとで27年間続いた条約は失効するに至った。その後も遠洋水研ではオットセイの資源と生理・生態に関する研究を続け、バイオテレメトリー技術の開発においても著しい成果を上げてきたが、漁業対応を中心とする研究組織の構成の中で存立基盤を確保することは難しくなっている。

### その3. 遠洋まぐろ類の漁業と研究対応

以上に記したように、遠洋水研の創立10周年に胚胎していた芽はその後10年の間に確実に成長し、さらにその後の10年の間には我が国の遠洋漁業を厳しく抑制してきたのである。

遠洋まぐろ類を対象とする漁業は従来から国際漁業委員会での管理の対象となってきたこともあって、200海里時代の流れの中で漁場の縮小を受けつつも、今日公海における主要な漁業として存続している。この間、我が国のまぐろ類漁獲量は35万トン(カツオを加えて75万トン)程度とほぼ横這いであるが、世界の漁獲量の中でのシェアは20%程度にまで低下してきている。

まぐろ類資源の国際的管理の動きは現在も活発に続いており、みなみまぐろ保存条約(CCSBT:94.5発効)、北太平洋まぐろ類暫定科学委員会(ISC:95.1)、インド洋まぐろ類委員会(IOTC:96.3発効)を始めとして将来もさらに多くの国際漁業条約が形成される可能性があり、また、既存の国際漁業委員会における評価・管理の対象種が拡大しつつある。このような動きは、国連海洋法条約の発効(94.11)を受けて、公海上の漁船による国際的な保存・管理措置の遵守を促進するための協定が採択された(93.11)こととも連動している。

公海漁業の代表としてのまぐろ類については、はえ縄操業での海鳥、さめ、海亀等の混獲問題がクローズアップされてきており、この対応の成否がまぐろはえ縄漁業の存否を決しかねないことから、遠洋水研としてもこれらの分野の研究者を養成しつつ対応に努めている。また、IATTC水域におけるまき網漁業ではいるかを目印にして操業を行うため、海産哺乳動物保護法にもとづいているかの混獲が厳しく抑制されている。これに代わって最近では人工流木や浮き魚礁(パヤオ)を利用したまき網漁業が増えてきたが、小型魚の混獲が問題となっている。

遠洋まぐろ類だけでなく、我が国周辺海域に産卵場をもち渡洋回遊を行うクロマグロや、広範な南北回遊を行うカツオの資源管理のための研究の一元化の必要性はますます高まってきており、併せてまぐろ類資源研究体制

の強化が重点課題となっている。

#### まとめと展望

戦後8海区水研として分立した水産研究所の流れの中から設立された遠洋水研は、担当する海域が圧倒的に広いが対応すべき漁業はむしろ限定的であるがゆえに、研究所の存立基盤はこれらの漁業の栄枯盛衰と密接にかかわってきた。遠洋水研の創立20周年は、ちょうど臨調、行革審等の関連で総務庁による水産庁研究所組織の見直し作業の最中に迎えたのだった。この時には、200万トン、6000億円の生産を上げる遠洋漁業は依然として重要な産業であり、世界の200海里体制の進行につれて急増しつつあった国際対応への強化を図ることとして、遠洋水研の今日の組織の基盤を確立することができた(本誌68号参照)。

創立30周年を迎えた今年は周知のとおり中央省庁の統廃合、国立試験研究機関の統廃合等を含む行財政改革の審議の最中であって、一昨年超党派の議員立法によって成立した科学技術基本法とこれに基づき昨年制定された科学技術基本計画における熱意と政策は、ひとまず棚上げ状態である。一方で、国連海洋法条約の批准(96.7)等を背景とした水産庁行政組織の改正がこの10月に行われることから、この関連で水産庁研究所の在り方が検討されている。

遠洋水研ほど行政・産業に密着した研究を続けてきた国立研究機関はないであろう。このことを我々は誇りに思っている。我が国から見た地理的遠隔地で行われる「遠洋」漁業は、沿岸国の意向や資源問題だけでなく円高の進行や労働力の確保などの経営上の困難に直面して撤退・縮小の過程に至ったのである。しかし、この間の遠洋水研の対応の変化について一例を上げれば、平成8年度の海外出張(乗船調査を除く)は70回、延べ105名、1418日であり、昭和60年度の延べ日数の2.4倍にも達している。国際漁業委員会での議論も難しく、ややこしく、混獲生物など手薄なところが突かれるなど、楽になったどころか却って厳しくなっている。世界の潮流は環境と生態系における問題に対する海洋研究の貢献、資源研究による立証を求めており、遠洋水研の対応振りも拡大しつつある。

国際漁業委員会、特に科学委員会への対応は研究の最前線であり、研究者が自ら務めるほかはない。このことは「エージェンシー」震源地の英国においても、応用研究部門である水産研究所は農業食糧省の所属のままであることから確認できる。一方、研究職公務員に対する

人事院の期待は、基礎的・先導的な研究開発とその成果としての学術論文の発表が第1ということであろう。農水省の研究機関がそれだけでは済まない例として言われる手間ひまのかかる農業の育種研究にも資源研究は似ているが、しかし、それは残念なことに新品種の作出に結実することのない育種研究のようなものである。資源研究の成果は、当所の海洋・南大洋部で行っている海洋の環境と生産力の変動との量的関連を明らかにし、さらには生理学や遺伝学等の基礎研究の領域にまで深化しなければ、法則性を立証するには至らない。研究所、研究者としての多様な役割のバランスをどう取っていくかが問われている。

我が国が国連海洋法条約を批准しTACによる管理に移行した今日、遠洋水研は設立当初からの機能を点検・調整し、我が国の200海里水域を含む一貫した資源の評価と管理が要請されているところの高度回遊性魚種および海産哺乳類についての調査・研究を行う研究機関として、今日的役割を再確認してゆきたい。

創立30周年を迎えた遠洋水研の歴史を振り返るとき、この研究所を支えて頂いた産学官の関係者の皆様方に改めて感謝の気持ちをお伝えしたい。そして、かつてこの研究所に全身全霊をもって働いた諸先輩に敬意を表したい。現在ここに働く我々も、この機会を一つの区切りとして、胸に過る複雑な思いを噛みしめつつ将来の在り方を確立する決意で進むことをご報告いたしたい。

(所長)

## 遠洋漁業存続の必要性

石川 賢 廣

遠洋水産研究所が創立されてから30年の間に、我が国の遠洋漁業は著しい発展をとげた後、後退を余儀なくされ、その漁獲量をみると昭和48年の400万トンをピークに現在では100万トンを下回る状況となっている。これは、200海里時代の到来により沿岸国が漁業自国化政策をとり、我が国漁船の操業機会が著しく縮小してきたことに加え、公海域における各国間の競争の激化に伴う国際規制の強化や野生生物の保護、海洋生態系の保全に関する国際世論の高まり等の影響など、いわば外的要因が主因となっている。

遠洋漁業の縮小が余儀なくされてきたことから、遠洋漁業を政策的に存続させる意義を疑問視する向きもあるが、次の観点から今後ともその安定的な存続を図る必要があると考える。

遠洋漁業が主な漁場としている公海域においては、今後国際的な漁業管理機関による漁業資源の管理が更に強化されてくるとみられる。また、管理機関のない海域については、それを設定すべきである旨が国連の「公海漁業協定」に規定されているように漁業管理機関の設立が今後促進されることとなる。国際漁業管理機関における各国へのシェアの配分は、既存の管理機関の例からみても、それまでの実績が基礎になって行われることとなる。したがって、いったん実績を失えば公海域での漁業を復活することは不可能となる。我が国遠洋漁業の性格は、この30年の間に輸出志向型から国内供給志向型に大きく変わってきている。将来の世界の人口増加や動物性蛋白への嗜好の移行に伴う世界的な水産物への需要の増加が、我が国への水産物供給を不安定なものにする可能性は高い。したがって、我が国の食料の安全保障上の観点からみても遠洋漁業の維持存続を図る必要があると考える。

野生生物の保護や海洋生態系の保全との関係で、商業漁業（遠洋漁業）が国際的な議論の俎上に上がっているが、遠洋域で過度に保護色の強い規定が正当化されれば、それはやがて200海里水域内にも影響を及ぼす恐れがある。したがって、200海里内における漁業の存続をあらゆるような過度に保護色の強い措置をとることを強制されないよう遠洋漁業にその防波的な役割を果たさせるため、その存続を図る必要がある。

近年、世界の多くの地域で、国や地域が誕生し、今では約190の国や地域が存在している。また、それらの国や地域の多くは海洋に面しており、島嶼国も多い。この中で多くの島嶼国との間では、遠洋漁業を介して相互に漁業協力関係が成立しており、我が国と相手国の接触が頻繁に行われている。こうした漁業協力関係がトータルな両国関係にも好ましい影響を与えており、我が国の国際的立場への理解の促進に役立っている場合も多い。漁業が我が国外交の先兵の役割を果たしているのである。

例えば、我が国の国連安保理事会での理事国入りへの支援、サッカーのワールドカップ開催や万博開催の支持などで相互の漁業協力関係が少なからず好影響を与えているとみられる。

以上のように、我が国の遠洋漁業は漁業に占めるウエイトが少なくなったとはいえ、今後とも我が国の食料確保や数多くの国々との友好関係の促進に役立つなど、その果していく役割は大きい。

遠洋水産研究所は、我が国遠洋漁業を側面から支えるため、これまで遠洋域における漁業資源の調査、研究を

行い、その成果を2国間あるいは多国間の場での議論に活用し多大の役割を果たしてきた。今年で創立30周年を迎えるに当たり、その組織と機能を強化する方向で現在見直しが行われているが、今後より充実した研究機関となることを祈念している。  
(水産庁 次長)

## 遠洋水産研究所30周年にあたって



川本省自

私は、本年度で勤続30年になりますが、その内12年ほどが海洋一課北洋班、国際課協定班、遠洋課かつお・まぐろ班に在職して、サケ・マス・カニ、オットセイ、カツオ・マグロについてそれぞれ遠洋水産研究所とかなり深く関係してきました。

海洋一課北洋班に在職していた時は、北洋資源部がまだ北海道区水産研究所函館支所に有りました。当時の北洋資源部の皆さんには、日ソ漁業交渉の場や北洋の取締などで大変お世話になりました。

国際課の協定班では、ICCAT、IATTC、オットセイ条約を担当しました。マグロ関係はまだのんびりした時期でありましたが、オットセイ条約については条約改訂があり、オットセイ研究室にはなんども足をこんだ記憶があります。

次の昭和53年から58年までのかつお・まぐろ班在職の時はオイルショックと200カイリ時代の到来による激変の時期でしたが、特に記憶にあるのは、昭和57年のICCATにおける西大西洋海域のクロマグロの商業的漁獲の禁止と、メキシコ湾操業禁止です。

かつお・まぐろ班長を最後に、ほとんど国内漁業振興の方に行くようになり、平成7年に研究部長に就任し、13年ぶりぐらいに再び遠洋水産研究所と縁ができたわけですが、今遠洋水産研究所について感じることは二点あります。第一に、ある海域（現在では我が国経済水域）において資源を評価して、一定量のTACを定め、これを守って操業するというシステムは、かつて、長きにわたり北洋や大西洋で遠洋漁業が経験してきたことであるということ。今後対中国、対韓国に対し国内のTACを与え、操業を許可するというシステムは、今まで我が国がアメリカやソ連等に対しやってきた逆の立場になることであり、まさに、過去30年遠洋水産研究所が蓄えてきた知識を我が国経済水域の管理に積極的に活用すべき時代になったということなのです。



第二に、いわゆる遠洋漁業という分野に入る漁業が今後かならずしも全部消滅してしまうものではなく、時と場所を得ればかなりの部分生き残りうるものであるということです。

このためには、従来とは全く異なる新しい感覚で遠洋漁業政策を見直すことが必要であろうし、それについては、遠洋水産研究所が過去に蓄積した知識が大いに役立つであろうと思っております。

10年後、遠洋水産研究所40周年の時にどのような状況になっているかは予想困難であります。確実に言えることは、過去に固執することなく柔軟に状況に対応した組織の方が生き残りうるということです。

省庁再編というような大きな流れの中で、過去にこだわることなく、新しい状況に積極的に対応する遠洋水産研究所であってほしいと切望するものであります。

(水産庁 研究部長)

## 研究者が水産政策を主導する時代が到来

藤波徳雄

海洋は地球の表面積の7割を占め、そこに生息する水産動植物は無尽蔵であるとする幻想は、とっくに消滅しました。

魚介類の持続生産量の上限が1億トン前後であることは三十年ほど前からFAOが指摘していました。しかも世界の魚介類の生産が1989年以降この水準に達していることは同じFAOの世界漁獲統計に示されています。この事実を我が国がどれほど真剣に受け止めて来たかは疑問です。

世界の人口が増加を続け、来世紀の半ばには今の2倍に達すると予想されているのに魚介類を現在以上に捕獲すればその持続生産は不可能になるのです。明らかに、水産は生産拡大の時代から資源の維持・管理と漁獲物の完全利用の時代へと移りました。当然のこととして、水産の基本政策は資源の維持・管理を基礎として研究者がその立案を主導すべき時代となりました。事実、世界の主要水産国では水産政策樹立のリーダーシップは既に研究者の手に委ねられています。

我が国では、従来、特定の沿岸水域の特定魚介類を除いては、生物学的な立場から資源の管理を政策の前面に据えたことはなく、社会や経済のニーズに合わせて当面の国民生活の安定を図ることを主眼に水産政策が立てられてきましたので、研究者が政策立案の前面に出ることはありませんでした。

このような環境の下では、研究者が純粋に科学的なミクロの問題に興味を見出そうとするのは当然でした。しかし、今や研究者は自国の200海里水域全体、更には世界の全水域の資源の維持や管理のようなマクロの問題に責任をもたなければならなくなりました。このような情勢に即応するには、研究者が常に世界的な視点を持ち、進んで問題の解決に取り組もうとする資質が求められます。

20年に及ぶFAOの勤務を経て1977年に日本に戻った私はその後14年に亘って南太平洋諸国との漁業交渉にたずさわりました。対象とした魚種が主として高度回遊性魚であったため、遠洋水産研究所の皆様からは助言をいただいたり交渉に同行していただいたりしましたが、当時の研究者の意見は可成りアカデミックなもので、目の前に迫った交渉を主導するようなことはありませんでした。

南マグロの様に資源の制約が問題となった魚種もありましたが、当時は操業規制の要求は常に相手国から出され、我が国は研究者の意見をききながら不承不承相手国の要求を認めるのが通例であったと記憶しています。

勿論例外もありました。それは捕鯨問題です。ここでは我が国は「多くの国が反対しているのだから止めたらどうか」等と云う非合理的な俗論に科学的知見を以て立ち向い、世界もこれに耳を傾けるようになってきています。このことは、古い体質の我が国の漁業が、研究者や科学者の努力によって変りうること、更には世界の世論に影響を与えることを示しています。

今でこそ漁獲量世界一の座を中国に譲りましたが、我が国は永い間世界第一の漁獲量を誇り、その操業水域も全世界に及び、水産物の消費量は今日でも年間千二百万トンの水準を続け動物性蛋白質の半分を水産物から摂取しているのですから、水産資源の維持管理に対して世界をリードする責任があります。

遠洋水産研究所の皆様の御活躍を切に期待いたします。

(社)水産電子協会 会長

(社)海外水産コンサルタント協会 会長



テニスコート脇の松並木

## ネット裏から見た遠水研30年

米澤邦男

遠水研30年の歴史を私のような経歴を持つ部外者が恵まれた歴史であったなどと論評すると物議を醸しそうである。とくに、初期の日ソ交渉に動員された遠水研のOB諸氏にはとんでもないと反発される方もおられよう。

当時、日ソ交渉は国の一大事であり、冷戦構造の中でマスコミもこれを大きくとりあげ、毎年の交渉代表団の出発は多くのテレビ・カメラと記者団に囲まれ、百人を越す見送りの歓呼の声に送られるという晴れがましいものであった。とくに、当時の貧しい社会環境の中で庶民にとり、海外旅行など一生およびもつかない高根の花であったから、赤じゅうたんを踏んで映画スターのように颯爽としてゲートの中に消えてゆく代表団員の背には、外野から多くの羨望の眼が注がれた。代表団の片隅に立つOB諸氏にとっても、出発と帰国は晴れがましい舞台ではあったが、それでもその心情は必ずしも華やいだものではなく、そこに色々な屈折感があった。あったと断定するのは、彼等の屈折感は当時、私のものであったからである。

しかし、それを承知の上で私は遠水研は比較の意味で恵まれた環境にこれまで置かれてきたと考える。理由は色々あるが、まず平明に遠水研の学者が常に世界第一線の学者と直接切磋琢磨する機会を持ち得たことをあげてよいだろう。私の個人的体験でも、私の正面にはワシントン大学教授チャップマン、英国のガランド等の碩学、更に米国水産行政のカリスマ的指導者マッカーナン、動物愛護運動の理論的指導者ホルト等の論客があり、ある時期、毎年繰り返した彼等との論戦は私に知的なスリルとある種の充足感を与えた。遠水研の先輩、現役諸氏の中にも同じ様な感懐を持つ人が多数おられるものと私は思う。

遠水研のもう一つの正の財産として、自らの調査研究の結果が直接我が国の利益を左右するというものをあげてもよいであろう。勿論そこには行政が考える国益が果たして真の国益か、特定業界のエゴか、議論すれば複雑な要素が絡むが、こうした事情はどこにも共通する。辯護士の仕事であると割り切れればとくに不思議はないし、又、辯護士の仕事と同様そこに積極的な要素も入る。彼等の科学者の論戦から、衡平な資源評価と果実の分配が成立するという効用である。

実例として北洋のスケソウ、カニをめぐる日米間の資源論争があげられるが、ここではその後の歴史の思わざる展開がその見えざる側面を明らかにした。70年代に入

り米科学者は国連海洋法会議などを意識した米政府の意向を受け、わが国の北洋漁業をパルス漁業(一時に大量漁獲し、当該資源量が低下すると、他の漁場、魚種に向けて大量漁獲を繰り返す)などと強く非難し、漁獲量の削減を含む規制の強化を求めた。

しかし、その後10年、二百カイリ時代の到来後、自国漁民による資源独占が実現すると彼等はその主張を一変し、漁獲水準は往年のまま、更にその他の規制も大幅に緩和しようとしたのである。立場が変われば主張も変わるということであり、驚く方が阿呆ということであるが、彼等が漁獲量水準をそのまま維持したということは、70年から80年にかけての日米論争の中で、彼等の科学者の知識・能力がほぼ均衡していたことの証拠と考えるもよいであろう。

遠水研とIWCの係り合いを恵まれた歴史の中に加えることには若干躊躇もあるが、ここでの対立、論戦はわが国の既存利益の擁護といった次元を遙かに越え、世界的な意義を持つ。

70年に入り、西欧には極端な動物愛護運動の嵐が吹きあられ、西欧諸政府は反捕鯨を国の政策とした。政治的便宜主義による政策決定であったが、激しい巨大環境保護、動物愛護団体の圧力の前に西欧のジャーナリズム、知識人、科学者も概ねこれを支持し、特定の、しかも怪しげな信条を他国に違法に(IWC条約の目的・規定に違反する)強制することに異を唱えることもなかった。私はそこに西欧社会の危うさと驕慢を見るが(日本にも同じ危うさは存在するが)、90年代に入り、漸くその熱気もさめ、狂気の呪縛から解放される兆しがみえてきた。

歴史の必然と云えばそれまでであるが、日本の孤立した、しかし決然とした抵抗がなければ西欧の狂気は国際慣行として定着したに違いない。このことにつき、わが国の努力は賞賛されて然るべきであるが、その努力の中心には科学者の努力があった。わが国によるミンク鯨資源調査であり、IWC科学委員会における改定資源管理方式の採択の直接の原動力になった田中・櫻本両氏の業績などがその華々しい成果であり、遠水研はこうした努力を実現する中で中核的な役割を荷った。

さて、遠水研の歴史を恵まれた年月であったと総括してみたが、ここに来て遠水研を取り巻く環境は一変した。又、過去の歴史が恵まれたものであり、あるいは然らずとしても、その歴史が現役の諸君に力を貸すわけではない。明日を拓くものはいつも現役諸君の力であり、一層の発展をネット裏から刮目して見てゆきたい。

(元水産庁 次長)

## 創立30周年を祝して



上田大和

遠洋水産研究所が創立30周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。かつお・まぐろ業界を代表しまして、この機会に改めて、貴研究所関係各位の日頃の研究活動に敬意を表するとともに、かつお・まぐろ漁業へのご理解とご協力に深く感謝申し上げます。

顧みますと、貴研究所が設立されました頃は、わが国遠洋まぐろ漁業が大きな転換期を迎えておりました。即ち、戦後20年に亘って展開された急激な漁場の拡大遠隔化、漁船の大型化等の漁獲努力の増強による生産量の増嵩は、当時そのピークを越え漁獲量の増大が全ての生産コストを吸収する時代が終焉し、量から質を追求した操業を行う時代に入っておりました。

この操業の質的転換を可能としたのが、当時の技術革新によって生まれた超低温冷凍設備の開発でありました。これによって、輸出主体の加工原料供給産業から、高付加価値の刺身用まぐろの生産へと供給構造の変貌を遂げて今日に至っております。同時に対象魚種もびんながきはだから、めばち・みなみまぐろ主体へと移行しました。しかし、既にその頃から世界的にこれらまぐろ資源への懸念が生じており、当時から資源の持続的利用のための適正な管理と世界唯一の刺身まぐろ市場の安定というテーマは関係国間の共通の課題でありました。

そういった中で、昭和42年5月東京において開催された第1回アジアまぐろ会議には貴研究所からも参加頂いており、また、わが国政府は昭和44年3月に発効した大西洋まぐろ類保存条約 (ICCAT) へ発足と同時に加盟し、翌45年には、全米熱帯まぐろ類条約 (IATTC) への加盟へと、まぐろ漁業については国際的な枠組みへの参加が積極的に進められました。そして、昭和52年、世界的200海里体制時代の到来とともに、わが国のまぐろ漁業は、国際的漁業規制が強化される中で、世界中から日本市場へ搬入される「輸入まぐろ」との競争に晒されることとなります。一方、わが国のまぐろ市場もこの頃から流通構造の変化が始まり、輸入圧力の下で、生産者の魚価形成力が弱まることとなります。

それからの20年間に、わが国のまぐろ漁業経営は、資源管理の規制と、その規制の枠外からの市場参入の狭間で、存亡の極限にまで追い込まれる事態を迎えておりま

す。

しかし、遅ればせながら平成6年発効した国連海洋法条約のまぐろ漁業等に関する実施法である国連公海漁業協定が平成7年採択されました。これによって、今後世界のまぐろ漁業は地域機関の管理の下での操業が義務づけられることとなります。そして、その地域機関の管理の手法はICCATの貿易制限措置に見られるように資源管理を実効あるものにするために、生産の現場における規制から、貿易まで含めた資源利用の全体的管理を求める流れにあります。平成8年には、まぐろ市場国の立場からこの新しい資源管理の理念を国内法として受け止めた「まぐろ資源管理強化特別措置法」が議員立法として制定されました。

今後、まぐろ資源の管理と利用に関する地域機関の役割と権限は極めて大きなものとなります。また、その管理措置を適正なものとするためには、信頼性の高い科学的情報の収集が不可欠であり、その意味においても、わが国が世界に誇る研究者集団を擁する貴研究所が世界のまぐろ漁業に果される活躍の場は一層広がっております。既存の地域機関のみならず、新たに設立されたインド洋まぐろ類委員会、そして最後の空白域であった、西部太平洋においても科学委員会の設立が進められているところであり、貴研究所の今後益々のご発展とかつお・まぐろ業界へのご支援を心から期待する次第であります。

(日本鯉鯨漁業協同組合連合会 代表理事会長)

## 海洋生物資源研究の機関車たれ

島 一雄

遠洋水研の機関誌「遠洋」の編集後記「それでも地球は動いている」は私の好きなコラムである。1976年6月号 (No.22) のそのコラムに私が敬愛して止まない福田嘉男先生が200海里元年当時の心境を次のように述べておられる。

...昨年来、実は、この大地が地響きを立てながら崩れつつある。遠くからその音が聞こえて来て、すぐそこに近づいていることを必々と感じている...

昨年、国際捕鯨委員会が終って間もない8月頃のノートに、次の様な短い覚えがきがある。

「それは、恰も、予期しないではなかった洪水に、とうとう襲われて、必死の努力にも拘わらず、滔々たる濁流に、破壊され、引裂かれ、押流されて終わったようなものだった。水が引いたあと、一面の泥海のここかしこに、無残な残がい、その一部をのぞかせている。それを声もなく見つめている... その様な状態がいまも続いているのだ。...」



この先、色々書きとめておきたいことがあるにも拘わらず、どうしても滑らかに筆が進まなかった、...何も捕鯨に限らないことが、いよいよ明らかになって来た。外部がどうやらすっかり変って終ったようである。

ここ半年ほどの間、何度も、繰返し、状況を反芻している。どうして、このような変化が、転回が可能だったのか？管轄権の拡大が一体何を解決するのだろうか？

年の所為だと笑われそうだが、この変化はどうしても容認出来ないと思っている。どこかが狂っているのだ。君はそうは思わないか？

この頃、私はこの大きな変化の渦の中に巻き込まれ、そして刻々変化する渦の中に流されて今日に至っている。福田さんのこの言葉は、流され乍らも何時も私の頭の中にひっかかっている、繰返し、福田さんに「どこかが狂っているのだ。君はそうは思わないか？」と怒られているように感じていた。何時かこの時の福田さんの心境を詳しく伺おうと思っていたが、福田さんは早々と鬼籍に入られてしまって伺う術もない。

もうあと数年で20世紀も終わろうとしている。この一世紀を振り返ってみて、海洋生物資源に対する世界の見方は1970年頃を境として大きな変化が起こったと見られる。それまでは世界は海洋生物資源を人間の利用すべき資源、とりわけ食料資源を構成する重要な要素と位置づけてきた。しかし1972年の国連人間環境会議を境としてこのような考え方に微妙な変化が起こり始めた。「資源は有限なり、環境を守らなければならない」という大合唱の中で野生動物保護運動が前面にとび出してきた結果、野生動物である海産哺乳動物や魚は利用すべき資源から自然環境の一部として保護すべきものへと比重が移っていった。これに拍車をかけたのが200海里水域という海の囲いこみ運動である。野生動物保護を理由に、あるいは200海里内資源を沿岸国が独占するために、それまでの海洋生物資源の研究や管理の原則は放棄されたり、押しまげられた。福田さんの上に記した言葉はそのような変化を鋭敏に捉えられたものだと思う。

1972年の国連人間環境会議における「商業捕鯨の10年モラトリアム」はエスカレートして「商業捕鯨の永久禁止」へと向かっているし、「鯨を捕るな」から「鯨を食べるな」へと変質してきている。最近の反捕鯨運動が公海捕鯨の禁止と同時に貿易の禁止を主張していることはこのことをよく示している。何人かのIWCのコミッショナーは「鯨は資源でない」と明言して憚らない。海産哺乳動物や鳥類の混獲を理由として公海における大型いか流し網漁業やさけます流し網漁業が禁止に追い込まれ、欧米の環境団体が混獲や資源悪化を理由にはえなわ漁業

やトロール漁業の禁止の運動を行っているが、これらの運動の究極の目標は魚を食うなという所にあるように思えてならない。

欧米諸国が水産資源に多くを依存し、その有効利用を図ろうとしていた時代には、欧米諸国は水産研究に力を入れ、人材を投入して世界をリードしていた。例えばイギリスのロウエストフト研究所等はガランド等の多くの逸材を輩出し世界の水産研究をリードしていたが、現在は往年の面影はない。カナダの水産加工研究所は早々と閉鎖されてしまったし、世界の水産加工研究のメッカと云われたイギリスのアバーディーンにあったトリー研究所も最近閉鎖されてしまった。米国NMFSのサウス・ウエスト漁業センターのカリフォルニアサーデインの研究者は二人。一人が間もなく定年退職すると一人、後の研究はどうなるのだと米国の研究者も心配している。カナダのナナイモの所長であったビーミッシュが私に「これからの公海における水産資源のデータはどうやって集めたらいいのかなあ」とつぶやいていたのを思い出す。

従来は欧米主導で水産の研究や資源管理は推進されてきたが、これからはそうはいかないのである。欧米の水産研究者は最早自分達の力だけでは水産研究をリードしていくことは出来ない。日本も応分の責任を分担してくれと云っているのである。FAOの水産局長やOECDの水産委員会の議長、ICCATの科学委員会の議長に日本人が選ばれるようになったのはこのことを示している。もしかしたら、欧米諸国は水産問題を投げ出してしまったのかもしれない。

急速な人口増加と環境的制約から来世紀初頭には食糧危機が伝えられる。現在の世界の人口58億人。その中既に10パーセントが飢に苦しんでいるという。陸からの食糧供給は耕地拡大の困難さ、農業生産性向上の限界があり、更にO<sub>157</sub>狂牛病、口蹄疫、サルモネラ菌汚染といった問題があることを考えれば、海洋からの食糧供給を、そしてその可能性を確保しておくことは我々世界の同時代の人々に課せられた責任である。

誰がこの責任を果たしうるのか。日本をおいて他にない。日本やノルウェーといった国が機関車となって、太平洋、インド洋、大西洋、カリブ海の島嶼諸国、アジア諸国、北欧諸国等魚食国家を統合して、この責任を果たさなくてはならないのである。海洋生物資源の保存と合理的利用の実現に向けて、現在の管理の法則を根本から見直し、その再構築を図らなければならない時がやってきたのだ。かつて米英がやっていたように、日・ノルウェー等が中核となって世界の英知を集め、リードしてい

なければならぬのである。待たなすである。その場合、世界の水産研究をリードしていく中心とならなければならぬのは日本の研究所であり、とりわけ遠洋水研が中核とならなければならぬ。遠洋水研は今日までそれに値する仕事をしてきたし、なすうる能力を持っている。行政改革はそのような視点を入れて行わなければならぬのは言をまたない。

(日本水産資源保護協会 会長)  
(元水産庁 次長)

## 遠洋水研30周年に想う



多々良 薫

昭和 41(1966)年 8 月、研究所の周りには夏草が高く繁っていました。この高等商船学校跡地の草はらは海側の高い防風林まで広がり、焼け付くような午後の陽差しの中に油蟬の声だけが聞かれたものです。庁舎留守番の第一陣が到着した日の印象です。そう、真新しい研究庁舎

と 4 階建ての宿舎が一棟、この人影のない草はらに、締め切ったガラス窓が強い太陽光線を反射していました。

建物は見事にでき上がっているものの、まだ遠洋水研は存在せず、そこに在るのはたゞ輝くような金ピカの大きな空屋でした。留守番役の木部崎修室長以下の北洋底魚研究室が東海区水研所属のまま入居したのです。がらんとした庁舎を持てあまして、広々として明るい部屋に笑い声がこだまし、周りの砂地に拓いた処女地の畑には驚くほどの野菜が出来ました。スイカもナスもトマトも特大に育って稔ったものです。みな何も彼もが若くて新しく、外側に向かって大きく拡大する遠洋漁業のようでした。畑を作って遊んでいた10名足らずの中に、新規に採用されて北海道から出てきた白面の畑中(前所長)さんも居られたのです。

遠洋水研が当時 8 番目の水研として発足するまでには、水産庁の並々ならぬ努力と苦しい戦いがあったと聞いていました。折角建物は完成したのに研究所が発足できるかどうか全く分からない状況の中で、先頭に立っておられたのが松下友成研究課長(後の水産庁次長)でした。昭和 28(1953)年の平和条約締結のあと、日本周辺に閉じ込められていた漁業は、初めて領海から外に漁場を拡げました。北洋のサケマス漁業、以西底魚漁業、遠洋カツオ・マグロ漁業から遠洋底曳網漁業、そして捕鯨業な

ど、すでにその漁獲量は190万トン(1966年)にも達していました。遠洋水研の設置は当然のことと思いつつも、国会審議の行方を、留守番役の私共までが、固唾を呑む思いで見せていました。設置法通過に上げた乾杯は、希望に満ち溢れるばかりでした。そして続々と、南海区(高知) 東海区(東京) そして昭和45年には北水研(函館)から主力の研究者たちがやって来ました。...思い出は昨日のように鮮明ですが、あの日からもう30年が経ったのですねえ。

実に多くの方々が、遠洋漁業の発展に研究面で貢献されました。その中から、直接知遇を得た忘れられない先輩が居られます。松下さん、木部崎さん、長崎さんは眼鏡を掛けたその風貌が似ておられて、時々間違われると長崎さんが笑っておられました。まず、松下さんは遠洋漁業研究の組織編成の考え方を形あるものとされた恩人です。その判断と実行の早さは時に人を驚かすのに十分でした。木部崎修さん(故人、遠洋水研二代所長)は、西海水研での部長就任を目前にして東海区に新設された北洋底魚研究室に赴任され、部下の私共を大いに感激させたものです。研究に打ち込む熱血ぶりは、50才にして冬のベーリング海の調査航海に乗船、カムチャッカ半島オリュートル岬沖での鼻水を垂らしながらの魚体測定は、私共を大いに奮起させたものです。その後、木部崎さんは、遠水研、東海水研所長、そして水大校校長を歴任されましたが、その情熱と周到綿密な人柄を漁業発展と私共後進の育成に生涯を尽くされました。長崎福三さん(現鯨研顧問)は後に日本鯨類研究所理事長としてIWCにおける資源研究をリードしておられますが、その広い視野からのユニークな研究と冷静な科学者の見識で周囲を啓蒙して来られました。遠洋漁業研究の得難い先輩の一人です。

第二次大戦後の水産研究には、理工学系出身の大人材が入ってこられました。地球物理学出身の福田嘉男さん、土井長之さん、山中一郎さん、航空工学出身の田中昌一さん等々です。生物系出身の研究者に比べて格段に数理に明るく、その後の資源研究の理論の確立に貢献された恩人です。遠洋漁業の国際交渉にはこの方たちの活躍を抜きにしては考えることが出来なんでしょう。今日でも米加の同時代の研究者がこの方たちを敬意をもって懐かしく思い出してくれます。福田さん(故人、遠洋水研三代所長)は、当時日本が自発的に漁獲を抑制していたオヒョウ資源の評価に関する論議において、多くの米加の科学者を少なからず啓発されました。また INPFC(北太平洋漁業国際委員会)の科学委員会における英語人を驚嘆させた英語力と論理によって、米加科学者が一致し

て哲学博士の尊称を奉るほどでした。土井さん、田中さんの資源評価理論、山中さんの海洋研究での貢献は、ご本人たちにとって、今も良い思い出として胸に秘めておられることと思いますが、国際交渉の最前線で日本の立場を科学的に主張されたその懸命の努力が、遠洋漁業とその研究を今日あらしめていると思っています。

遠洋水研発足以来、遠洋底曳網漁業の研究を手がけられていた池田郁夫さん(故人、遠洋水研、養殖研究所長)も忘れることが出来ません。自ら遠洋水研の鬼軍曹と称して当時の若い研究者を叱咤激励して、多くの優秀な研究者を育てられました。後に日鯨研理事長として、鯨資源研究の陣頭指揮をする中で壮烈とも云える最後を遂げられたのは痛恨の限りでした。これらの方々的大部分が第二次大戦において、教育勅語～ご存知でしょうか?～「一旦、緩急あらば義勇公に奉じ」た人でした。そしてあの戦いの中で身近な親族や友の死を見つめた人達です。戦争で国の将来を思った日々、そして被占領下の戦後に絶対的な食糧不足を体験した日々、その経験が日本の再建と、飢えに苦しむ国民に蛋白食料を供給する水産国日本の建設に邁進させたのです。私にとっても、あの絶望的な空腹感とその由来が、水産研究の動機となっていた様に思われます。昨今の高級官僚や金融機関幹部不祥事、政界の墮落や内外の憂うべき問題の続発など、遠洋水研が輝かしい船出をしたあの時代精神はどこへ行ったのでしょうか。

さて、「アメリカとカナダはいま Salmon War をしている」とは当地カナダの新聞の大げさな見出しですが、そう見てもよい緊張が在ることも確かな米加太平洋岸漁業の今日です。日本の北洋漁業が拡大期にあった時代に、北太平洋公海漁業条約下の日米加関係では、米加が一致団結して、当時公海漁業資源であったサケ・マス・カニ・底魚などを利用する日本の漁業に有形無形の圧力を掛けました。外国の漁獲を排除した米加は、いまフレイザー河のベニザケ漁獲枠をめぐる厳しい対立関係に在るのです。条約交渉は決裂して、米加とも自制的な枠の中の自主漁獲ですが、無条約のまま両国はベニザケ漁獲を始めています('97.7 現在)。カナダの西海岸では、鮮魚ベニザケが650～1000円/kg('97.7～8)の価格で店頭に出回っています。その値段はともかくとして、新しい競合時代の、そして世界経済の中の商品であることに違いありません。隔世の感がありますが、国としての論理と威信をかけた戦いが科学者を含めて繰り広げられていることにも変わりはないのでしょう。新聞論調にも国と云う枠の中で科学者の発言を数多く見ることが出来ます。しかし、そういう状況の中でも、科学者の真摯な姿とは、

諸先輩が示されたように、時代をそして世の東西を超えて語り継がれるものであると信じます。若い研究者の皆さん、次の世紀を生きる皆さんが、新しい世界と時代の精神とを大いに吸収して、思う存分に研究に邁進されることを願ってやみません。

(第4代所長, 在カナダ e-mail:ytatara@direct.ca)

## 思い出と期待

林 繁一

遠洋水産研究所が設立されて30年が経つ。国会審議の混乱によって農林省設置法の成立が遅れて、折角の建物はできていたものの、東海区、南海区両水産研究所の清水庁舎として、広々と、しかし充たされないままに使われていた庁舎に活気が漲ったあの暑い日が思い出される。それから3年余りを経て北洋資源部の皆さんが函館から転勤され、世界でも有数の忙しい研究所となった。この間の関係者のご心労は設立20周年の記念特集に矢部初代所長が書いておられる通りきびしいものであった。

沿岸・近海の過剰努力の捌け口として積極的に振興された遠洋漁業は我が国の経済活動の一翼を担っただけではなく、地球規模の食糧供給に大きな役割を果たし、未知の、あるいは無視されていた生物生産の利用が始まった。北太平洋に年々数百万トンのスケトウダラの潜在生産量があった。典型的な捕食者であるかつお・まぐろ生産量は1965年の100万トンから1990年には300万トンに増加した。太平洋に展開して漁業活動はさけますの海洋生活を明らかにした。同じような例は底魚類、いか類を始め、動物プランクトンから海産哺乳類に至る多くの生物群で見られることはここに繰り返すまでもない。

遠洋水産研究所は海外漁場に展開した我が国の漁業の科学的正当性の主張を目的として設立されたといえよう。それは我が国だけの都合ではなく、当時主な漁業先進国は海外漁業資源の研究に力を入れていた。その一例として畑中前所長らが訳された1981年の米国海洋漁業局報告が挙げられる。そのために国際会議に出席した研究者達はかなり厳しい論議に巻き込まれた。その背景にはお互いの国益があったことはいうまでもないが、それだけではなく、彼らが関係している漁業生産に固有な条件の影響を受けた。国際会議ではお互いの文化的、経済的障壁に出会った。条約ではMSYの達成が謳われていても、現実にはMEYまたは逆にBEEが、あるいは余暇産業が求められる漁獲率の極度の圧縮が当事者の意識とは別に目的となった可能性があり、その合理化としてOY観念



が生まれたように思われる。この事実を認めると、相手の立場を尊重し過ぎることはできないにしても、お互いの立場を理解しないと、現実的な資源研究の判断とはならないということを誰もが学んだのではないだろうか。異なった立場の研究者の議論はそれが過度な政治的攪乱とか、いまもなお遺っている偏見の影響を受けない限り、科学の発展に結びつくものであろう。

水産資源は流れであり、漁業は揺れながら平衡を保っている生態系の中から特定の種個体群を取り出す攪乱である。さらに種苗放流事業も又生態系に特定の種、特に捕食者の個体群を選択的に増大させる攪乱ともいえる。ただし生態系の攪乱は漁業だけではない、農業も、工業も、都市化も漁業よりも大きな生態系の攪乱を続けているし、たとえ最小限の消費生活を営むとしても、人間は生態系の攪乱を避けることはできないという現実がある。この問題に関しても異なる利害関係に直面してきた遠洋水産研究所所員は貴重な経験を積むこととなった。

我が国の食糧自給率の急速な低下を憂える声は大きくなっている。海外における遠洋資源の開発を再評価した著作を非常に高く評価する人も少なくない。農作物程ではないにせよ、水産物の自給率が50%となり、漁業の産業としての魅力が危険なまでに薄れている。この研究所が計画された頃多少はお手伝いをした「危機に立つ日本漁業」という小冊子がある。現在では手に入らないし、考えにも未熟な所はあったが、その予測が不幸にして現実となってしまった。

農林水産業が衰退している現在、研究に期待する声は大きく、横井時敬教授が遺された「農学栄えて農業滅びる」という警句が一層現実的な意味を持ってきたとしばしば指摘される。産業の消長は科学技術だけで定まるわけではないことも見逃してはならないが、それにしても我が国の水産資源の利用に重要な役割を果たしてきた当研究所の一層の発展を期待してやまない。

( 東海大学 ) ( 第 6 代所長 )



玄関前の桜並木

## 遠洋水研職員OB会の結成を祝う



大隅 清治

人は、徒党を組む連中を「とかくメダカは群れたがる」といって蔑み、その一方、集団で行動しない者を「一匹狼」といってカッコよく思う、きらいがある。しかし実際には、オオカミは群れで狩りをし、大部分の動物が群れを作って生活している。動物が群れを作るのは、生存を

保証するための多くのメリットがあるからである。

ヒトは社会性の発達した動物で、小は家族から大は国際連合まで、種々の形態の群れを作る。同窓会もヒトの群れの一形態であるといえ、かつてひとつの組織に在籍し、現在はそこを去っている仲間の親睦団体であり、学校から職場まで、無数の同窓会ないしOB会が存在する。

水産庁・水産研究所のいくつかがOB会を組織しているようである。しかし、遠洋水産研究所にはこれまで、公式のOB会は結成されていなかった。ただ、東京近郊に在住しているOBの有志が、10年程前から自然発生的に集まって、一夕酒を酌み交わしながら、往事を懐かしみ、近況を報告し合い、互いの無事と健康を祝うという会が、1年に1度の頻度で開催されるようになり、それがこれまで続けてきた。初め池田郁夫さんが会長役を引き受けておられたが、亡くなってからは同じ職場にいるという理由で、小生がその役を引き継いだ。この会は、会則もない、全く任意の集まりにしか過ぎない。しかし、それが永く続いてこられたのは、事務局長役を引き受けてくれた竹内和男さんの献身的な奉仕のお陰であり、それにも増して、OBの多くの方々が毎回の集まりに進んで参加して、会を盛り立てて下さったからである。

先日、現所長の嶋津靖彦さんから連絡があり、遠洋水産研究所の創立30周年記念事業の一環として、「遠洋水産研究所職員OB会」を近く発足させる予定である旨の通知を受けた。かねてからその設立を強く希望していた者のひとりとして、小生はこの計画に両手を挙げて賛成した。そうなるとう東京のOB会は存在の意義と必要がなくなるので、事務局長の竹内さんに会の解散を相談したところ、彼も快く賛成してくれた。そこで、会員の皆さんに「遠洋水産研究所職員OB会」の発足の予定の通知と、これまで会合費の残余として貯った僅かばかりの金を、基金の一部として「職員OB会」に寄付することについて許可して頂くよう連絡し、寄付金を遠洋水研のOB会

準備室に送付して、希しくも8月1日の遠洋水産発足記念日に残務処理を完了した。

ところで、同窓会が発展し、長続きするにはいくつかの条件があるように思える。その第1は、強い連帯意識を持てることである。同じ釜の飯を喰った、一緒に苦労した、一緒に遊んだ、などという連帯意識が懐かしさに繋がり、同窓会への吸引力として働く。遠洋水産研究所時代に所員の皆さんと一緒に楽しんだ、ボーリングやバレーボールやサッカーや富士登山、玄関脇の廊下や会議室を使ったコンパなどが、小生には今も懐かしく思い出されて、当時の仲間に出会いたくなる。第2は、職場とその環境について誇りを持てることである。それが同窓会への求心力となる。小生は遠洋水産研究所が水産庁と日本、更には世界の漁業のために大きく貢献していると誇りに思っているし、美しい海・山と温かい人情に恵まれた清水市で生活したことを自慢にしている。第3は、会に何らかのメリットを感じることである。会の集会に参加しても、つまらないとか損をしたとかを感じたら、次に参加しなくなる。第4は、献身的な会のお世話役がいることである。会の運営は、日常的には、会費の徴収、会員名簿の整理、会計、連絡などの雑用があり、総会や懇親会の場合には、開催の日程調整、会場の選定、料理の準備、配膳、受付、会合費の徴収、会の進行、会場の後片づけなどがあり、世話役は何かと気を回さなければならぬので、個人の時間が削がれ、しかも無報酬である。だから、世話役は奉仕の精神がないとできない。そのような世話役に恵まれることが同窓会を長続きさせる。東京でのOB会がこれまで続いたのは、竹内さんがおられたからである。第5は、会の財政が豊かであることである。豊富な運営資金があれば、会誌の発行、色々な行事の開催などが企画でき、それによって会員の団結を強められる。そして、財政を支えるのは、会員による積極的な会費の納入である。

今、省庁の再編が強引に押し進められている。そして、全水研がその矢面に立たされている。そのような時期に「遠洋水産研究所職員OB会」が創立されることは大いに意義があり、心から祝福する。「職員OB会」は遠洋水産の応援団であるべきである。遠洋水産はこれまでも日本と世界の水産研究と水産業の発展に貢献してきたし、日本の国際的地位が飛躍的に高まり、国際化が一層進んでいる現在では、世界規模の水産と海洋環境の研究の基地としても、遠洋水産の責務は強まると信じる。我々は「職員OB会」に結集して、遠洋水産の更なる発展のために、応援の大きな旗を力一杯振りかざしたい。

(日本鯨類研究所 理事長)(第7代所長)

## 遠洋水産研究所と私



伊藤 準

遠洋水産研究所には通算26年8か月お世話になった。遠洋水産研究所発足の昭和42年8月1日から、退職した平成6年3月16日までである。それ以前は北海道区水産研究所に9年9か月ほど在籍し、両方の研究所を通じて北太平洋のさけ・ますに関与した。

この間、一言で言えば遠洋漁業の激動の時期であった。思い出の一端を記す。

### 1. 調査船データの重み

北太平洋に格子状に配置したさけ・ます調査船による調査点を毎年ほぼ同じ様な手法で調査したデータが30年も積み重ねられると大きな力を発揮する。いつどの海域にどのようなさけ・ますが出現するか、最小単位は旬別、緯度30分別(経度はそうはいかないが)に分かるのである。この資料は当時の北太平洋漁業国際委員会(INPFC)の継続的な課題であるさけ・ます大陸起源の解明に大きく貢献した。また、後になって発展した、あかいか流し網漁業の北限線(さけ・ますを混獲しないための)を決定するのにこれ以上最適なデータは無かった。さけ・ますとあかいかは南北に接して分布し、経済的価値の高い大型のあかいかは北側に集中して分布するので、あかいか流し網漁業の北限線を科学的根拠をもって決定する事が重要であった。このデータは多くの人々の努力によって積み重ねられた。現場でデータ収集にあたられた方々は言うに及ばず、格子状の調査点配置を守り抜いた方、採集されたさけ・ますが出来るだけ母集団を反映するように流し網の目合いの組み合わせを理論的に決定された方、膨大な調査船資料の機械集計システムを構築した方、精力的に鱗から年齢査定をした方等々枚挙にいとまがなかった。この資料に対する信頼性はINPFCの中でも非常に高く、積み重ねられたデータの重みを痛感したのであった。

(追記)ごく最近(平成9年7月)のことであるが、当時さけ・ます調査船として北洋で活躍した北海道釧路水試の旧北辰丸と所用で訪れた南太平洋のマジュロ(マーシャル国)で偶然再会した。第2の人生同士である。先方は相当古びていたがまだ現役であった。

### 2. 公海流し網問題

昭和53年ごろから急速に拡大した日本の公海いか流し



網漁業に対し、米国などの環境保護団体を中心として、流し網性悪説とも言うべき大キャンペーンがなされた時期があった。結果的には国連決議を経て、平成4年12月を期限として停止する事となった。この問題の経緯、オブザーバーの講習、混獲生物に対する漁業の影響評価などについて本誌では72号(伊藤)、76号(伊藤)、77号(早瀬)、77号(鈴木)、81号(岡田)、83号(畑中)に詳しく述べられているので、ここでは、個人的に印象の強かった事柄について述べる。

#### データ・ベースの並べ替え

いか流し網漁業の北限線の検討に関与していた時のことであった。先に述べたさけ・ます調査船のデータを、月旬別に経度ほぼ5度ごとに南北に配列して、どの緯度がさけ・ます分布の南限かを見定める必要があった。この頃はカナダもこの問題に関連して沖合に調査船を派遣し調査を行っており、日本に比べて圧倒的にデータ量は少ないものの、自分達で収集したデータをもとに論陣を張ってくることから、両国のデータを含めて検討する必要があった。日本のデータは外注で大型コンピュータに納められていたが、このような場合に小回りがきくのがパソコンである。当時はようやく各個人にパソコンが渡り始めた頃であり、若い研究者から教えてもらったパソコンによるデータ・ベースの並べ替え(経度5度ごとにデータを南から北に並べ替える)で一瞬のうちに結果が出ることは、古い時代にパンチカードなどを使って同じ様な作業をこなしていた身には大変な驚きであった事をおぼえている。

#### オブザーバー数の決定の理論的根拠

海産哺乳動物などの混獲数を推定するために日本漁船に外国人オブザーバーを乗船させるべしとの要求が外国側からあり、日・米・加のオブザーバー協議に出席したことがあった。その中で偏りの無い推定値を得るためには母集団に対し何人のオブザーバーを派遣したら良いかという議論があった。つまり標本調査法によるサンプリング数の決定である。サンプリング数は調べようとする事象の出現頻度の型に大きく影響される。さけ・ます流し網漁業で混獲されるイシイルカの混獲頻度分布から計算された必要サンプリング割合(カバレッジ)は7 - 8%程度であった。しかし、その後行われたいか流し網協議の時は違っていた。米国側は20 - 25%のカバレッジが必要という。正しくは、混獲される生物ごとに混獲の頻度分布は異なるので、各生物ごとに必要なカバレッジを算出し、そのうちの最も高い値を採用するのが原理原則と思えたが、そうはならず米国の主張には始めから何%

カバレッジが必要との決定が先行していた様に思われた。この事には最小のサンプル数で最大の結果を引き出すという標本調査法の理念など無く、はじめにカバレッジありきという感じであった。いずれにしてもこの流し網問題は、圧屈抜きで、日・韓・台の公海流し網を禁止に持ち込もうという米・加等とのせめぎ合いの場であった。

#### 流し網シンポジウム

INPFC 研究報告53号(3分冊)が平成6年に出版された。丁度私の退職の年であり、INPFCとして最後の出版物であった。これは平成3年に東京で行われた流し網シンポジウムの議事録であり、シンポの準備・運営から始まって研究報告の編集まで関与したことも記憶に新しい。

最後に遠洋水産研究所での生活は良き先輩、同僚に恵まれていたように思う。いちいちお名前を記せませんが皆様大変有難うございました。(第8代所長)

## 遠洋水研よ永遠に



畑中 寛

遠洋水産研究所が設立30周年を迎えましたが、遠洋水研と共に歩んできた私の研究人生を振り返りながら、遠洋水研や遠洋水研の職員の方々に感謝の意を表したいと思い、一文を寄せる次第です。

私は、遠洋水研が発足する一年ほど前の、いわば準備期間であった昭和41年の夏に移って参りました。そのとき23歳の独身でしたが、清水の地で結婚し、二人の子供をもうけ、学位を取らせてもらい、研究室長となり、部長となり、所長となって、29年と9ヶ月を過ごし、本年3月から西海区水産研究所に移ったところです。この間、遠洋水研を出て他の仕事もしてみたいと思ったこともあり、また、他からも話が持ち込まれたようですが、成立しませんでした。40歳を少し出た頃に、ある国立大学からお話がありましたが、他の水産研究所に移るといことは違い、悩んだ末にお断りいたしました。遠洋漁業や遠洋水研がどうなるのか先の見えない頃で、遠洋水研を思い切ることができず、どんなに厳しいことになるにせよ、その渦中にあり続けたいとの想いでした。

この間、教えられること、また、お世話になることの連続でした。惜しくも亡くなられた木部崎さん、福田さん、池田さんの3人の前所長からは公私ともにお世話になり、他のOBの方々から数々のご教示とご支援をい



いただきました。

私自身、研究三昧の暮らし(遠洋トロール研究室時代) 所内の雑用係(企画連絡科長) 所の運営(企画連絡室長、所長)と、全てを経験させてもらいましたし、世界の各所に行かせてもらいました。特に、公海流し網漁業に関わった際には、所内外の30名前後の研究者と、信じられないほど多くの予算と調査船を陣頭指揮する立場に立ちました。パンクーバー島のシドニー市で行われた流し網による影響評価の会議を終えて水産庁に報告に出向いたとき、当時の長官御自身より、お褒めとねぎらいの言葉をいただきました。水産研究所の研究者の中でこれだけ多くの人と予算と船を使わせてもらうという機会を与えられた者は他になく、研究者冥利に尽きることとっております。また、4年ほど前から鯨の研究に関わることとなり、所長業の傍ら研究者としても思いがけない働きがいのある毎日を送らせていただきました。

また、私は所内でもっとも古く、年上であることから、心の中では密かに自分の息子や娘のように思いながら職員の皆さんに接してきました。はらはらさせられたり、また良い仕事をしてくれて私まで鼻高々な思いをする毎日でした。今、私は遠洋水研を出て、外から見ていますが、遠洋水研の職員の方々は、研究者として、また、研究支援者としてそれぞれが努力を積み重ねられ、皆立派に育っております。そして、私のようなものを助け、信頼し、付いてきてくれたことを心から感謝し、また皆さんを誇りに思っております。遠洋水研で共に楽しみ、共に苦労をした思い出は終生忘れることはなく、私の今後の人生の宝物となっております。

これまで、遠洋水研が生き生きとして仕事を続け、行政、業界の期待に立派に応えてきたのは職員の皆さんの努力によるものですが、加えて、諸先輩の遠洋水研に寄せる熱い思いがあってこそであり、行政、業界の方々の御支持と御支援の賜と、深く深く感謝する次第です。

今、行政改革の嵐が吹き荒れ、水産研究所の組織がどのような形になるのか全く見えない状態にあります。しかし、遠洋水研の仕事のほとんどは他の国立研究機関でも、都道府県の水産試験場でも持ち得ないものです。近視眼的な意見に捉われず、高い視点に立って、また将来を見通して組織問題を考えてほしいと思います。もう消えゆく方向しかない私自身も考えていた遠洋トロール漁業ですが、業界は今その再生に向けて血のにじむような努力を重ね、その成果が現れつつあります。私はかつてその研究に携わった者でありながら、研究面からこれに何の支援もできないことを深く反省し、恥ずかしく

思っております。鰭脚類、外洋性いか類や外洋生態系の研究を続けることの理解を得ることは難しいかもしれませんが、しかし、我々の生存を海洋に依存する度合いが益々高まると予測されています。海洋を理解し、持続的に利用する上で重要な、しかも、遠洋水研だからこそ実施できる研究を次代に引き継いでいただきたいと願っております。遠洋水研の皆さん、たとえどのような嵐が吹き荒れようとも、30年にわたって培ってきた実績と己の能力を信じ、揺るぎない自信を持って信ずる道を歩んで下さい。 (第9代所長、西海区水産研究所 所長)



'84年4月7日 お花見会

## 時代の流れとマグロの研究

須田 明

遠洋水研の30年と声をかけられると、私の思いは忽ち50年前にまで駆け戻ってしまう。思えば、この50年間、わが国の社会は、戦後10年間の復興期、1950年代中葉から20年続いた高度経済成長期、そして1970年代中頃以降の豊かさの時代と目まぐるしく変貌してきた。マグロ漁業も変わったし、研究環境にも変化があった。魚市場が変貌して生産者市場でなくなり、算盤がコンピューターに変わり、そして何よりも、わが国の国力そのものが考えられない程に強大になった。こうしてマグロ研究の体質も変わり、課題も広がっていった。

私にとってもこの50年、途中15年間のブランクはあったけれど、結局はマグロとの道連れの人生50年であった。

.....  
編集者よりのお詫び

投稿いただいた原稿には、戦後の復興期から現在に至るマグロ研究を巡る貴重な歴史とエピソードも含まれておりましたが、編集上の都合により、やむなく大幅に省略させていただきました。近いうちに「遠洋」の定期号に全文を掲載いたしますのでご了承ください。  
.....

50年の来し方を振り返って、私がまぐるを巡って見てきたこと、その中でもとくに忘れられそうで忘れて欲しくないことどもを書き綴ってみたいと思ったのである。

(研究環境の問題)

外から研究を見ていると、魚市場のキャラクターの変化に伴う生物データ入手がひどく難しくなったことと、コンピューター時代の特性でもなかろうが、議論に乗せ得る課題の数が予想以上に増加しているように思われる。もう一つ、殆ど全てのマグロのストックについて資源評価が必要で、現在のスタッフで、それぞれをワッチ仕切れるかという問題もあるように見える。まず、の問題はさておいて、の問題についてみよう。

このことについて、1991年に私が日カツ連に帰ってきたときに、日カツ連や水産庁から期待されていたことがある。それは、マグロ研究チームを支援する外郭組織を作れということであったと思っている。そのために、マグロ資源問題懇談会(以後、マグロ資源懇と略称)が発足した。2年間、この線で動いてみて発見したことは、マグロ資源懇の線で支援することは難しいということである。その背景にマグロの研究が我々が思っている以上に孤立していることと、当面の対応で研究者が忙し過ぎることが挙げられる。データは遠洋水研で集中的に管理されていて、その外側へは殆どでない。遠洋水研のスタッフは忙し過ぎて他の研究機関、例えば大学とか水試の人との接触も意外と少ない。自分の研究について周囲の人の意見を貰おうとすると、その前に自分の仕事についての説明で疲れてしまう。こういう孤立状態が長年続いたようだ。遠洋水研の外側にはマグロの研究は育っていない。

ここで、例えば、鯨類研究所のような質の高い外郭組織の協力を得ることも考えられる。しかし、多分、実際にやってみると、遠洋水研の研究者は、多かれ少なかれ、マグロ資源懇の経験と同じものを味わうだろう。ただ、最新の研究手法についての現役で優れたスタッフをかかえているだけのメリットはあるに違いない。しかし、管理戦略に関しては、遠洋水研が自分で組み立てるほかはないだろう。マグロ漁業は経済水準の異なる国(船隊)そして、大きな需要と異質の流通機構を抱えた複合体である。共通のモラルなんて期待出来まい。早い話が、漁業者と流通業者のモラルは随分違う。日本のはえなわ漁業者のモラルと台湾のそれとは、これまた違う。多少の不平等はあっても、全体に同時に当てはまるような規範がないと管理は動かない。理詰めの資源管理理論だけではマグロの管理は出来ない。

結局、マグロ研究を強化するには、遠洋水研自身の組

織強化が不可決の手順ということになる。これが出来ないなら、取り組み対象をバツサリ整理することだろう。

[新しい消費モラルの提案]

最後に、21世紀にむけて、漁業資源を支えるために、消費について、新しい社会的なモラルの確立が必要なことを訴えたい。それは、資源の再生産を妨げるような生産物を社会に流通させない、また再生産を阻害する形で廃棄物を海に出さないというものである。

これは、漁業生産物の管理責任を社会全体で持とうというものである。今日、マグロの消費は国内生産物のみならず、殆ど同量の輸入品にまで及んでいる。この傾向はWTOもとでさらに加速されるだろう。当然、このように拡大した消費が生産意欲を刺激する。こうして、今日のマグロ戦国の世に入ったわけである。今や、生産意欲をコントロールしているのは消費である。それだけに、消費には資源の再生産を損ねないだけの節度が具わっていないと困るのである。

これまで、漁業生産物の管理は漁業者の範囲に限定されてきた。それだけに、資源の再生産に対する責任意識は、生産と流通・消費の間で必ずしも合致していない。そして責任問題は何時も漁業者の方に課せられてきた。これは一種の魔女裁判である。これを社会全体の責任として見直そうというのがこの提案である。

こういうモラルを徹底させることは、とくに規制問題に直面している漁業者を力付ける。一旦市場に出回ってしまうと、違反漁獲物が大手をふって流通するのでは悪平等が絶えない。勿論、この消費のルールは、わが国のみならず世界中の漁業者、流通業者と消費者の全てに平等に背負ってもらいたいものである。

(元浮魚資源部長)



涼しい木陰を作るセンダン



## 研究者を育てる事、研究者として育つ事



千國 史郎

「今日からは千國と師弟の縁を切る。今日を限りに私を師と思うな、私も弟子とは思わない。何時の日か遠洋研に帰って来よう、等と考える事は許さない。」これは、1975年10月の初めに、当時の所長で在られた故福田嘉男さんが、遠洋研で催された私のFAOへの派遣・赴任の送別

会で、冒頭に述べられたお言葉であった。「賤のお言葉」とは受け止めながらも、あまりに強烈なその文言に私は暫し呆然とした事を記憶している。その後は、家族共々に約14年間をイタリアのローマで暮らす事となり、「糸の切れた凧」の様な生業を続ける仕儀となった。福田さんのお言葉は、事実「励まし」以外の何者でもなく、その後に於いても「公・私」共に幾多の事柄で親身な御相談に預かり、特に派遣期間を終了して国連の恒久職員に転職する時など、大変なお世話になった。もともと福田さんと私との出会いは旧く、1956年に大学新卒で広島の内海区水産研究所（現南西海区水産研究所）に赴任した時に始まる。その後、1964年に遠洋研の発足を目指した北洋底魚研究室の創設期にも、先に東海区水産研究所に赴任して居られた福田さんの「あとを慕いて」の形で、広島から東京に出て行ったのであった。この様に、私の研究生生活の上で「公・私」共に、永い間の薫陶を得た師であったから、お亡くなりになった報に接した時には、遙かローマで夜な夜なベッドの中で秘かな涙に暮れたものであった。

此处で、遠洋研を離れてのお話になって恐縮であるが、福田さんと同じ様に私の研究生生活の後半期に、ご薫陶を戴いた方に故西脇昌治先生（当時東京大学海洋研究所教授、後所長）がいらっしゃる。西脇先生のご指導は、私の遠洋研での最終時期に、没頭していたアラスカメヌケの生物学的研究の学位論文を見て戴いた事から出発している。西脇先生にも、本当に「公・私」共に、家族ぐるみでお世話になった。だから、西脇先生の訃報に接した時にも、ローマで夜な夜な秘かに涙したものであった。

私の恩師とも言うべき方としては、もう一人イギリス人の故ジョン・ガランド氏が居られるが、この方については、此处では触れない。ただ、恩師であったこれら三人の方々は、皆さんが若死でいらっちゃった。地球的な視野で見ても、誠に残念な事であった、と言う他ない。

いま私はアルゼンティンに在住しているが、此の地からも改めて、お三方のご冥福を祈っておきたい。

さて本題に帰ろう。私は先に述べた様に、1975年10月に遠洋研を出て以来、FAO水産局本部に勤務して、インド・太平洋地域の沿岸漁業の振興に勤める事となった。その事は同時に、主として一人ぼっちで、自分の識見にのみ基づいて業務を遂行しなければならない事をも意味している。上司や仲間は居ても、原則的には師弟の関係は無い。1989年5月に、これも縁あって日本に帰り、海洋水産資源開発センターで仕事を与えられ、約5年間を過ごす事となった。其処での業務である開発調査は、興味深く且つ有意義なもので在ったから、其れなりに充実した生活を送らせて戴いた。しかし研究次元の領域は少なく、また部下達も開発調査に多忙で、とても科学的・学問的な思考を深める場では無かった。つまり、研究次元で私が指導出来る部下を持った仕事には、この20年間に携わった事が無かった、と言える。これは、私の選んだ分野のしからしめた結果であるから、それなりに満足もしている事ではあるが、有る意味では心淋しい思いでもある。

ここで再び遠洋研に目を転じて見ると、私が遠洋研を離れてからの20年余の間に、数多くの立派な研究者が育って来ている。しかも育った研究者達は、遠洋漁業の枠を越えた幅広い領域で活躍して居られる。私がおの昔、遠洋研で仲間として一緒に過ごした方々を見ただけでも、本家の遠洋研を含めて、北海道区水研、日本海区水研、中央水研、南西海区水研、西海区水研など、広い領域で多くの所長や管理的研究者に成って居られる。誠に嬉しく、また心強くも感じている次第である。この事は、私が福田さんから「縁切り状」を戴いた後に於いても、「遠洋研の管理的研究者」の中には、幾多もの「師」が存在して来られた事を意味して居る。また「育てられる側」にも、問題意識を持った「お弟子さん達」も輩出した結果でもあったろう。

昨今、遠洋研の縮小計画が検討されており、その事で研究者達に若干の動揺が起きている由に漏れ聞いている。機構の改編は、漁業の構造や生産の比重が変化して来た今、避けては通れない事かも知れない。しかし研究の場を「遠洋水産研究所」の枠内だけに限らないで、広い視野での「水産研究」として展望すれば、管理的研究者にあっては「うまず弛まず次代の研究者を指導する事」、また若手研究者にあっては「幅の広い次代の研究者に育ち得る様に努める事」が、「組織」としても「個人的な発展」の上でも肝要である、と言う事になる。その事は、



上に記したこの20年余の実績に照らしても明らかである。

遠洋研の皆さん、動揺や悲観をする事は全く必要がありません。自信を持って堂々と、培われた良い伝統を継承して行って下さい。道は必ず、研究所にも貴方にも、開けます。

今の私はアルゼンティンで、三人の中堅的研究者を抱えて、国際協力事業団の技術援助の仕事に没頭して居る。中堅研究者達に対しては、研究上の問題は本より、好適な研究環境の設定をも含めて、福田先生や西脇先生が私に対してして下さったのと同じ様な考え方で対応するべく、毎日を過ごして居る。そう努める事が、今の私が「師」に対して取り得るせめてものお礼の標となるからである。

(元底魚海獣資源部)

## 望 函 庵 記

山中 一郎

すでに本誌創立20年記念号に述べた様な牧歌的環境が残っていた遠洋研初期のトピックスの一つは皇太子殿下(現天皇)の御来訪であった。(美智子妃殿下はご健康のためかおいでになれなかった)。殿下はその2年前に東京で開催された太平洋学会議のマグロのシンポジウムに御出席になり、私とは3, 4席しか隔ててないテープで囲われた席に着かれたが、勿論お言葉をかわすことはなかった。今度は約1mの所で展示物について、「これなに」とお問いになったので極く簡単におこたえした。殿下は御父陛下(昭和天皇)の様に「あ・そう」とはおっしゃらず、うなづきながら軽い会釈をされるだけであった。説明に当たったものの中には緊張の余り稚魚の種類を間違えてしまい、熱心に解剖顕微鏡を覗いておられた殿下から「おかしいね」と言われ汗だくになって訂正申し上げるとか、保存タンクの中を照明灯を晃々と照らしたためホルマリンガスが充満し、随行の一同辟易したなか、さすがに殿下は興味深そうにいちいちご覧になり、そのため予定が10分も超過し、警備陣を慌てさせた。

在任最後の数年は全地球規模の気候海候変動、及び人工衛星の水産海洋研究への導入に力を注いだ。科学技術庁、IOC等の諸会議を通じて得られた情報をメモして各水研関係者に速報したが、生来の悪筆のためかえて不評を買った。あのころ今のようにワープロが普及してくれたらと残念に思う。

当時の科学技術庁やNASDAであつめた人工衛星の推進グループのメンバーは水産は私と当時の漁業情報サービスセンターの岡田鋭一氏だけ、後は全部天文、地球物

理、応用物理の顔ぶれ、私に取ってはかつての仲間の旧友が多いが、水産や海洋生物に対する興味を示してくれたのは東海大学の杉森教授のみ、日本の衛星計画に独自の水色センサーOTCSを取り入れることをある日の委員会で決定したのは、新幹線の静岡行き最終便に東京駅でやっと間に合う時間であった。

しかしこの実現は更におくれ、当時の何代も後の松村部長や東海大学福島教授の努力によりやっと1997年春にADEOS(みどり)が打ち上げられ、カラー写真が漁業情報センターから配布されたのも束の間、7月には早くも故障を起こしてしまった。後継機が作動するのは果たして私がこの世にまだ残っている内なのか、残念至極だ。

1992年にキャンパスも去り、思わぬ病気で九死に一生を得てから、あちこちの頼まれ仕事も、漁業情報センターの情報迅速伝達に関するものと、資源保護協会の国際海洋漁業情報収集システム(ASFIS)の二つになり、今年はずいぶんまで無欠席であったまぐろ会議にも風邪のため欠席した。(実はヘルボップ彗星の観測を町内会で冬空で毎晩指導したためだが)どちらも「在宅勤務」でファックス、電子メール、インターネット等が大活躍している。殆ど毎日、国内主要雑誌のアブストラクトの1-2編は目を通して編集している。

インターネットのホームページ(WWW)を探して歩くちょっとした国際会議のポスターセッションを回るくらいの情報が得られる。遠洋研のホームページも結構良いが、まだ最優秀とまでいかぬ。最も本当に手掛けてたえずupdateすれば要覧と連絡ニュースの両役にたとうが、人手や手間が大変だ。しかし我々現職を離れ、地理的にも離れ、出不精がちとなったものには有難い。(VirtualとRealの区別が付かなくなることの恐れは十分理解しているつもりだが。)

現在、地元住民の環境に関係ある住民団体に頼まれて函南町内の河川の流量、水質、雑排水の影響などの調査を住民と一緒にやっている。「井の中の蛙大海を知らず」の反対で「大洋のまぐろ小川を知らず」であるが、これもインターネットのおかげで水研時代その他陸水環境の専門家の意見や指導を得ることが出来、また農民の河川に対する理解と関心の高さ(漁民と海洋との関係に相当しよう)で何とかやっている。といっても何も予算は付かぬ。(水質分析用簡易試薬若干のみ町からの補助金を廻して貰った。流速計も手作り、ネジ一本自由にならぬ南方の航空廠で、俺は電気だ、俺は物理だの云って居られず、ポンコツ機の残骸を組み立ててゼロ戦数機をつかった戦友(時代がかった言い方)の苦戦を身を持って

体験した戦中派の意地と云うべきか。年寄りの冷や水か。)

いまでも遠洋研での研究や、学会の議論の夢をみる。田内・宇田・相川等の大先輩、まだ若く世を去られた山中(一)・奈須君たち、それに Gullnad, Ahlstrom, Lasker 等々、勿論御健在の内外科学者も登場する。不思議なことには夢の中では英語が自由自在だ。時に英語で怒鳴って妻の目を覚まし文句を云われる。この分ではまだ不垢不浄の彼岸に達することはできなさそうだ。

(元海洋部長)

## 第4楽章への期待



上柳 昭治

遠洋水研OBとしての歳月が、30年の半ば近くの年数になりました。この春定年を迎えた東海大学で私が担当して来た“水産資源学”の授業の初めに、次の様な話 - 「昔、アイヌの人達は、川へ遡って来るサケの資源を利用するのに、熊のため1/3を残し、もう1/3を将来のために残し、

残りの1/3を自分達のために漁っていた、ということです。今、隣の遠洋水産研究所では、遠洋の水産資源の利用について、科学的に最も妥当な数値を求めるための研究を努力して進めています」- を枕として、毎年学生達に語って来ました。

30年にわたり、同じ折戸の空気を吸い、おつきあいをいただいて来た隣人としての思いと、毎年10名を越える卒論学生がお世話になった感謝を合せて、創立30周年を共に祝いしたいと思います。

遠洋水研の旧館は、建築デザインの賞をもらったと聞いた記憶がありますが、構内の松林の枝越しに建物が散見されるたたずまいや、敷地をめぐる緑の濃い調和的な風景は、折戸に住む人たちの眼を楽しませ、遠洋水研を訪れる人々に親しみを与えて来たものと思われます。

中庭の景観については、隣人の私もしばらく気づかなかつたうちに、ユーカリの木が亭々たる大樹になっていたり、大学から道路越しに花見が楽しめるほど櫻の木が育っていて驚かされました。

かつて私がホルル水研やラ・ホヤの研究所を訪れた時に、「こういう環境の中では、きっとよい研究の発想が浮かぶだろう...」と羨望した情景に通ずるものを、今、遠洋水研の自然環境に見る思いがします。

遠洋水研には当初から、すぐれて植物好き、園芸好き

の人が多くいて、敷地内の環境整備を心がけて来られたように思います。照る日も小雨の日も、仕事の合間に、黙々と芝生の手入れに精出していた庶務課のAさんの姿が、懐しく思い出されます。

ユーカリの樹を見ると、外国出張の度にひそかに持帰った植物の種を研究所の庭に植えながら植物の話をしてくれた、福田さんの面影が浮んで来ます。福田さんは、時々所長ゼミを開いて、思索の成果をレクチャーしてくれたり、また雑談的に、研究者のあり方について示唆に富んだ話をされました。

外国と日本の研究者を比較して、「外国の研究者は、或る目的を設定すると、その達成のために、total としてsystemとしての質を上げることに最も考慮を払う。というところが全体に最も効いてくるかに注意し、局所的な質の低さは問題にしない。というように balanced effortを心がけるようだが、この点、日本の研究者は全体感覚が概して足りないようだ」という言葉や、「断片的な知識が現実には有効に働く場所が多い。これに対してもう少しまともな評価をし、知識をバラバラにせず継承して行かねばならない」と言われたことなどが、今も心に残っています。

創立以来30年の遠洋水研の歩みを、もし音楽に譬えるならばオリジナルな交響曲“遠洋”の第1楽章から第3楽章まで演奏が続けられて来たところであり、私もオーケストラの一員として(第1楽章から第2楽章の半ば迄ですが)参加できた幸いを思います。今、変化に富んだ難曲の第3楽章の演奏が終り、余韻を楽しみつつよいよ第4楽章を迎えるわけですが、私は、ブラームスの第1交響曲のそれを聴くようなときめきを持って、“遠洋”交響曲第4楽章への期待感を増しつつあります。

(元浮魚資源部長)

## 30周年に思う



大滝 英夫

早いもので、20周年記念行事をどうするか色々相談したのが、ついこの間のような気がする。今は昔、遠洋水研が正式発足する前のこと、月島に間借りして北洋資源研究を始めておられた敬愛する木部崎さんから(2代所長)チームへの参加のお誘いを受けた。私は、当時ピークに

達していた以西底びき網漁業の研究の将来を考え、新規

の仕事には当然人を増やすべきだという考えから、後の補充を問題にして、木部崎さんをひどく怒らせてしまった。それからほぼ20年、すでに以底びき網漁業はかけりを見せていたが、我が国の遠洋漁業も200カイリ制度で多難な状態に置かれていた。その頃ひょこり来訪された福田所長(3代所長)からまたお誘いを受けたが、これも丁重にお断りした。ところが、それから間もなく多々良所長(4代所長)からのお誘いに、もうわがままを通すのもこれまでかと観念して、最後の5年間を遠洋水研で過ごすこととなった。考えてみると誠に奇妙な縁である。

その5年間は、海洋部の海洋・南大洋部への組織替えの体制づくりで始まり、後は旧底魚資源部の国際漁業対応研究のお手伝いで過ごした。しかし、折から1980年代に入り作成された各水研の研究推進構想の更なる検討、1983年の技会の農林水産研究基本目標を受けて、1986年の研究目標策定、組織見直しの行監ヒヤリング、1987年の遠洋水研の研究基本計画策定、研究レビュー(技会)等々相次ぐ研究見直し、組織見直し、将来計画立案等でかなりの時間を振り回されて終わったという感じがする。これらの中には貴重な時間を割いてなぜこんなことをとすることも多かった。

そんな中で、特に印象深いのは北洋底魚資源の研究にまつわる生態系モデルの導入である。それまで、日米共同底魚資源調査結果に基づき、毎年定期的に開かれる日米研究者定期協議で資源の評価と管理が行われてきた。ところが、米国は1984年、急に許容漁獲量の算定の一部に生態系モデルによるシミュレーションを導入し始めた。こうなると、わが方も相手の手の内を知らなければ太刀打ちできない。ということで、急遽所内で勉強会を開いたり、水産庁の委託調査で日本エヌ・ユー・エス、大学、水研の検討会を組織する等の手を打った。1985年には米国のよりどころとなっている Dr.Laevastu と Dr.Fukuhara を筑波に招いて、全国的な水研・大学の有志を集めた研究集会を開いた。

しかし、米国のモデルが実用的に問題があることが分かった時には、そんなこととは関係なく、200カイリ体制の進む中で、日本の漁業はベーリング海から締め出されて行った。我々は残された公海、ドーナツ水域で開洋丸によるスケトウダラの魚探調査を企画したが許されず、鬱鬱たる気持ちでカリフォルニア沖のマアジ資源の調査に出かける羽目となった。幻のアジは最後に5匹だけとれて終わった。この時ラホヤでお世話になった今は亡き Drs.Lasker、Clawe、MacCall と当時南西漁業センターに滞在されていた辻祥子さんのあたたかな対応が忘

れられない思い出として残っている。

折戸における日常は様々な思い出を作ってくれた。故人となってしまった山中一さんに乗せられ自治会長を引き受ける羽目になり、折戸連合自治会の皆さんとお付き合いする中で、折戸における水研のあり方なども学ぶことができた。サッカー所だけに、若い人たちとよくナイターのサッカーを楽しむことができた。劣悪化するテニスコートを維持し、弱体化するチームの再生を図ったが力不足で、過去のテニス部の栄光を維持できなかった。毎冬行われる折戸駅伝も若い人たちと一緒に賑やかに参加したものである。

戦後短期間に採用された、大正から昭和にかけての我々団塊の世代が退いた後、各水研いずれも若返りが図られ、新海洋法時代における多様で困難な研究に取り組んでいる。行革がらみかまたも組織いじりが噂されているが、研究者がじっくり腰を据えて研究に打ち込める環境づくりこそが今一番望まれるのではないだろうか。

(元海洋・南大洋部長)

## 自分の中の遠洋水研時代



高木 健治

函館から清水へ移転して間もなくの頃、流網選択性の総説的論文の数式展開に良く判らない部分があり、当時の福田嘉男企画連絡室長に訊ねた。私の疑問に対して懇切丁寧に解説して戴き、お陰ですっきりと理解できた。その後の雑談の中で、調査用流網の発案者の石田昭夫博

士が転出したので私が担当する羽目になったことをこぼしたところ、ものすごい剣幕で叱りとばされた。福田室長の怒りは、書生みたいなことを云うな、プロ意識をしっかりと持て、という点にあった。私には叱られた経験が殆ど無かったので、当座は強い衝撃を受けたが、冷静になってから清水に移転したお陰で真剣に怒りをぶつけてくれる先輩と出会ったと自己納得した。その後、時間をかけて知恵を絞り、網目選択性を究明する上で独創的と自画自賛できる調査計画を練り上げたが、実行する機会を持つこと無く今日まで来てしまい、幻の計画のままに終わった。

生まれつき単純な思考の持ち主であり、些細なことに感激し過ぎるのかも知れないが、藪田洋一北洋資源部長からサケ・マス漁獲有効時間帯調査のために1隻の用船



使用許可を貰った時は嬉しくて飛び上がった。それまで定型的調査航海の乗船担当が長年続き、自分が立案した計画で調査船を運用する機会をその時に初めて得たこともあって、夢中になって取り組んだ。試験操業のデータをその場で分析しながら翌日の操業細目を修正するやり方を採ったので、調査船側には苦勞をかけた。用船若潮丸の平野井篤船長は、私の説明に辛抱強く耳を傾け、良く理解して惜しみなく協力して呉れた。

流網・延縄の短時間同時操業を24時間に亘って実施したり、投揚縄時刻を変えた延縄の針毎の漁獲物をサンプリングしたり等の非常に欲張った調査内容であったために、船員諸氏には過重な労働を強いることになってしまった。その点は甚だ申し訳なかったが、お陰で海洋生活期のサケ・マス漁獲有効時間帯の存在を確実に実証することができた。

現役時代には誰も自己の最善を尽くして職を全うし、時には歯を食いしばって奮闘してきている。200海里制度の定着化につれ北洋サケ・マス漁は厳しい規模縮小を余儀なくされ、それに携わる調査研究陣もご他聞に洩れずソ連・アメリカ・カナダを相手に悪戦苦闘の日が続いた。期日に追われた時には大晦日の深夜まで残業し、正月休みを返上して対策資料の作成に没頭した。対外交渉前のいわゆる日日交渉が難航したこともあった。当時の遠洋水研ではどこの研究部でも多かれ少なかれ同様な条件下であったように思う。

国際漁業交渉の修羅場の前座や裏方を務める体験を通じて、ある種の強靱さが身についてくるような気がする。

外国の科学者達と知己になり、良い意味での刺激や影響も受けた。共同研究のために来日した彼等と余暇にキャンプへ出かけたり、テニスに興じたりしたのも楽しい思い出の一齣である。

遠洋水研チームが清水市のテニス団体戦2部で優勝して1部へ昇格しかつ維持した頃は、遠洋水研テニスの隆盛期とも云うべき勢いがあったし、愛好者の数も多かった。その人達の多くは他の水研へ転動したり、あるいは退職した後もプレーを続けており、毎年開催される水研テニス全国大会へ参加し、旧交を温め合う。これもまた誠に楽しい一時である。 (元北洋資源部長)

## ひとむかし前のはなし



阿部 眞雄

私が遠洋水研の庶務課勤務を命ぜられたのは昭和62年(1987年)4月、今からちょうど10年前のことである。うかつにも着任してから創立20周年記念の行事が計画されていることを知った。記念行事と構えれば、片手間でお茶をにごすようなわけには参らない。取り組み方によって

は所を挙げての大イベントになる。いずれにしても庶務課はおおいそがしのでんてご舞いと心構えはしたものの、5月に入っても所内にそれらしき動きは感じられない。新米が騒ぎ立てるのもどうかと遠慮しながら聞いてみると、昨年暮れに実行委員会が設置されて、記念行事を8月7日に開催することだけは決定しているという。具体的な実施要領は、全水研サッカー大会が終わる7月26日以降になるのではないかと慌てない。それから話が始まって8月7日に実施では、準備の方は大丈夫かと口を尖らす私に先輩は言った。ここの連中は一見ツンとして他人を装っているが、ことが決まれば仕上げは早くて確かだ、心配するな。ともあれ走り使いの立場も慮ってくれたとみえて、7月に入ると記念行事は急速に具体的になってきた。

記念式典には40人程度の先輩・OBの出席が予想される。行事経費はすべて在職職員の会費(1人当たり3千円)の範囲で賄う事が決まった。赤字が出た場合は部長が負担することになったから、支出が大幅に抑えられる方向になってきたのは仕方がない。記念式典の会場は折戸公民館を無料で借りる。祝賀会場は庁舎内で済ますことにして、会議室をメインに玄関ホールとそれに続く廊下にセットされた。会場の雰囲気盛り上げるために女性パートの参加を懇望したが、会費1,500円の拠出を願う徹底ぶりである。更にオードブルの無償提供を各部にお願いした。魚体解剖に手慣れている研究室には、一人二人の包丁師(?)がいるのでオードブル作りは無理ではないが、遠洋水研でなければ口にできない特製のオードブルという注文だから食材の入手には苦勞されたようだ。

祝賀会は樽酒の鏡割りで始まりマス酒で乾杯する。生ビールは樽から直接大ジョッキで受けて豪快に飲もうという趣向である。そのほか洋酒・焼酎のコーナーを特設して、カクテルの要望にも対応できるオールラウンド体

制を整えた。今から考えると何でもない演出だが当時では結構斬新に映ったし、懐具合を考えると勇氣ある決断であったと思う。が、そのしわ寄せは最後の引出物にきた。遠洋水研要覧と水研ニュース20周年特集号、それに乾杯の際に用いた一合マスだけが引出物である。それらを書類袋に入れて帰り支度の来賓にもっともらしくお渡しするのだから、申し訳なくてただ深々と頭を下げるだけ。とても目を合わせるようなことは出来なかった。

もともと引出物はそうではなかった。当初の計画では遠洋水研のシンボルマークを制定し、それをデザインした特製のネクタイピンを引出物にするはずだったが、プロの試作したシンボルマークが実行委員会承認されず棚上げされたのである。若し計画どおりネクタイピンが作成されていたら、予算の都合から祝賀会はこうはならなかったのではないかな。

こうした慎ましい予算事情であったから、職員の家族の招待についても気に掛けながら話題に乗せることができなかった。10周年記念の際は家族ぐるみで地曳き網を楽しんだと聞いていたので、祝賀会への参加を呼び掛けたいと皆思っていたのだろうが、会場の都合でどうにもならなかった。一部の家族の方にはオードブルの作製指導や会場の後片付けを手伝っていただいたというのである。そのほか記念講演の謝礼、会場借料、看板書料、生花代などは無料にさせていただくか来賓の方からいただいたビール券で勘弁していただいた。

- という、いかにもしょぼくれた記念行事と受ける向きもあるかと思うが、どうしてどうして、記念式典の行われた公民館では備え付けの椅子が不足して、急ぎよ遠洋水研から運び入れる有様。式典が終了すると出席者はそのまま徒歩五分で祝賀会場へ流れ込んで来たので、会議室、玄関ホールは一瞬にして人波に埋まった。会場から溢れた人々は玄関前の松林の中に幾つも輪をつくって談笑していた。その間を大ジョッキを捧げた法被姿の職員や、オードブルを運ぶ女性が小走りであわただしくゆきかうという盛況であった。

これだけ出来れば上々だと大方の評価を受けた。すべては当初先輩が明言した如く 一見ツンとしているが、仕上げは早くて確かな連中の仕業である。感服の外はない。

余談だが会計は予期せぬご祝儀のおかげで、収支ほぼ見合った決算ができた。しかし各部から提供されたオードブルの材料費や、打ち上げなどの費用までは手が回らなかったの、部によってそれなりの追加負担があったものと察せられる。また会場入口に掲出された『遠洋水産研究所 創立20周年記念式典会場』の書は、清水市在

住の平野耕雲先生の筆である。私はこの書を今も秘蔵して時々拝見しているが、文字の和やかさと輝きには、しばし至福の刻を感じている。もちろん、申出があればお貸しすることに吝かではない。

本業のことを少し。

俗に管理職手当と言われる俸給の特別調整額は、月の1日から末日までの全日数にわたって外国に出張中の場合は支給されない、ことは承知していた。と同時に一ヶ月以上の外国出張は、遠洋水研に該当なしとも思い込んでいた。ところが 公海も外国に含まれる という旅費法の中の定義が、唐突にも管理職手当の運用に借用されていることを知らされた。即ち、公海も外国だから、例えば漁業調査のため公海上に出張することも外国旅行であるというのである。恥ずかしい話だが、不勉強の私は全くその事を知らなかった。

調査船による一ヶ月以上の漁業調査は、めずらしい事ではないので慌てた。劣悪な職場環境や乗船調査のための旅費調整は諦観するしかないが、更に管理職手当がカットされるのだから騒動である。どだい航空機による外国旅行と、調査船上の漁業調査を同一視することに問題があるが、それを前面に掲げると単に業務内容の比較で処理されるおそれがある。実態調査にみえた人事院には、人事院規則の旅費法の整合性について見解を説明し、公海上の漁業調査は外国旅行にあたらぬことを要望した。暫くして人事院から「法律解釈上全く問題がないかどうか研究する余地があるので検討を続けたい」と口頭回答があった。要望の趣旨は人事院に理解されたと満足したが、現在どう取扱われているか知らない。

(編集者注：その後、平成2年に人事院規則の改正があり、「外国に出張中の場合」の条項が削除され、支給されることになった。)

私の宿舎は折戸三丁目、庁舎から1キロ足らずの距離である。宿舎を一步出ると富士山が端座している。海鳴りが聞え波のしづきが届く近さに駿河湾が迫っていた。松林の中に一棟だけの省庁別宿舎だから独特の文化(?)が息づいていた。例えば、ある日突然庭の真ん中で焚火が上がり住民が三三五五集まってくる。やがて金網の上のサンマやイカをつつきながら酒盛りが始まる。ほんとに予告もなくある日突然であるが、梅雨時の一瞬の晴間とか、そのタイミングが絶妙で仕掛け人の業を感じさせた。年末には餅つきがある。大釜にせいろうが重ねられ蒸気が吹き上がる。臼・杵が揃って昔ながらの本格的な道具立てである。集まった大人と子供が競って杵を振り上げた。締めくくりは何時ものように酒盛りとなるが、

女性子供も飲み食いに興じて最後まで賑々しい。その頃の様子がいまだに話題になって、年賀状を飾ったりしている。

最後は親愛なる園芸クラブを忘れることは出来ない。園芸は私の趣味からすれば一番縁遠いが、新参者は万事に従順でなければと誘われるままに入会した。しかし、園芸クラブの行事は何時も小宴か花見・旅行の類いと決まっている。いささか奇異に感じたのでそれとなく古事来歴を探ってみた。確かに数年前までは土いじりが専門であったが、庁舎の増築や樹木の成長で活躍の場を奪われ脱皮を繰返している内、気付いたときは親睦会一筋に変身していたという。私が転出した後、エンゲイクラブに改名したと仄聞したが、今も昼夜を分かたず活躍を続けているだろうか。

あれから10年が過ぎた。大分県の辺地に在って、ときどき遠洋水研を懐かしむ。 (元庶務課長)

## 遠洋水産研究所の3年半の思い出

佐伯靖彦

遠洋水産研究所30周年記念おめでとうございます。10年前20周年記念を担当させて頂きました私にとって、あれからもう10年の歳月が過ぎたかと思うと感無量です。

遠水研にご厄介になった昭和61年(1986)10月から平成元年(1990)4月までの3年半、公私共に本当に楽しい日々を過ごさせて頂き感謝しております。単身赴任生活は初体験でしたが、怖い女房の目も五月蠅い子供の声もなく、何を食べようといつ寝ようと気促なもの、延びのびと自由を満喫する毎日でした。

今年の10月には水産庁の大機構改革があり、遠水研も影響を受けるとの噂を聞いていますが、10年前にも遠水研お取り潰し、改易のピンチがあったことを思い出します。

丁度臨時行政監察による機構改革が猛威を振るい、中部管区行政監察局は前年度に野菜試験場と茶業試験場を合体させ、野菜茶業試験場なる奇妙な組織を誕生させましたが、次いで同じ管内の遠水研に目標を絞った様です。昭和61年(1986)の10月、名古屋の行政監察局で行われたヒヤリングでは、林所長と高木部長がINPFCの年次会議で不在の中、大隅企連室長が名古屋に出向いて説明をされました。企連室長は200海里体制の中で今後の漁業交渉における資源研究の重要性を力説され、それなりの理解を得たとの感触で帰清しました。しかし、後で分かったことですが、中部行政監察局は当初から遠水研取り潰しを意図していた様です。11月12日から14日まで清水で現地監察が行われた時監察官は、我が国の遠洋漁業が

次第に縮小する中で遠洋水産資源研究は不要となって行くであろう、又研究所が清水にある必要はない、東京の東海区水研(当時)の中に遠洋局のような組織をつくって、東海区水研に吸収されてはどうだとの見解を示されました。丁度国際会議などが密集する時期で、所長、企連室長を初め各部長がたの国内外の出張が絶えず、第2回目の現地ヒヤリングが行われた時も、企連室長、北洋資源部長、底魚資源部長が不在という困難な状態が続きましたが、林所長の先見の明を持った卓越した指導、特に例え若干不備があろうとも要求された資料は必ず期日までに相手に届ける様にとの所長の指示、水産庁研究課の淀江研究調整班長の適切な指示、企連室長を中心とした全所員の一致協力のもと、遠洋資源研究の重要性、かつお・まぐろ漁業の情報収集及び東京と適切な距離にある地理的利便性、世界最大規模を誇る遠洋底魚標本の移転の困難性など次々と資料を作成し、行監の見解に反論しました。また、水研全体の機構見直しも先行した結果、行政監察局による取りつぶしを免れ、かえって1研究室の増設というおまけまで付く結果になりました。これも遠洋水産研究所を守ろうという関係者一同の緻密な計算と一致した気迫の賜物と思っております。

遠洋水産研究所に次いで私が赴任しましたJICAの神奈川国際水産研修センターでも、在職中に開所30周年記念行事を行いました。同じくJICAの機構改革でもや同センターの廃止方針が打ち出され、防戦これ努めることとなりました。幸い何とか廃止は免れましたが、どうやら私にはアニバーサリーとお取り潰しが付いて回る様です。

この時期は200海里体制の確立に伴い遠洋漁業が年々縮小され、また、沿岸漁業も今一つ発展はなく、独りいわしまき網だけが気を吐いている状態でした。遠水研当時、隣の東海大学から依頼され「海外漁業論」なる講義を致しましたが、最初は我が国の遠洋漁業の嚆矢である北洋漁業を誇らしげに話しましたが、段々話すことがなくなり、最後は捕鯨さえ過去の話となってしまいました。この様な時代であったことが次々とお取り潰しに巡り合わせた遠因かも知れません。

私の在職中、遠水研の庁舎拡大の話が持ち上がりました。遠水研を去るまでに実現はしませんでした。研究課から予算の約束を取り付けることが出来ました。残念ながらまだ拡張された研究室を見ておりませんが、最初の予算書作成をお手伝いさせて頂いた私にはこの度の30周年記念の際拝見出来るのが大きな喜びです。

研究所の予算作成のポイントとして私が学んだことは、



この重要な研究をするためにはしかじかの実験施設が不可欠である、したがってこれだけの面積が必要であるとの理屈付けを、素人にも分かる様に旨くすることです。予算書では「嘘をついてはいけない、ただし、本当でなくても良い」、針小棒大の棒が必要と見える理屈を考へることであると言うことでした。

遠水研から見た富士山の美しさはいまだに私の目に残っております。また、裏庭の桜も記憶に新たです。

優秀な研究スタッフ、数々の素晴らしい研究業績を持つ遠洋水産研究所が、温和な気候と秀麗な景観の中で更に発展されることを祈ります。

(元総務部長、漁業損害賠償請求処理委員会)

## 調査船人生



高橋 利治

定年退職15年、古い自分史で貴重な記念号の紙面を埋めることをお許し下さい。

戦後まもなく農林水産試験場の新鋭調査船天鷹丸(初代)が小笠原列島南で、初めて鮪の延縄調査をやった。ここは日本へ回遊する鮪の交差点だと考えられていた。しかし、来る日も来る

日もさっぱり獲物がかからない。どうも何か変である。一方、おかず獲りと称して船側で独自に作った普通の延縄を一針二針継ぎ足してやった方には掛かる。乗船研究員も自然に普通縄の漁獲物を当てにする。そのうちラインホーラーのハンドルを持ちながら、揚がって来る調査用漁具の方は枝縄に餌の鰯がついたまま戻って来るのが少ないと気づく。そこで、デッキで乗組員に大声を挙げさせる。『餌あり!』『餌なし!』。結果、漁獲水深を確認したいために、枝縄一本一本に浮き玉をつけた試験縄は、縄待ち中波に揉まれて早々と餌がはずれてしまうと理解した。中村研究室時代の話である。

同じ天鷹丸で北洋鮭鱒調査をした。船が大きすぎるのか、操業技術が未熟なのか、流し網の扱いが思うに任せず、そこで思いついたのが搭載伝馬船による小縄漁法。本船の流し網に、カタクチワシを餌にした延縄を並行設置して比較調査したら、大小の出現率に大差を生じた。網目の制限から当然な結果ではあるが、それまで網に頼って鮭の最大体長を論じた沢山の資料が嘘のように思えた。また縄に銀鮭が多いのも面白い知見であった。

因に、この調査航海を日本経済新聞が三面トップに載

せたため、当時、許可の不要なこの漁法が漁業界を混乱させることを心配した水産庁から呼ばれて、誰の許可を貰って鮭鱒を獲ったかとお咎めを受ける。これ程漁業者にアピールした調査は開闢以来だとする、時の源生所長の毅然たる対応が今も強く印象に残っている。

資源研究にとって、手段方法としての漁具や漁法がいかに重要なエレメントであるかを身をもって体験した。調査船乗り草分時代である。

やがて、最初の大型調査船として建造された照洋丸(初代)で、漁獲調査にウエイトを置いた行政サイドの鮪新漁場開発を担当する。今にして思えば誠に皮肉、照洋丸が昭和30年代初めにヨーロッパに行った目的は鮪の新漁場開発と、それになんとツナ缶の販路開拓であった。実際、当時大西洋では日本漁船が自ら縄の鉢数を制限するほど獲れたし、照洋丸の試験操業でもカリブ海で釣獲率1割2分、魚艙に鮪が入り切れなくなって、途中で売っても良いかと水産庁に伺いを立てたほど。

照洋丸の調査航海では今でも残念な事が一つある。それはオーストラリア大湾を南下調査中のこと。南緯40度を越えて鮪が掛かってきた。何事ぞ、氷の海に暖海性の鮪がいるのか。しかし、所定の調査海域を越えているので、未練を残して反転する。若しもあの時もう一日南下調査を続けたら、南半球の鮪の大回遊発見につながったのではないかと。しかし、たとえ大発見したとして、その名誉も恩恵もそう長くは続かなかつたであろう。

その後10数年、東光丸で北洋の鮭鱒や鱈場蟹船団の漁獲量の実数把握と取締りに齟齬。この華やかかなりし北洋漁業も終わり頃は、某船団長をして、こうやって何とか資源を維持しておれるのも、元はと言えば露助のお陰だと言はしめた。この間、海を巡る世界状況の急速な変化に遠洋資源調査の趨勢もすっかり様変わり。

開洋丸に来てみると、あれ程持て囂された大陸棚の多獲性魚種のトロール調査は色褪せていた。その頃、オーストラリアを半周する大陸棚調査を日豪共同でやったことがある。その時乗船の豪研究員の言ったことを忘れない。我々は貴方達を歓迎しない。我々は急いでいない。必要な時が来たら、その時は日本が資源調査で行き詰まる時、それからゆっくり海の資源を調査する、と。

こんな状況の中でも、太平洋に散在する海山や海嶺に立縄を敷設しては、最初の水揚げ魚に胸をときめかしたり、南極海のオキアミ調査を手がけては、水深別曳網に創意工夫を凝らし、科学魚探を採用したりしながら、遠洋資源調査の一端に希望をつないで来た。

さて、人類の食糧問題が論じられて久しい。やがて食

糧不足で人類は滅亡への道を歩むことになるであろうと極論する学者もいる。私はそうは思わない。なぜなら、幸い我々には、過去から有用無用の水産資源や海洋構造に関する膨大な科学的資料の蓄積がある。この人類の宝を活用し、更に将来にわたって人智の限り研究を続けて行けば、必ずや展望はひらけると信じる。ただし、過去のような一国の産業重視の近視眼的な視野ではなく、全人類が生き延びることを基調にした、グローバルな地球規模の生態系の研究を常に念頭に置く世界の学者の、熱のこもった発表と国際協力が必要である。そうしなければもう漁業者も人間も守れなくなる。

どこかに海があって森があって人間が住める星を発見しないかぎり、地球と人類は運命共同体。そして、地球は小さいが海は広い。今なら間に合う。

水産庁遠洋水産研究所の益々の発展を祈りつつ

(元開洋丸船長)



冰山の陰から開洋丸(初代) 1980.1 撮影 中山覚介

## 遠洋水研と私 —開洋丸・照洋丸を通じて—



山中完一

### 1. 初代開洋丸と遠水研

初代開洋丸が清水の金指造船所で建造中の昭和42年7月に私は同船の艦装を命じられて、北海道余市の北水研所属で小樽を定繋港としていた北光丸を下船して清水に赴いた。初代北光丸は200トンそここの船であったが、私は昭和40年から42年まで

3シーズンの北洋のサケ・マスと三陸から道東沖でのサンマ資源調査に従事したことで調査船の魅力を知った。このような身にとっては水産庁最新鋭の大型調査船開洋丸の建造から関与し乗船出来ることとなったのは望外の喜びで、これが以後30年を越えて調査船のみの勤務を選ぶ端緒となった。しかも建造地は清水で丁度遠水研も三保に建設が始まり、松林の中に仮設事務所が作られていた。また北光丸のサケ・マス調査を担当していた北水研北洋資源部も遠水研へ移ることが決まっていた、北光丸と一緒に仕事をした石田、伊藤(準)、大迫、待鳥さんなどが清水に移ってこられるのも心強かった。

新船艦装と云ってもそれまでの金指造船所はマグロ延縄船やカツオ船の建造がほとんどで三千数百トンもの船尾トロール型漁業調査船の建造は初めてで、造船所も建造プロジェクトチームを設けて対応に大わらわの状態、艦装から竣工そして試験航海と多忙を極めた上に多くの難問の解決に奔走する日々であった。調査観測の艦装関係は漁撈・放射能・利用加工関係を東海区水研が担当し、生物と海洋関係は遠水研の遠トロ研究室と海洋部が主として受け持っていた。竣工後毎年の運航計画は本庁研究部長主催の開洋丸運航委員会で各水研や業界からの提案や要望を受けて調整して決定していた。当時の情勢から海外トロール漁場開発や底魚資源調査と漁場環境調査が大きな柱で、それに漁具漁法から利用加工そして放射能調査などが加わって大きな調査航海となっていた。

昭和42年秋に清水での4ヶ月に亘る艦装と数回の試験航海を終えて、開洋丸は冬季北洋のサケ・マス幼魚調査を川上武彦北洋資源部長や米盛室長等が乗船して処女航海を行った。以後ニュージーランド、ペルー・チリ、アルゼンチン・パタゴニア、アフリカ南東岸から西岸、南米スリナム、シャム湾、オーストラリア、そしてオイルショック時代は天皇海山からハワイアンリッジ、九州パラオ海嶺、そして再度ニュージーランド調査など毎年5ヶ月から6ヶ月の遠洋トロール漁場の資源や開発調査航海を行ってきた。日本周辺調査として日水研による日本海のベニズワイガニ資源や東北水研・東海水研のサンマやイワシの産卵調査、南西水研の土佐湾や豊後水道の資源調査や海洋観測、西海区水研の東シナ海や南シナ海での底魚資源調査など海区水研の調査も毎年組み合わせて行っていて、遠水研を中心に全水研が共同利用していた。

初代船長は下関の水大校の練習船耕洋丸から桜井船長がこられて、代船ではなく新船建造であったので乗組員は水産庁船舶職員では足りずに、東水大や海上保安庁、海上自衛隊そして民漁船等から募り、混成部隊の感があ



り大調査団と大手水産5社からのオブザーバーの乗船もあり、竣工から数年は船長をはじめ幹部の苦労は並大抵ではなかった。調査員は主として遠水研の部長や室長が調査団長となって、資源・生物・海洋・漁撈等の研究者が各水研や大学から参加して、十数人の調査員・補助員で構成されるのが通常であった。後に遠水研や海区水研の所長や部長となられた福田、池田、佐藤、畑中、河野、川原さんたちの遠ト口の方々や、佐々木さんたちの北底の方々、海洋部からは奈須、木谷さんなどが主に乗船された。

昭和44年に陣野船長が2代目船長として乗船され、機能的な調査観測を行うために漁撈技術士を核として船内に調査部(後に調査科)を組織した。調査部は調査観測機器の維持管理にあたりと共に調査観測時には調査員と一体となって機器の運用にあたる上に、調査観測項目の一部を受け持ったり調査速報のとりまとめにも参加していた。私も首二航士から次一航士としてこの調査部に参加し、調査船として初めての試みであったので精神的にも肉体的にも苦労が多かったが得るところも多く、大きな経験となった。この調査部発足当初に調査部員数名で清水の船員会館に一週間泊まり込んでの遠ト口研究室での魚体測定研修は今でも強烈に印象に残っている。私は昭和51年に西海区水研陽光丸への転船をもって9年間にわたる遠水研の開洋丸での仕事から離れることとなった。

## 2. 照洋丸と遠水研

陽光丸から東海区水研蒼鷹丸を経て平成元年に前任の大村船長の後任として照洋丸に転船となり、十数年ぶりにまた遠水研の仕事をする事となった。この頃照洋丸は夏の北洋でのアカイカ調査と南半球の夏のオーストラリア北西岸沖でのミナミマグロ産卵場調査の年2航海が定着していた。アカイカ調査は既に退職されていた遠水研海洋部OBの川崎正和さんが調査員で毎年乗船され、後にイカ研究室の田中さんが引き継がれて表中層流し網の開発やアカイカや海鳥のピンガー追跡調査などを行ったが、ついに大規模流し網漁業は終焉してしまった。ミ

ナミマグロ調査は塩浜さんをはじめ浮魚資源部の多くの方々に乗船され、最初は幼魚の採捕と標識放流やピンガー追跡調査が主であったが、辻さんが担当される頃からポンゴネットやモクネスネットによる産卵調査が多くなり、大西洋クロマグロ産卵場調査へと発展して半年を越える大調査航海を行うまでになった。またこれらの資源調査と関連して海洋・南大洋部の水野さんを中心とする低緯度域研究室の参加も活発となりインド洋のトビイカ資源調査やミナミマグロ産卵親魚調査へとつながって行き、東部太平洋のマグロ資源調査のように延縄を用いた漁獲調査から魚類や海産生物のピンガー追跡から各種海洋観測まで、最新機器の設置や乗組員の意識や技術の向上もあって、浮魚を主とする漁業調査船として卵から成魚までの生物調査と表層から深海までの海洋観測の出来る調査船となり、それが間もなく竣工する新照洋丸へと発展して行くこととなった。

## 3. 再び開洋丸と遠水研

旧開洋丸を下りて以来21年ぶりに本年4月に2代目開洋丸に乗船してみると、8年間照洋丸で遠水研の仕事をしていたので特に変わったわけではないのだが、乗る船が代わり資源課の担当班が代わったせいか遠水研の見え方も微妙に変化してくるのも一寸不思議な感がある。この開洋丸に乗船してまだ4ヶ月で一航海しかしていないが、北洋資源部の西村室長が乗船してのベーリング海のスケトウダラ幼稚魚資源調査を終わってみて、旧船に較べて現船の能力が飛躍的に大きいことと、調査科がすっかり定着してその存在が大きい意味を持っていること、そしてともすればぎくしゃくし勝ちであった旧船での遠水研との関係が、今は十分に成熟した関係で相互理解が進んでいて調査観測が大変しやすく感じた。これは初代開洋丸から現船に至るまで歴代の遠水研所長はじめ運航調整を担う企画連絡室の方々と関係する研究員の皆様と大勢の乗組員が永い年月をかけて醸成して出来上がったもので、お互いに次の世代に大切に引き継いでいきたいものです。

(開洋丸 船長)



濱木綿

## 北洋資源部この10年

若林 清

遠洋特集号 ( 1987年8月 ) に当時の佐々木北洋底魚資源研究室長は、「創立20周年に時期を合わせたかのように、遠洋水研は行政改革に対応した組織の再編に直面している。計画通りの再編が行われれば、底魚資源部は解体され、部としての歴史を閉じることになる」と書いた。創立30周年にあたる今、再び組織再編が論議されており、固まりつつある再編案によれば、その研究機能の多くは他水研に移管・吸収されるものの、近い将来北洋資源部は4研究室ともどもその歴史を閉じる。

遠洋水研発足当時函館にあった北洋資源部は、1970年5月1日に本所に統合された。当初は、さけます資源及びかに資源を対象とする第1～第3の3研究室構成であった。1988年4月12日付けの組織再編で、さけます生態研究室、さけます管理研究室が発足、かに資源担当の研究室が消滅、底魚資源部から北洋底魚研究室、おっとせい研究室が転入し、4研究室12名の体制となった。さらに、研究レビューに対応するかたちで1994年6月24日生態系研究室が発足、同時に、さけます担当の2研究室がさけます研究室に統合されて、現行の4研究室構成となった。1997年8月1日現在、部長、4研究室長、4主任研究官、1研究員、計10名であり、1988年4月以降、部から9名が転出し、7名が転入している。

この10年間には、部に関連して多くの、そして、大きな環境の変化があった。漁業に関しては、1988年：北洋底魚漁業の米国水域からの完全締め出し ( 1930年ベーリング海に初出漁、1972年我が国最大 208万トンを漁獲 ) ; 1992年：日本さけます公海漁業の停止 ( 1914年初出漁、1957年日ソ交渉に基づく最大漁獲量12万トン ) ; 1992年6月：スケトウダラ公海漁業の停止 ( 1970年代後半に開始、1987年我が国最大80万トン、1989年関係国合わせて最大145万トンを漁獲 ) があった。また、国際条約に関しては、1992年2月21日：1953年に発効した北太平洋の公海漁業に関する国際条約 ( 北太平洋漁業国際委員会、INPFC ) の失効 ; 1992年3月24日：北太平洋の海洋科学に関する機関 ( PICES ) のための条約の発効 ; 1993年2月16日：北太平洋における溯河性魚類の系群の保存のための条約 ( 北太平洋溯河性魚類委員会、NPAFC ) の発効 ; 1995年12月8日：中央ベーリング海におけるすけとうだら資源の保存及び管理に関する条約の発効、があった。

こうした情勢の変化に対応して、研究内容は質的に変

化してきた。さけます研究室については、日本のさけます漁業の存続のための研究、即ち、漁獲対象資源の大陸起源あるいは母川国の解明、漁業による海洋生物混獲実態の把握と混獲量低減のための研究から、公海におけるさけます資源の保存管理に関する研究、即ち、沖合域における資源豊度の経年変化の把握、小型化に関連した亜寒帯水域におけるさけます類の環境収容力に関する研究、放流資源と天然資源の相互作用の把握に研究の力点が移行した。更に、NPAFCの共同研究計画としての、北太平洋の生産力の変化がさけます類に与えるインパクトの検証、i) 海洋の生産力に影響する要因の解明及びこれらの要因がさけます類の環境収容力に与える影響、ii) さけます類の生物学的特徴の変化に影響する要因の解明、に対応した研究へと移行した。

北洋底魚研究室は、漁獲量確保を主目的とした米加露200カイリ水域内資源の研究から、公海、跨界性資源の研究へ、具体的には、ベーリング公海のスケトウダラ資源及び中部北太平洋海山底魚資源を主体に、資源の系群構造、生残・加入機構、資源量の評価、資源動向の把握・予測を行っている。

おっとせい研究室は、トドやあざらし類の研究を開始するとともに、質的には資源生物学的研究から、漁業との共存を図るための研究、鰭脚類の資源低迷の要因解明と漁業系産業廃棄物や混獲等による資源への影響評価を行っている。PICESの「海鳥、海産哺乳類による海洋生物資源の消費量の評価」に関する作業部会への対応も新たな任務としている。

また、北太平洋における生態系研究を推進するために新設された生態系研究室では、国際通念となった生態系の維持に配慮した環境調和型漁業の推進に対応するため、漁業による海洋生物への直接的・間接的な影響の評価、漁業による影響や生物生産の仕組みを理解するための海洋生態系の構造と動態の解明、また、大規模な海洋環境変化が海産生物に及ぼす影響の評価等の研究やさけます類の環境収容力の研究を行っている。

この10年間で多くの研究成果が上げられている。生態系研究室では、さけます研究室、海洋・南大洋部と共同して、北太平洋亜寒帯における低次生物生産の実態を解析し、さけます等浮魚類の摂餌による動・植物プランクトン量のトップダウン制御を見いだした。また、さけます類の捕食者として沿岸域では海鳥、外洋域ではネズミザメによる捕食圧が大きく、さけます資源に悪影響を及ぼしていることを示した。プロ研「生態秩序」に対応しては、シロザケの回帰回遊生態の解明、磁性物質の発見



に貢献した。さけます研究室では、調査船調査結果及び系群分析結果から、これまで日本沿岸から直接太平洋に回遊すると見なされていたシロザケ幼魚の多くが、オホーツク海で越冬し、晩秋から初冬にかけて太平洋に移動していることを確認し、幼魚の資源量から回帰量が予測可能となるものと期待されている。調査船によるモニタリング調査からは、沖合生活期のさけます資源の分布と豊度の変化を明らかにしてきており、近年認められるようになったさけますの小型化の要因説明が図られつつある。北洋底魚研究室では、スケトウダラ海盆群（公海資源はその一部）が大陸棚群と異なった再生産特性をもち、独立した系群と見なしうること、仔稚魚が東部大陸棚の南部域で生育後成魚となって海盆に加入してくること、資源量は、加入が少ないことから1990年頃から急激に低下し、現在低位にあること、加入量が主に環境によって決定されることを示した。おっとせい研究室では、人工衛星による個体追跡システム及び回収型（データロガー）バイオテレメトリー技術を開発し、それらを用いてオットセイの回遊経路及び摂餌生態を解明するとともに、混獲がオットセイ資源低迷の主因ではないことを明らかにした。また、漁業系廃棄物によるオットセイの絡まり死亡率が依然減少しないこと、欧米起源のPCBによる汚染

がオットセイにも及んでいることを明らかにした。こうした多くの研究を進める中で、国内はもとより、米・加・露・韓・中等の研究機関との共同研究体制を構築してきたことも大きな成果であろう。

近い将来に北洋資源部の消滅が予定されているとはいえ、これまで行ってきた研究の重要性が失われたわけではない。研究の継続は、漁業・資源の管理、国際条約対応、そして国際貢献のためにも必要であろう。特に、地球温暖化が現実のものとなりつつある現在、北太平洋漁業国際委員会に課せられた地球規模の環境変化及び漁業が海洋生態系・海洋生物に及ぼす影響の解明は緊急の課題である。さけます類に関しては、小型化・環境収容力の解明、天然資源と人工放流資源の相互関係の解明等の研究は、人工放流資源に負っている我が国として不可欠である。公海スケトウダラ漁業の再開・継続のためには、資源評価と生残・加入機構の解明が求められている。オットセイやトド等の海洋野生生物と漁業との調和・共存に関する研究は、ひとたび問題が生起すると漁業の死命を制しかねないことから、不断の努力が求められよう。これまで蓄積してきた多くの標本やデータ、資料、成果を近視眼的な展望で埋もれさせてはならない。

（北洋資源部長）

### 我が国による北洋漁業資源漁獲量の経年変化(トン)

年	スケトウダラ		他の底魚類 米国水域	底魚類 海山	公海水域	さけます類		日本沿岸
	米国水域	公海水域				日本水域	ロシア水域	
1985	560,783	136,475	141,959	2,253	16,671	17,647	0	165,741
1986	264,446	697,975	123,778	5,356	10,759	9,496	0	146,512
1987	2,644	803,550	64,520	4,557	10,997	9,335	0	140,326
1988	0	749,982	0	2,775	9,251	4,830	952	151,812
1989	0	654,907	0	1,455	9,202	3,997	5,047	173,651
1990	0	417,049	0	5,107	6,865	2,987	1,626	211,260
1991	0	139,741	0	8,309	5,399	2,653	8,060	196,159
1992	0	2,695	0	25,559	0	2,663	20,583	153,321
1993	0	99	0	19,472	0	4,137	21,855	203,125
1994	0	0	0	8,059	0	4,664	18,983	216,259
1995	0	0	0	9,825	0	4,878	28,316	248,188
1996	0	0	0	3,403	0	4,248	22,042	-

注) スケトウダラにはロシア水域における合弁漁業の漁獲は含まれていない。

## まぐろ研究30年を振り返って... 変わったことと変わらないこと

鈴木 治郎

思い起こせば、私が遠洋水研の浮魚資源部（主としてまぐろ類の資源研究を行っている）に配属されたのは、1968年であり、その後飽きもせずまぐろ一筋で研究をやってきたから、今年は遠洋水研の30周年記念であると共に、私にとってもまぐろ資源研究ほぼ30年という事になる。配属当時は遠洋漁業の最盛期、そして30年を経た現在は、その最凋落期でピークからボトムまでひととおり見てきた事になる。ただし、遠洋漁業の中でも、まぐろ漁業は例外的で往年の漁業生産量を現在もほぼ維持している。30年前の浮魚資源部には、私に直接関係した範囲で言うと矢部博所長、須田明浮魚資源部長、それに私の直属の上司であった林繁一研究室長等がおられた。当時私はかなり言いたい放題だったらしく、これらの方々に少し言動を慎むように言われたことを覚えている。今は皆さんおとなしくなって私は、大変それが不満で、浮魚資源部員にもっと言いたいこと、やりたいことを言うように（勿論、それが空手形にならないように釘も刺してあるが）説いて回っている。まぐろ漁業がなんとか往年の水準を維持しているといっても、漁業や漁業規制等その内容は激変し、いまでも絶え間なく変化し続けていて、その将来は大変厳しいものがある。ここでは、研究面で大きく変化したこと、しなかったことについて私見を思いつくままに述べたい。

### 変わったこと

PC等の計算機の普及、それに起因する資源解析モデルの改良、国際会議への対応の増加等多くの変化が挙げられる。いまでは考えられないかもしれないが、当時はそろばんや計算尺で資源計算をやっていた。仕事を始める際に、滑りを良くするためにエイヤと計算尺の鞘を引き抜いていると、水研のいろんな研究室を回遊して回ることでも有名であった某部長さんに、“ちゃんばらでもやるみたいだなあ”と感心されたぐらいのものであった。しかしながら、基本的な学問水準の向上につながる発展や発見は、この30年間、残念ながら、ほとんど無かったというのが私の印象である。これは別に日本だけに限ったことではなく、外国も同じで30年というスパンが研究発展にとって短すぎるのかも知れないとも思わないことも無い。その中でも特筆されるべき業績として3つばかり挙げてみよう。いずれもいくぶん旧聞に属するものば

かりではあるが。

### 1) 多回産卵

多回産卵など別に珍しいことでもないというむきもあろうかと思うが、まぐろ類でこの現象が確認されたのは比較的最近のことである。私が入所した当時、まぐろ類は膨大な数の卵を産み、魚種やまぐろの大きさにもよるが、数百万個も産むと文献に書いてあった。この数百万という数は、産卵期に一個体が生み出す総数と一般には理解されていたと思う。ところがそれでは一産卵期に何回産卵するのかに付いては、たかだか2~3回ぐらいだろうという見方が多く、今明らかにされつつあるように、キハダなどでほぼ毎日産卵し、それが数ヶ月にも及び総産卵数は数千万になるらしいなどは誰も想像もしていなかった。そのころキハダのことをやっていたときで、メダカを家で飼っていて、普段見慣れているのに、ほぼ毎期同一の個体が産卵するのがひときわ印象的に見えた。この種の研究は、まぐろ類の飼育そのものや飼育魚の個体識別の困難さもあって、まだ緒に付いたばかりであるが将来まぐろ類の再生産、初期生活史等に関連する研究の発展にとって重要な発見であると思う。

### 2) 耳石の日輪による年齢査定

これも今では常識のようになってしまったが、まぐろ類の年齢査定が困難であり、年齢の研究をしていた皆がなんとなくマンネリ感と今までの仕事に不満をもっていたとき、日齢が判るという有名な Panella (1971) による衝撃的報告が出た。東部太平洋でキハダの資源管理をやっている IATTC (全米熱帯まぐろ委員会) が、この論文の発表後いち早く日齢による年齢査定を始め、良い仕事をしたのが印象的である。ちなみにその結果は、体長組成のモードのトレースや鱗によるこれまでの年齢推定値とあまり変わらなかったが、まぐろ類では耳石の日齢による研究は、その後やや足踏み状態のように見えるが、もっと大きな研究ポテンシャルを含んでいるはずで、今後の発展に期待したい。

### 3) 大規模標識放流による資源パラメーターの推定

ほとんど基本面で進歩の無かった資源解析分野で一つだけ印象的だったのが、SPC (南太平洋委員会) の行ったカツオに関する資源パラメーターを求めるために行った大規模な標識放流実験である。この実験には日本も放流のためのカツオ船を日本人クルーや研究員も乗せて派遣し、SPCの研究員と協同で参加し、SPCとの研究協力を確立した意味でも記念すべきものであった。このデータを解析したのはSPCの研究者であるが、標識採捕数の時間的な減衰状況を整理し、資源量推定はもちろん、自

然死亡率、漁獲死亡率等の種々のパラメーターを推定するもので、資源解析関係の論文では例外的に Schaefer のキハダ余剰生産モデルを読んだ時以来、久々に面白いと思って読んだことを覚えている。中西部熱帯海域からは、当時のカツオの生産量の数倍の持続生産が挙げられるという結果であったが、その後カツオ漁業の生産が飛躍的に増加し、その推定は正しかったといえる。この種のモデルは、その後改善・拡張され、将来は高度回遊性魚の資源解析の重要な手法になるものと思われる。

#### かわらなかつたこと

変わらなかつたことについて一言。まず、研究情報の把握の遅さについて。例を挙げると、VPA が日本で使われだしたのが今から約20年前、その時までには、外国ではもうずいぶんと使われていた。GLMもまたしかりである。この情報伝達のおくれる傾向は、情報伝達が飛躍した今でもそんなに変わらないように思える。要は、意欲的に仕事をしているかどうかが多分に関連しているのではないか。

次にまぐろの研究組織がこの30年間で、ほとんど増加・強化されなかつたことで、30年前が15人で、現在が17人である。30年前には国際会議があると、遠洋水研全所で帰国報告会を開いたことがあるくらい余裕があつた。当時に対応する条約も1~2しかなかったが、いまや年がら年じゅう会議で明け暮れていて、基本的な研究がおろそかになってきた。また、欧米の諸外国に比べて日本のまぐろ研究者の絶対数が極めて少ないことは周知の事実であり、まぐろ研究所をつくる必要があると言われてきた。このままでは先が見えており、現在進行中の水研の機構改革等の機会を捕らえて、大幅な組織強化が早急に実現されなければならない。

文句ばかりいってもなんだから、変わらなかつた良いことを一つ。それは、チームワークでまぐろ研究が行われていることである。浮魚資源部の研究者数が絶対的に業務に対して不足していることをカバーするには、これしかなかったと言うべきで、部内で仕事の仕切りをかなり自由にして、度重なる難局を乗り越えてきた。勿論、これがうまく行かなかつたことも度々あつたが、誰かが困っている時には、みんなで協力し合うことは今も続いていると信じている。来年は新照洋丸が出来る。よき伝統を継続し、気を引き締め、再び世界一周の調査航海に乗り出したい。

(浮魚資源部長)

## 外洋資源部は残り物の集まり

外洋資源部長 川原重幸  
大型鯨類研究室長 加藤秀弘  
小型鯨類研究室長 宮下富夫  
外洋いか研究室長 谷津明彦

遠洋水産研究所では創立以来30年の間に組織が何度か見直された。その度に最も大きく変わったのは、研究室そのものではなく研究室の仕分け、つまり研究部であった。遠洋水産研究所は専門分野から見ると資源研究が主体の単純な水産研究所となろうが、世界の海をカバーするだけに研究対象は多彩である。鯨やオットセイ、魚、いか、おきあみ、プランクトン、そして海は勿論だが、その海の上を漂うゴミから亀や海鳥までである。このため、組織見直しのための研究部の構想は3つまでは色々出来るが、どうしても種や海域が共通しない研究室がいくつか残る。これらの研究室を無理矢理に集めたのが創立時の底魚海獣資源部である。こうした残り物の集まりの伝統は紆余曲折の末に現在の外洋資源部に引き継がれている。外洋と言う言葉からは、だだっ広い海のイメージの他は浮かばないであろうから、さっそく4つの研究室について漁業や研究を紹介することにしよう。

最初は、鯨関連の大型鯨類研究室と小型鯨類研究室である。水産庁における鯨類研究は、1966年に東海区水産研究所の数理統計部数理研究室を経て、資源部に資源第六研究室が創設されたことによって開始された。資源六研は遠洋水産研究所創立とともに清水へ移転し鯨類資源研究室と改称された。同研究室は商業捕鯨隆盛期の1960年代から商業捕鯨モラトリアム決議に至る1980年代後期までの鯨類資源研究の中核として研究を展開してきた。しかし、1982年の国際捕鯨委員会(IWC)の商業捕鯨モラトリアム決議(1985年発効、1987年日本異議申し立て撤回)によって、いるか漁業の重要性が相対的に増加したことや、公海流し網混獲問題の勃発などに対応するため、1988年4月に小型鯨類研究室を新設し、大型鯨類研究室は従来の業務を引き継いだ。

大型鯨類研究室の主要業務はまずIWCの包括的資源評価への対応である。包括的資源評価は、商業捕鯨モラトリアムを議決する際に、商業捕鯨を復活するかどうかを判断する目的で1990年までに実施することが付帯された。このためIWC科学委員会は資源評価手法とデータのレビュー、最新のデータと手法による個別資源の包括的評価、改訂管理方式の開発を開始した。重要でかつデータがある資源から、系群構造、分布と資源量、生物的



特性と再生産機構、環境・生態学的特性、資源の動態、資源診断が行われてきた。これには小型鯨類研究室と共同の年間2.5万海里の目視調査から重要種の資源量を推定し、また標本とデータによる生物学的分析を行って対応してきた。これまでに南半球ミンククジラ、北太平洋ミンククジラ、同ニタリクジラなどで包括的資源評価が終了し、改訂管理方式の適用試験が進行中である。また、国際鯨類調査10ヶ年計画 ( IDCR ) 南半球ミンククジラ資源調査 ( 1978年～1996年 ) これに代わる南大洋鯨類総合生態調査計画 ( SOWER ) シロナガスクジラ調査 ( 1996～ ) 同南極海鯨類調査 ( 同 ) の企画運営及び分析に参画してきた。また、政府が ( 財 ) 日鯨研に許可を与えて実施している調査捕鯨の調査計画の立案と分析にも一部関与している。

この他の業務として、IWC 管轄外の我が国沿岸での小型捕鯨業対象資源の調査と管理がある。小型捕鯨業は農林水産大臣許可漁業で、モラトリアム実施以前には主としてミンククジラを捕獲していたが、1989年以降はIWC管轄外のツチクジラやコピレゴンドウなどを捕獲している。認可されている捕鯨船は9隻であるが、実際の操業隻数は5隻で、和歌山県太地、千葉県和田、宮城県鮎川及び北海道網走に専用の解体場が許可されている。1997年の捕獲枠は、ツチクジラ54頭、タッパナガ ( コピレゴンドウ北方系 ) 50頭、マゴンドウ ( 同南方系 ) 50頭、ハナゴンドウ20頭である。この漁業は国際的に注視されており、科学的に適正な管理が必要とされている。このため、目視調査によって対象資源の資源量調査を行い、すべての解体場に調査員を派遣して捕獲鯨体の生物学的調査を行っている。また近年では、ホエールウォッチング等の新産業の管理研究にも着手しつつある。

小型鯨類研究室が発足以来関わってきた主要業務は、我が国沿岸のいるか類漁業対象種や各種漁業によって混獲されるいるか類の資源学的研究である。我が国沿岸のいるか類漁業は、知事許可や海区漁業調整委員会承認漁業であり、追い込み漁業や突きん棒漁業が伝統的に営まれている。主要な対象種はスジイルカ、コピレゴンドウ南方系、ハンドウイルカ、ハナゴンドウ、イシイルカなどで、年間約1万数千頭の捕獲枠がある。小型捕鯨業同様にIWC管轄外ではあるが、科学的に適正な管理が求められている。このため、目視調査による資源量推定、漁獲物調査に基づく生物学的、衛星標識による移動分析などを実施し、行政当局に資源管理の助言を行ってきた。また、系群識別のための生化学的試料として洋上で表皮を採取するバイオプシー技術を実用化した。

大規模公海流し網は国連決議により1992年をもってモラトリアムになったが、その原因は同漁業によって海鳥や海産哺乳類などが混獲され、資源に悪影響を及ぼしているとの観測があったためである。小型鯨類研究室では公海流し網、特にいか流し網で混獲されていたカマイルカとセミイルカについて、目視調査に基づいた資源量推定、混獲個体の生物調査による生活史解明及び胃内容物調査による食性解明を行ってきた。これらの成果は当時の北太平洋漁業国際委員会 ( INPFC ) に提出され、混獲の影響評価に貢献した。また、まぐろを対象とした我が国200海里内の大目流し網漁業のいるか類の混獲について、混獲頭数推定を目的としてまぐろ生態研究室と共同で調査船による試験操業を実施している。

次は1988年10月に新設された外洋いか研究室である。北太平洋におけるいか流し網漁業の対象種であるアカイカの資源管理と混獲問題へ対応する緊急性が認められたためである。いか流し網漁業は1978年に三陸・道東沖で開始されたが、既存のアカイカ釣り漁業との競合問題から、1979年からは漁場を東経170度の東に規制された。大臣承認制となった1981年には、534隻が操業し、約10万トンを生獲した。1980年代は毎年12～22万トンと我が国のいるか類需要の1/3を供給する重要な漁業となり、韓国と台湾も参入した。釣り漁業では漁場と漁法の制約から小型個体が多いが、いか流し網漁業では体重2～3kgの大型個体が漁獲される。大型でも肉質が柔らかいため、いわゆるソフトスルメやファーストフード的な寿司ネタとして独自の需要を形成している。

アカイカの順調な「出世」とは異なり、流し網漁業は北米系のさけます類の混獲、オットセイやいるか類の混獲、極めて大規模であること ( 1夜に1隻の漁船が約50kmの流し網を敷設 ) から米国とカナダの懸念を惹起した。具体的には、米国議会において1987年に公海流し網漁業規制法が成立し、米国商務長官は流し網漁業国と交渉を開始した。当時、アカイカは北海道区水産研究所が研究していたが、さけますと鯨の研究部門を持つ遠洋水産研究所に研究室を新設して対応することとなった。その直後から、日米加共同の流し網オブザーバー調査 ( 1989年～1991年 ) による混獲の実態把握や混獲回避の研究などを行い、INPFCなどにおける検討に多忙な日々を送った。しかし、混獲の影響に関する科学的評価に基づいて流し網漁業を規制すべしという日本の主張にもかかわらず、国連総会という漁業の門外漢の集う場でモラトリアムとなった。

流し網は1992年末をもってモラトリアムとなったが、

アカイカの利用が閉ざされた訳ではなく大型アカイカには強い需要があった。そこで、外洋いか研究室では他機関と緊密な連携の下に、1992年から釣りによる大型アカイカ漁獲のための研究に取り組んだ。その結果、1日の平均漁獲量は約3トンと流し網の漁獲の半分程度に高められ、1996年からは約100隻のいか釣り漁船が旧流し網漁場に出漁するようになった。さらに、アカイカの資源学的研究も行ない、平衡石の日齢査定技術によりアカイカの寿命を1年と推定し、発生時期と寄生虫の寄生率の違いから北太平洋のアカイカに4系群を認めるなどの成果を上げた。この他、1990年代に入って年間数万トン漁獲されるようになったペルー海域のアメリカオオアカイカの資源学的研究にも取り組んでいる。最近では、新資源の開発調査でアラビア海の大型トビイカの濃密分布を実証した。

流し網への批判に見るように、近年では漁業対象種のみならず生態系も考慮する必要がある。外洋性いか類は海産哺乳類、海鳥、魚など高次捕食者の重要な餌生物であることから、その生態系における役割の解明が重要な研究課題となる。また、多くのいか類は単年生であり漁場は世界に広く分布するため、PCBなどの海洋汚染物質の地球規模でのモニタリングに適している。今後取り組むべき重要な研究課題としては、いか類の資源管理方策といわし類やさけますなどで良く知られる大洋規模での資源の中長期変動である。前者では、スルメイカへのTAC適用が論議されており、アカイカなどでも管理に関する研究が必要である。後者はPICESで重要研究課題となっており、当研究室でも1996年からモニタリングのための流し網調査を再開した。

最後は本年の4月1日に廃止となった遠洋底魚研究室である。前身の遠洋トロール研究室も含めると南方トロール漁業の研究を30年行ったことになる。南方トロール漁業は1950年代末に以西トロール船2隻がアフリカに出漁したのが始まりで、たい類などの好漁場が発見されたことから急速に発展した。1970年代にはアフリカ北西岸を中心に100隻ほどの大型トロール船が操業し、たい類やいか類を毎年30万トン近く漁獲した。こうした状況に対応するため遠洋水産研究所創立とともに遠洋トロール研究室が新設された。と言っても漁獲物の多くは名前も分からず種の同定を行う所から研究が始まり、当時の測定室は魚屋さんよりも品揃えが豊富であった。同時に、主要種の資源状態を把握するために、漁獲統計の集計、漁船への乗船調査、規格別漁獲量による体長組成の推定、年齢査定などが行われた。アフリカ北西岸で調査船開洋

丸が網目試験を実施したのもこの頃である。得られた成果は中東大西洋漁業委員会(CECAF)などへ報告された。

こうした漁業の絶頂期に資源の多くは悪化しつつあった。恐らく外国漁船も含めた漁獲努力量の急増が原因である。権利意識に目覚めた沿岸国による規制も強化され、我が国トロール船は次第に従来の漁場での操業が苦しくなった。このため、開洋丸や海洋水産資源開発センターの深海丸を中心に新漁場の開発が進められた。その成果やトロール船の機動性を生かして、北米北東岸、南西大西洋、ニュージーランドと漁場を変えながら南方トロール漁業は継続した。対象種もまあじ類やするめいか類、さらにホキやミナミダラ等の中低級魚が主体となり、中層トロールによる操業も増えた。こうして200海里時代の到来にも関わらず1977年には過去最大の39万トンが漁獲された。しかし、その後は沿岸国の200海里からの締め出し策により漁獲量も減少した。南方トロール漁業の一部である南米北岸エビトロール漁業でも1970年代には100隻を超える漁船が操業し3千トン(無頭)余りを漁獲したが、現在では隻数、漁獲量とも大きく減少している。同研究室が対応してきた海外いか釣り漁業は毎年10万トン前後のスルメイカ類を漁獲しているが、これについては外洋いか研究室が業務を引き継ぐこととなった。

遠洋底魚研究室は前述のように本年の4月に廃止となった。南方トロール漁業の漁獲量は減少傾向にあるものの現在でも10万トン前後と多い。しかし、その8割はニュージーランドとの合弁船が漁獲しており、先進国である同国は資源評価も自分でやる能力がある。ニュージーランド以外の海域はいずれも数隻しか操業しておらず、資源研究を続けるのは難しい。こうした状況の下では研究室を廃止し他の部門に振り向けるのもやむを得ないかと思われるが、いくつかの懸念が残る。例えば、同研究室を通じて入っていた、世界の底魚やいか類に関する情報である。輸入も含めたタンパク質の安定供給の見地からは問題があろう。

さて、外洋資源部にとってこの10年は、鯨関連の研究室が2つになり、外洋いか研究室が新設され、そして遠洋底魚研究室が廃止と激動の時代となった。ある雑誌に会社の寿命は30年と書かれているのを最近見た。遠洋底魚研究室はまさにその例となった訳である。最初に述べたように外洋資源部はもともと残り物の研究室の集まりである。このため研究部としての将来の見通しは立て難いが、現存の3つの研究室については今後も研究需要が有るものと考えられる。さらに、いか類は鯨の重要な餌であることから、同じ研究部に所属する利点を生かした



共同研究が進むことが望まれよう。そうすれば、まさに残り物に福があることになる。

## 海洋・南大洋部の最近10年の活動と将来展望

宮地 邦明

30年前、遠洋水産研究所の新設にあたり、南海区水産研究所の海洋部を元に海洋部が設置された。設置当初の海洋部は、海洋第一研究室と第二研究室の二室で構成され、研究員は6名であった。当時は水産庁研究所の中で海洋研究に対する風当たりが厳しく、南海区水産研究所時代の研究者10名から6名に減員されたこともあってか、本誌10周年記念特集号の「海洋部の10年を思う」(山中一郎記)には海洋研究に対する不当な評価への義憤を読みとることができる。

その後、時代とともに組織改編を繰り返し、昭和57年には南大洋生物資源研究室の新設、59年には鯨類資源研究室を加えて海洋・南大洋部と名称も改められた。さらに63年には高緯度域海洋研究室、低緯度域海洋研究室、南大洋生物資源研究室の三室に再編され現在に至っている。

この組織再編の1年前、すなわち62年に創立20周年を迎え、20周年記念特集号に当時の三尾海洋・南大洋部長が「新観測時代に思う」と題して、新技術への期待を述べながらも地道な資料の収集・蓄積の重要性を指摘し、地道に着実に研究を行う旨の意思表示をしたところである。

この意志はその後受け継がれ、各研究室に浸透しているように見えるが、さて、10年を経て具体的にどのような花を咲かせ、さらに次の10年間でどのような実を結ばせようとしているのか、各研究室長に問うてみた。

高緯度域海洋研究室 瀬川恭平

高緯度域海洋研究室は、旧海洋第一研究室を母体とし、研究員や1987年に全面改訂された研究課題など多くのリソースを引き継いで1988年より研究を開始した。したがって、遠洋水研創立30周年に当たる今年、ほぼ高緯度域海洋研究室の創立10周年といえることができる。この10年の間、研究室の人数は室長を含め3~4名で推移し、延べ7名が在籍している。現在の研究室は、1991年3月に増築された共同実験棟の3階にあり、晴れた日には東側の窓から富士山を眺望することができる。たぶん研究所の中で富士山が一番よく見える恵まれた研究室である。

当室の研究は、南大洋生物資源研究室が担当する南極海を除いた全世界の高緯度海域を対象として、物理から

生物環境まで幅広い海洋研究を担当している。このように広範囲の研究対象に個性が異なる延7名の研究員が関わってきたことから、この10年間に多様な研究が行われてきたように想像される向きも多いかと思うが、実際に行われてきた研究のキーワードを並べてみるとむしろかなり指向性が強い。1986年から数年間、漁場環境保全事業の一環として実施した北太平洋の海流調査などマリンドブリー問題に関する研究を別にすると、基礎生産に関する研究に目標が絞られてきたことがわかる。すなわち、北西太平洋亜寒帯域を中心として赤道域や南大洋などでも行われた植物色素量や基礎生産力の調査研究、さけますの生育環境の研究、放射化分析など将来へ向けての新しい分析手法の開発、水色リモートセンシングのデータ利用へ向けて行われた様々な開発研究などである。これは、この分野を専門とする研究者が多く在籍したことにもよるが、なにより高緯度海域の水産海洋研究においては基礎生産研究が鍵となるとの認識や、1970年代末に実験的に行われて大きな可能性を示した水色リモートセンシングの実用化への期待を、7名が共通して持っていたことによるのであろう。

水色リモートセンシングについては、本来なら数年前に予定されていた Sea Star 衛星の打ち上げの遅れ、昨年打ち上げられて8カ月ほどデータを取得したところでトラブルに見舞われたADEOS衛星など、必ずしも実用化第1世代の滑り出しは順調ではないが、今後を着実に進歩し続けて行くだろう。また船舶観測データについても、物理データに比べて少なかった化学・生物環境データが最近急速に質量ともに充実しつつあると感じる。我々としては、こうした新しい手法や研究環境の恩恵を十分に取り入れ、さらなる発展を目指して水産庁や他省庁のプロジェクト研究に取り組んでいるところである。また、その過程で、その先に重要となるであろう課題・手法などについて研究室として共通に持ち得る価値観を探って行きたいと考えている。

低緯度域海洋研究室 水野恵介

当研究室は、主に旧海洋第2研究室を引き継いでおり、かつお・まぐろ類等の高度回遊性魚類の分布や再生産にかかわる熱帯・亜熱帯海域の海洋構造とその変動を明らかにすることが主要な研究課題である。そのため、広大な熱帯・亜熱帯海域の海洋データが不可欠であり、データの収集・管理およびデータベースの構築を重要な業務として位置づけている。このデータベースは、水産庁が昭和38年から実施している公庁船による太平洋・インド洋のまぐろ資源調査で得られる海洋観測資料(主に水温



・塩分・流れ)を中核とし、遠洋水研の各資源部、海洋水産資源開発センター、一般当業船の協力で得られる観測資料も加えて、世界的に見ても充実したものとなっている。

さて、最近の10年間であるが、エルニーニョ現象や地球温暖化等地球規模の環境問題に対する関心が強まったことが大きな出来事と言える。大洋規模の海洋変動の存在とそれが人間活動にまで影響を及ぼすことが認識され、国際的な共同研究が盛んになった。例えば、国連や国際学術団体を中心に、昭和60年から平成6年にかけてTOGA計画(熱帯海洋および全球大気国際共同研究)が実施され、平成2年からは世界の海の表層から深層までの循環像を明らかにするためのWOCE計画(世界海洋循環実験計画)が開始された。これらの国際共同研究は海洋研究、特に大洋規模の海洋循環・物質循環・大気海洋相互作用の研究にめざましい成果をもたらし、さらに発展しようとしている。

このような情勢の下、当研究室はいち早くこれらの国際共同研究に参画し、先に述べたデータベースを活用して、熱帯域の海洋変動特性を抽出し、エル・ニーニョの発生・消滅の機構の解明に貢献することができた。またこれらの研究を通して各国の協力が進み、世界的にデータベースが充実し、データの交換が容易になった。当室ではそれらの様々なデータベースを積極的に利用して、太平洋亜熱帯循環の長期変動やインド洋の海洋変動に関する研究を推進するとともに、浮魚資源部と密接に連携して、まぐろ類の分布・再生産とエル・ニーニョとの関係等の問題に取り組んだ。その結果、メバチの加入量がエルニーニョと強い関係を持つことなどいくつかの重要な知見が得られた。しかし、現象面での定性的な知見に留まっており、まだ多くの問題を残している。

一方、データベースの充実、作業の効率化を図るための努力も続けており、延縄用超小型水深水温計を開発した。この水温計は、延縄の鉤の直上に取り付けて水温の鉛直分布を測定するものであるが、縄成りの推定や釣獲深度の把握にも有効なことから漁業の現場からも注目されている。また、本機を用いることにより、これまで不明であったまぐろの遊泳層が明らかとなり、同時に有効鉤数が明確となって漁獲努力量およびCPUEの精度向上に繋がるものと期待されている。

以上この10年間を振り返ってきたが、遠洋水産研究所の利点は何と云っても、遠洋海域で多数の船舶(調査船・用船など)を稼働でき、協力的な船舶が篤志的に観測を実施してくれるところにある。今後の海洋研究は、モ

デルと観測との垣根がかなり低くなり、データ解析のみでなくモデルの中で観測データを活かすことが不可欠となるだろうが、そのような時代を迎えて遠洋水研の利点およびこれまでに蓄積したデータベースが益々重要な意味を持ち、当水研に対する期待がさらに高まるものと思われる。我が研究室はそのような期待に応えるべく研究に邁進する所存である。

南大洋生物資源研究室 永延幹男

昭和40年代後半になって、南極オキアミが地球上に残された処女資源として多くの国の関心を集めるところとなり、我が国も昭和47年から海洋水産資源開発センターによる企業化調査を開始した。しかし、この頃から莫大な資源量にもかかわらず、オキアミ資源の有限性や資源保護が科学者間で議論されるようになり、51年に南極研究科学委員会(SCAR)によって「南極海洋生態系および海洋生物資源に関する研究計画(BIOMASS)」が策定された。この国際共同研究の一環として、54年~55年に第1回南極海調査が開洋丸によって実施された。これを皮切りに南極海調査が次々と実施される運びとなるのであるが、55年には南極海洋生物資源保存条約(CCAMLR)が締結され、オキアミ資源の国際管理が実施されることとなり、水産庁研究所に研究面での貢献がさらに強く求められた。

このような情勢を背景に、57年に南大洋生物資源研究室が誕生した。初代の室長は嶋津靖彦・現遠洋水研所長で、二代目は遠藤宜成・現東北大学助教授である。つまり私で三代目ということになる。

当研究室の主な業務は、誕生の背景となったCCAMLRに対応することである。このCCAMLRは「南極海洋生態系の保存と資源の合理的利用の調和」を基本理念とし、取り扱う対象は南極海生態系全体に及ぶ。つまり、「漁業」「漁獲種(オキアミ・魚類他)」「捕食者(ペンギン・オットセイ等)」「環境」の相互連関を明らかにしながら、生態系と調和した漁業管理を行うとするものである。この点がこれまでの単一資源を対象とした漁業管理と大きく異なる。

したがって、CCAMLR科学委員会で活動する加盟各国のメンバーは専門分化した多様な研究者で構成されており、それぞれの視点・資料を持ち寄りながら、オキアミの漁業管理方策に関する議論・調査研究を実施している。我々南大洋生物資源研究室の3名も、このメンバーの一員として活動しているが、少ない予算をやりくりしながら、広範な研究を推進するのはいささか骨の折れる仕事ではある。

幸いにして、メンバーは各国のすぐれた南極海研究者・資源研究者であり、そのほとんどが南極海フィールドワークの豊富な経験者で、極限の海の生態系に魅せられ、南極海に深い愛着をもつ科学者ばかりである。このような科学者達とともに仕事をすることは、啓発されることも多く、我々にとって励みとなり、研究推進のエネルギーとなっている。

最後に、CCAMLR南極海生態系調査研究の活動の中で、日頃より私が抱いていた思いと一致した、遠洋水研10周年特集号「遠洋」での次の指摘をあげる。水産系海洋学のパイオニア・泰斗である故宇田道隆博士の寄稿文中でのオキアミ資源についての意見である。「大海も気象のことも皆目かくしたような人が世界海洋の大資源を推算していて誤算がなければ不思議だろう。オキアミが資源量何億トンで、漁獲適量限界何千万トンという数字は現実の海の流転する情報を適切に入手して予察すべきである。」この慧眼的意見を、いままさに温故知新の心がまえで捉え返し、現代流のアプローチへ活かすべきと考えている。海洋・南大洋部の冠名にふさわしい三代目のチャレンジである。

以上が3研究室長の応えである。若干具体性に欠けることは否めないが、誌面が限られているということでご容赦願いたい。読者の方々には各研究室の研究に対する意気込みなどをくみ取っていただければ幸いである。

ところで、「ドッグ・イヤー」という言葉が情報通信業界で使用されているのをご存知であろうか。情報やソフトが富を生む知識社会では、かつて1年かかった変化が2ヶ月足らずで起きる。つまり人間の7倍の速さで生き、寿命を終える犬と時間の進みが同じとの意味らしい。これほど極端ではないが、われわれの周辺でも昨今は一段と時間の進みが速くなっているように感じられる。こ



南極海 Sea 島に設置されている米国NOAA生態系モニタリング基地 (1991年)

のような中で、これからの10年を展望することは非常に難しいが、リモートセンシング技術の実用化が飛躍的に進展するであろうことは予想できる。また、生態系を重視する動きは今後も強まり、様々な問題が提起されよう。更に、食糧問題や地球温暖化が身近な問題として迫ってくると思われる。そういう時代にあっては、研究に与えられる時間も短くなり、性急に成果が求められるようになるであろう。「ドッグ・イヤー」とはいかないまでも「シール(アザラシ)・イヤー」程度は覚悟せねばなるまい(注; アザラシの寿命はほぼ30年といわれている)。ただ、その際も地道な一歩を踏み外しては前進もままならない。諸先輩が築き上げた成果を礎に、さらなる発展を目指して部員一同研究に取り組む所存である。

(海洋・南大洋部長)

## 総務部沿革アラカルト

野村真郷

遠洋水産研究所は、清水高等商船学校の跡地に昭和42年8月1日産声を上げ、本年度で創立30周年を迎えた。

貿易港としての清水港は日本3美港の一つに数えられ、埠頭は保税上屋、倉庫が立ち並びトラックの出入りで喧しい。人生前半の任侠伝の浪曲や歌謡曲の方で私どもに名が轟く清水の次郎長も、晩年にはこの港湾隆盛のため飛び回り物心両面にわたり尽力した一面を持つことで地元では大きな評価を得ている。現在折戸港区は外材の陸上・水面貯木場として内外に聞こえている。水産物としては冷凍まぐろの輸入が圧倒的に多い。

所在地の三保半島は野馬も生息していたと伝えられ、霊峰富士を望む白砂青松の景勝地として知られており、国外の研究者にも交通の便を除き研究環境としては恵まれているとの評判を得ている。望むらくは富士山を眺望できる国際会議室があれば最高である。三保の松原、羽衣の松は世阿彌元清の謡曲「羽衣」で人口に膾炙しているが、最近では海岸浸食が顕著で安倍川からの砂礫の供給減等により三保半島の砂嘴の崩壊が進行している。

古来駿河湾側の有渡の前浜は巴川の淡水と黒潮の混合域で、あじ、いわし、飛び魚、こはだ、えび等の好漁場であった。一本松、二本松と言った漁場の目印が残存することや、漁業を巡るトラブルが絶えず和解の石も現存することから往時を偲ぶことができる。

他方、折戸湾側は巴川による礫の供給による河口閉塞と地盤の隆起で湾奥部となったもので、かつて駒越と三保半島(三保島)とを結ぶ渡船場の跡地が現在残っている



る。古くは製塩があり、天然牡蠣の産地で牡蠣殻を有効利用した白灰は広く巷間で白壁材としての必需品であった。ぶっこみ漁が行われうなぎ、えび、かにかが捕れていたが富栄養化が著しく海苔の養殖が導入され、その後かきの養殖で栄え、出荷場はつい最近まで残っていた。今の水面は貯木で埋っている。

遠洋水研のある折戸は、駒越と三保との間にあって、柿本人麻呂の作と伝えられる和歌「千早ぶる有渡の渡りの早き瀬に逢わずありとも後にわが妻」でも知られる有渡の渡(地元では延喜式の大祓の祝詞にある人の汚穢を川から海に渡す瀬織津比売を祭神とする瀬織戸神社に因み「瀬織戸の渡」とも呼んでいた。)の東方、駿河の一文字石、はち巻き石の産出地として昔から受験生諸子には広く知られた所で、守り石としての需要が多かったためか現在は良好なものが見当たらない。東の境には筒粥神事で有名なかの御穂神社がある。折戸の旧街道から駿河湾側までの景観は砂泥地のためか防風・潮林で林齢の高い黒松が林立する。松食い虫防除として薬剤の空中散布が行われているがマツノザイセンチュウの威力は荒ましく松枯れが散見する。当研究所の西隣には海洋学部(この三保半島が東海大学発祥の地で私学高等教育の発信地でもある。)があり、その西に清水高等商船学校の後身である国立清水海員学校が所在する。これが遠洋水研の周囲の歴史地理的環境である。

この30年の節目における国際漁業を取り巻く状況を見ると漁業資源の保存、管理を目的とする条約、協定、取極めや国際漁業機関の枠組みによる公海操業規制、更に環境保護団体の主張する野生生物の保護と混獲防止が錯綜する中で漁業生産が行われている。更に漁船漁業としては操業規制だけでなく、国際化、近代化への対応も要請されている。

これらの枠組みに関わる科学委員会が当研究所の研究者の関与する所で、過去に海洋生物資源等の研究や管理に実績をあげている遠洋水研は内外で評価を受けているものの地元では意外と知られていない。このため海の記念日に合わせて平成8年から研究所の一般公開を行い、国民に開かれた研究所として努力をしてきた。今年は7月18日に行った。

我が国の遠洋・沖合漁業が諸外国の漁業との共存を図りつつ生き残って行くためには、漁業の海外基地化や海上労働の国際化への対応、GMDSS 機器の国際航海に従事する漁船への搭載と当該機器を取扱う有資格者化、漁船設備・漁獲手段の近代化とメンテナンス等の要請を受け、生き残りをかけ今一層の漁業経営の改善が必要と

なっている。遠洋の漁船漁業の去就にとって、資源の保存、管理の研究だけでなく、国際的に労働時間の短縮など漁業への付加も漁業の存続を左右しかねない。漁業の存在が有って研究も成り立っている事実を直視しなければならない状況にある。

また、我が国は国連海洋法条約の批准書を国連事務総長に寄託したことから昨年7月20日当条約の効力が発生し、これに対応し8本の国内法が整備された。特に漁業に關係する「排他的經濟水域における漁業等に関する主権的権利の行使等に関する法律」等により200海里EEZ内でTAC制を導入するとともに海洋生物資源の保存と管理が義務づけられた。これに対応した行政組織の整備が10月になされ、この関連で水産庁研究所の組織改正も問われている。

以下、遠洋水研の組織体制の変遷、施設整備等の沿革概略を過去10年間に焦点を当て振り返る。

#### (組織体制の変遷)

臨調、行革審の答申に基づく水産庁研究所の行政監察を受け、昭和63年4月12日に8研究所の組織再編が実施された。遠洋水研も北洋のさけ・ますの減船、米国200海里内対日漁獲割当量0等の漁業状況を背景に大幅な機構改革がされた(「遠洋」No.68参照)。底魚資源部が役割を終えたとして解消され、外洋資源部が新設された。これに伴い多くの室は魚種、機能を考慮した名称に変更され再編された。北洋資源部は既存の北洋資源第二研究室が廃止され、第一、第三研究室をそれぞれさけ・ます管理研究室、さけ・ます生態系研究室に変更し、底魚資源部の解消に伴う北洋底魚資源及びおとせい資源研究室を加え4室13名として再編された。また、新設の外洋資源部は底魚資源部の遠洋トロール資源研究室を遠洋底魚研究室と変更し、海洋・南大洋部の鯨類資源研究室を大型鯨類、小型鯨類の2室に分け拡充し3室7名とし再編された。浮魚資源部は浮魚資源第一、第二、第三研究室はそれぞれ温帯性まぐろ、まぐろ生態、熱帯性まぐろ研究室と名称を変え、焼津分室をかつお・まぐろ調査研究室とし、1室増の4室13名となった。海洋・南大洋部は従前の南大洋生物資源研究室に海洋第一及び第二研究室をそれぞれ高緯度域及び低緯度域海洋研究室と変更し、3室10名体制となった。企画連絡室は情報係を新設し5名と充実された中において、総務部は庶務課の図書係が廃止されたが、実勢は従前どおり15名体制であった。また、同年10月1日には外洋資源部に外洋いか研究室が新設された。

平成6年6月24日には北洋資源部のさけます管理、さ



けます生態研究室がそれぞれ、さけます研究室、生態系研究室と名称を変更し11名体制となった。

平成9年4月1日には外洋資源部の遠洋底魚研究室が使命を果たしたとして廃止となった。

遠洋水研の実員は63年89名であったが平成6年以降は93名となっている。

(総務部体制の変遷)

遠洋水研の総務部の体制は庶務、会計の2課で、ここ10年間員数としては大きな変動はないが、所全体の最近の電子化は10年前に比し隔世の感がある。コンピューターは、ほぼ一人一台の割合で整備されている。これに伴い、総務部の業務の変化としては、電子機器による情報化の進展が著しい。LANシステムの導入、電子メールの採用等により情報が幅広く即時に伝達されるようになり、水研のネットワーク化は勿論、世界中に通信できるインターネットの利用が凄まじい勢いで展開している。資料のデータベース化も当然必要とされ行政事務の効率化が要請されるとともに、これに対してもルールが早急に必要となっている。幸いコンピューターを使いこなす研究者が多いことも総務事務改善の賛同者として心強いし、総務の体制は2000年には電子決済、会議等が可能となると考えられ旅費も節約でき、文書は磁気ディスクに変わり木材資源の節約が図られ、世界的な森林破壊が進む中で少しは防止に寄与できるものと考えられる。

(所属調査船運航体制の変遷)

所属漁業調査船俊鷹丸は船齢も24年を経過し代船建造の時期を迎えているが、52年以来現在までの運航体制は25名で行っている。

(施設整備の沿革)

過去10年間には研究のための機器や室が整備され、その充実が図られた。その概要を時系列で追うと以下のとおり。

平成3年3月には、微量分析室、画像解析室、

生物化学実験室、磁性計測室、電子顕微鏡室及び恒温生物飼育実験室が新設され、共同実験室が一部増築された。

6年3月には蛋白核酸構造解析装置が設置され、実験室改修工事が施工された。

9年5月には、遠水研の庁舎、共同実験室の防災整備工事が施工された。

(予算の変遷)

遠洋水研の20年間の予算の変遷を見ると、43年度当初の事業費と平成8年度とを比較すると予算額では、ほぼ3.8倍を示しているが、消費者物価指数(全国)をデフレーターとして補正して見ると5%の増加に止まっている。

漁業調査取締等の行政対応費の伸びは遠洋水研の研究だけでなく行政対応への需要が増加していることを顕著に示している。

終わりに、臨時職員の方々の、表には現れない地道な研究サポートに対し感謝申し上げる。

遠洋水研の構内には研究者の移植によるワシントンヤシ、南京はぜ、ユーカリ、グアバ、アボガド、白色駱駝足木等やオオジャコの貝殻、クジラの背骨があり南国の雰囲気漂う。

昼休みには夾竹桃に囲まれたグラウンドで今流行のサッカーやテニスに汗を流す若人(?)の姿も見られ、身体の鍛錬も研究に資する英気を養っている。

折戸で夜に潮騒の音をかすかに聞き、蚊に悩ませられ蚊取り線香が必需品と改めて再認識し、明け方には荒ましい蝉時雨の音を聞き、睡眠不足を嘆くことは、都会化した者にとって贅沢な悩みと一笑に付されるであろうか。これらに慣れ耐えなければならぬことが、人の本来の有りようから偏ったところで生活をしていたと実感させられるこの頃である。

(総務部長)

予算の変遷

単位:千円

費目	年度			
	S43	51	61	H8
総事業費	163,805	507,516	767,094	989,509
水産研究所の運営に必要な経費	124,724	417,453	590,882	784,897
漁業調査取締等行政対応費	38,367	80,853	142,434	172,703
別枠研究費、その他	714	9,210	33,778	31,909
うち、人件費	74,860	308,326	471,916	653,660
事業費	88,945	199,190	295,178	335,849
事業費増加(43年度を100)	100	224	332	378
消費者物価指数による補正	100	103	105	105

## 30周年記念号に向けて

團野貞明

はじめに

30周年記念号に載せる原稿の依頼を受け、文章を書くことの苦手な小生、何を書くべきかほとほと困り果ててしまった。

研究者の皆さんのようにいつも文章を書いているとしゃるのと違い、船という現場で作業ばかりやっていると自然文章から遠ざかり、手紙さえも書かなくなる。簡単な漢字さえ忘れてしまっている自分に驚くこともある。

そんな小生が一大決心をして書くのであるから、編集委員の皆さん、決してこの文章を没にすることのないように！

さて、俊鷹丸乗組員の小生が何を書くべきか？

船の紹介……いやいや、これは周知のことである…と思う。

乗組員の紹介・・・これはちと荷が重い。性格的なことまで書けば、あとで何を言われるかわからぬ。ひょっとして闇討ちに会うかもしれぬ。

航海中にどんなことをやって過ごしているか。……ワッチ以外は遊んでばかりである。公になれば大変だ。

そんなこんなで、当たり障りのないことを書くことにする。……これが一番難しい。

我が愛すべき清水、愛すべき「ひい婆さん丸」俊鷹丸

俊鷹丸をひい婆さん丸に例えたことには、それなりのわけがある。

一般に「新造船」という言葉があるが、読んで字のごとく、新しく造るからそうなのだと思われる。

これは全くそのとおりなのだが、別の意味で船を人の女房に例え、「ご新造さん」、少し古くなると「中年船」、更に古くなると「婆丸」あるいは「婆船」と呼んでいた時期があった。

「婆丸」あるいは「婆船」と呼ばれるのは、だいたい建造後約12年から18年の間をいうとのことなので、我が愛すべき俊鷹丸は、それにも該当せず、あえてひい婆さん丸としたのである。

かように古い船故、早急な代船建造が待たれるわけであるが、その話はさておき、この愛すべきひい婆さん丸に小生が乗り組んでからもう4年がたとうとしている。

遠洋水産研究所が創立30周年を迎えることに較べたら、きわめて短いものではあるのだが……

周囲の環境

はじめて清水の地に着任し思ったことは、気候、風土ともに小生にぴったりであったということである。

なにより雄大な富士山を間近に見られることに幸せすら感じた。

研究所職員の皆さんや、乗組員の皆さんもよい人ばかりで大満足であった。

反面、物価が高く（東京よりもずっと高い！）また、船と宿舎が遠く離れているおかげで交通手段に乗用車を使い、単身赴任の小生にはよけいな出費を強いられてしまった。

さらに、他の乗組員と研究所職員との交流があまりなく、組合活動においては特に青年部層の活動が不活発であったのには少々不満を感じた。

代船建造

着任早々、代船建造の抱負についてある人と話をする機会があったが、「開洋丸、照洋丸以上の船を造りたい」旨熱っぽく語ったとき、「メインはあくまでこの2船であり、俊鷹丸は第3位である。」というような答えが返ってきたときには何かしら矛盾を感じ、二の句が継げずさびしい思いをしたことがある。

この考えが今でも一部の人々に抜けきらず残っているのであれば、これこそ小生大々々不満である。

俊鷹丸とは、遠洋水産研究所所属調査船のはずなのだが…

着任後3年の間に魚艙床の水漏れ、油圧パイプの破損、外板穴あき、調査機器故障等々、古い船故の故障を体験しその都度周囲の方々の協力によりことなきを得てきたが、やはりここらが限界である。

所を挙げて早急の代船建造を望まねば、このまま廃船になりそうで不安である。

また代船建造までの間、老朽箇所の徹底修理も必要である。

そのためのドック費用の増額も考えねばならぬ。

現状では一航海に数力所の故障は常であるのだから…

運行計画

「板子一枚、下は地獄」これは船乗り稼業の厳しさを表す際よく使われる言葉である。

もちろん現在の近代化された船舶には、危険度の面からもまたその過酷さの面からも、そういった言葉があてはまらぬほどあらゆる面において改善されてきていることは言うまでもない。

とはいえ、大自然を相手に長期的間世間から隔離されるがゆえの精神的肉体的疲労の蓄積を考えると、他の意味での危険度あるいは過酷さは解消されていないのではなからうか。

航行中は少々体調が悪くても交代はいない。それゆえ休暇を取るわけにはいかず無理をする。ワッチが終わっても陸上のようにネオン街に繰り出すわけには行かぬ。家族、親戚の不幸にはなすすべもない。

ストレスは蓄まる一方である。

「それならそんな職業選ばなきゃよかったじゃないか。」という声が聞こえてきそうである。

「全くそのとおり！」返す言葉もない。

あえて言うなら、「好きだから！」である。好きだからもっともっと改善したい。

船乗りにとって、寄港地での休養ほど楽しみなものはない。

名所、旧跡をめぐる人、好きなゴルフに興じる人、「全国の飲み屋を制覇してやる！」と豪語する人等々、皆、思い思いにストレスを発散させている。

そこで研究者の皆さんにお願いします。

年に一度しか船上研究ができないからと言って無理な運行計画は立てないでください。

どんな計画でも百パーセント遂行できるよう、一所懸命お手伝いします。

余裕ができたなら休養しましょう！

どこかの港で英気を養いましょう！

鞭ばかりでは不満が蓄まるばかりです。たまには飴も与えてください。

寄港地には、最低中2日居てください。中1日では、当直者がかわいそうです。……とまあ、最後はとりとめもない愚痴になってしまったが……

肝心のことを忘れていました。創立30周年、おめでとうございます。

遠洋水産研究所あつての俊鷹丸、俊鷹丸あつての遠洋水産研究所です。

船と陸上との交流を深め、将来に向けてますます遠洋水産研究所が発展していかんことを心より祈ります。

(俊鷹丸一等航海士)

## 折戸の四季

山村 豊

春は満開の桜に酔い、やがて藤、せん檀、甘夏、アボガド、ザクロ、サンゴシトウが咲き、夾竹桃の紅色が構内を包み、ハマユウが甘い香りを漂わせる頃、夏を告げるクマ蝉とアブラ蝉の唄の競艶が始まる。

所長室の脇にサッカー部の休息する日陰がある。可憐な白い五弁の花が風にそよぎ束の間の休息を与えてくれる。激しい息づかいを30年も看取ってきたこの樹を誰も知らない。いつ誰が、どこから持ってきて植えたのか、30年の歳月は人を待たない。7月、一般公開を機に、植木屋さんと図鑑片手に植栽図作りを始めてなお、判明しなかったこの樹が、ブラジル原産のバウヒニア ( *Bauhinia corniculata forticata* ) 別名 "White camels-foot" (白ラクダの足の木) と判ったのは、一般公開後、野菜・茶業試験場花き部の平田研究官に鑑定を依頼した結果であった。今やその由来を知るすべもない。ぜひ、お聞きしたいところである。

温室でしか冬を越せないランの多くが平地で花を咲かせる折戸は暖かい。ユーカリは屋上を越え、中庭はもはやジャングルの様相をなし、蝉の巣窟と化している。一角で梅や枇杷、アボガド、柿、桃、ザクロ、甘夏、晩白柚がたわわに実をつける。

折々、ヒワ、シジュウカラ、メジロ、エナガ、スズメ達が樹々に羽を休める。

人が育ち、人が去った後に花をつける可憐な草花も数知れない。この機会にタイムカプセルを開け、往時を偲んでいただければ幸いである。ひとときの心安らぐよすがになればと願って、以下の2ページに遠洋水研の樹木の一覧と植栽図を掲げることとした。それでもなお、樹種不詳の幼木が育ってきつつある。

(会計課長)



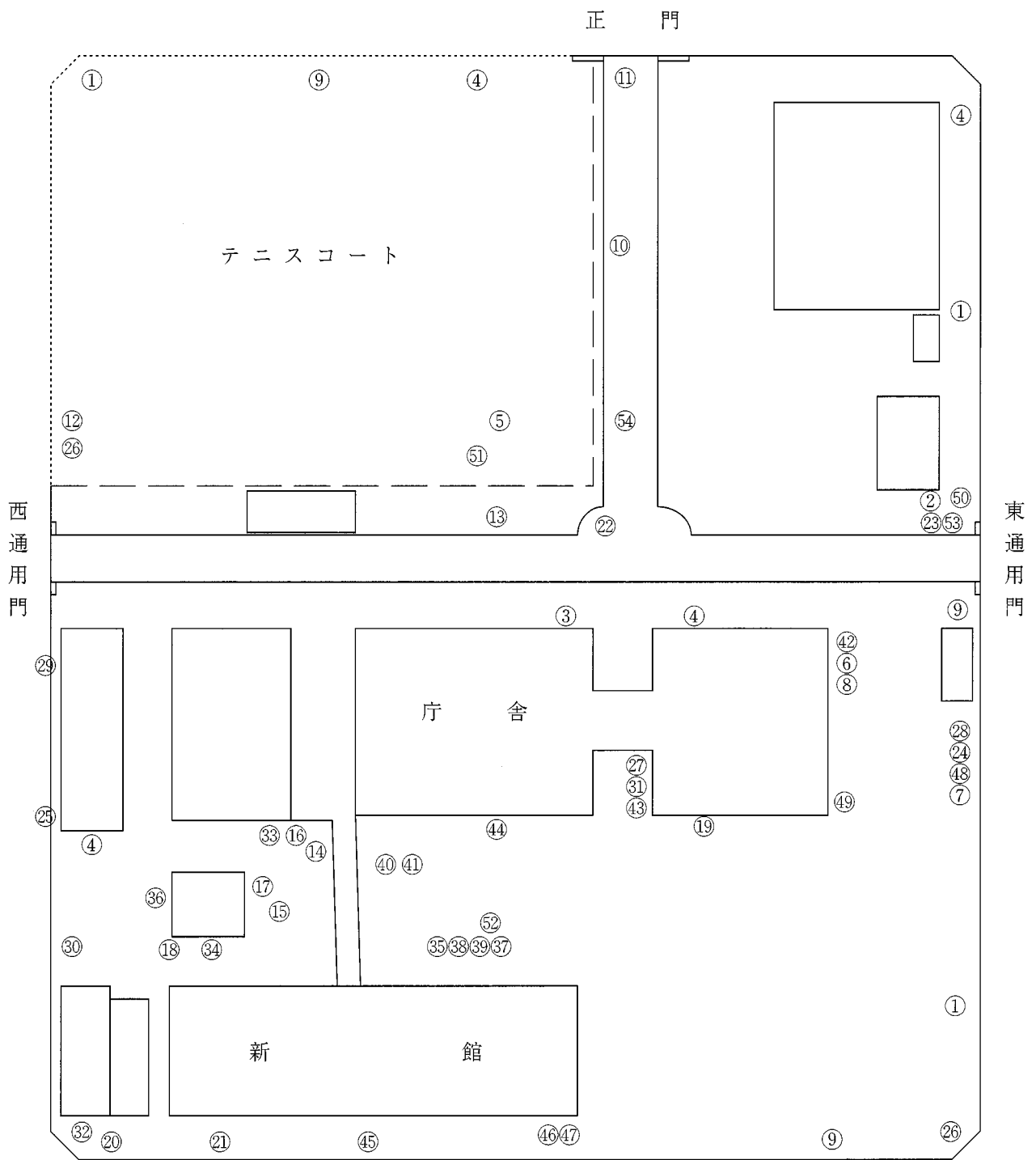
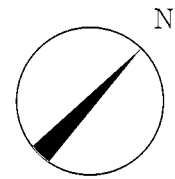
### 遠洋水研の主な樹木

	樹 木 名	本数		樹 木 名	本数		樹 木 名	本数
1	ナンキンハゼ	39	21	カイズカイブキ	13	41	ボケ	1
2	センダン	6	22	クロガネモチ	4	42	ツゲ	1
3	ワシントンヤシ	7	23	フェニックス	1	43	パウヒニア	1
4	サクラ	46	24	カキ	1	44	マカデミアナッツ	1
5	クロマツ	29	25	ギンモクセイ	4	45	カリン	1
6	アナマツ	4	26	シダレザクラ	3	46	エノキ	4
7	モモ	1	27	ツバキ	2	47	アオキリ	1
8	ビワ	4	28	サンゴジュ	2	48	イチョウ	1
9	キョウチクトウ	59	29	キンモクセイ	7	49	ダチュラ	1
10	オオムラサキ	11	30	ケヤキ	1	50	グァバ	1
11	サザンカ	25	31	ネズミモチ	1	51	クスノキ	5
12	ブタン	4	32	コブシ	1	52	ヒイラギナンテン	1
13	マキ	4	33	ピラカンサス	1	53	シュロラン	1
14	ウメ	3	34	ナンテン	5	54	アメリカハナミズキ	2
15	フジ	1	35	ユーカリ	5		(記念植樹)	
16	アボガド	1	36	カボック	1			
17	サンゴシトウ	2	37	タイサンボク	1			
18	ヤマモモ	2	38	アベリア	1			
19	ソテツ	3	39	サルスベリ	1			
20	ザクロ	1	40	レンギョウ	1			



ブラジル原産のパウヒニア(白ラクダの足の木)

# 植栽図



## 地元知られていない世界的な研究所

松村 皐月

私の知る限りでは遠洋水研を一般公開したのは今年度が初めてである。昨年は、第1回の小さな試みとして、地元の折戸公民館のロビーを借りて遠洋水研の紹介パネル展示会を開いたが、所公開とはちょっと言い難かった。だいたい以前から”国立研究機関を地元民に公開するべし“、との通達を受け取っていたのであるが、我が方には特別見せるような施設もなし、忙しくて人も揃わないし、とか理由を並べて実行してこなかったのである。

その内にあちこちの水産研究所が一般公開に踏み切るようになってきて、その話がでる毎に企画連絡室長が小さくなってうつむいていた、との話も耳にしていた。実際問題として、当所では魚を飼っているわけでもなく、大型水理実験設備があるわけでもなく、これといった見せ物はないと思っていた。時折会議等で訪れる方々から見学依頼を受けるが、おっとせいの毛皮と人工衛星の画像解析の紹介が定番となっており、当研究所の目玉であるまぐろや鯨研究室の紹介がされていない歯がゆさを感じていた。それ以上に、あるいはそれ故にと言うべきか、これほど国際的に有名な研究所であるにもかかわらず、地元にはほとんど知られていないままに30年間過ぎてしまった、というのが驚くべき事実であった。

今回初めて、所内に地元のお客さんを招き入れ研究所の紹介をしようとして各方面に働きかけたのであるが、”へー、そんなものが清水にあったのですか!“という反応が殆どであった。総務部長を陣頭にして、市役所、学校、公民館、マスコミ、町内会等に50枚のポスターと300枚のチラシを配りまくった後での反応である。それでも宣伝の甲斐あって、市役所からは市長を第一陣として、企画課幹部職員、社会教育課職員が次々訪れ、地元のTV局では美人キャスターが直接取材に来訪し、夕方の特集番組にはきれいにまとめ上げて遠洋水研を紹介してくれた。後日、放映のために貸し出していた資料を返却方々挨拶にきたキャスターに「このような立派な研究所があり、世界的なお仕事をしていらっしゃるのに、私たちが知らなかったなんて、マスコミとして恥ずかしく思います。今後とも何かおもしろい話があれば、是非よろしく願います。」と言われ、こちら側の宣伝不足に恥じ入る気持ちがしたものである。

地元の方の反応も様々だった。最高齢来訪者である93歳の元気なおばあちゃんには「私は93年ここに住んでいてけど、こんなものがあるなんて知らなかったよ、結構な

ものがあつたんだねー」と言われ、「昔の63年間は兎も角として、30年間はお挨拶もせずに失礼いたしました」と答えざるを得なかった。別の中年の人は「ここにあるのは知っていたけれど、中に入れてもらえるなんて思っていなかった。今日は来て良かった」と言っていた。

総計620人の入場者があり、小学生以下が約半分であったから、300人以上の善男善女が遠洋水研をより良く知ってくれたのである。清水市の人口の0.1%強、折戸地区人口の10%弱が、少なくとも遠洋水研に対する認識を新たにしてくれたとすれば、苦勞して公開した甲斐があつたというものである。(企画連絡室長)

### 遠研、遠水研、遠洋研、遠洋水研

遠洋水産研究所の略称は何か、以前から気になっていた。本誌に原稿を寄せていただいた方々も一貫して「遠水研」が3名、「遠洋研」が2名となっている。所内の現役は全て「遠洋水研」を用いている。以下、自明の養殖研、水工研を除く。

(1)ニュースから：各水研が発行するニュースでは、北水研、東北水研、中央水研、南西水研となっている。西海区水産研究所ニュースでは各ページに「西海水研ニュース」と入っている。日本海区水産試験研究連絡ニュースでは第1号(1951)に日水研所長内橋潔となっているとのこと。当所の「遠洋」No.1(昭和44年)の人事の動きには、命遠洋水研〇〇と書いてある(ただし、その後一貫していない)。

(2)各研究所の文書管理規定から：公文の文書番号での表記を確認すると、東北水研を除いて全て三文字となっている。東海水研があつたので頭一文字では重複するからであろう。当所は「遠水研」である。

(3)7条報告作成の手引きから：技術会議の定める手引きでは、(1)と異なるのは当所だけで、「遠水研」となっている。地域農試は北、東北、北陸、中国、四国、九農試となっており、九州農試ではない。この文書の作成に当たっては、水産庁研究部とも合議したであろうと思われるが、証拠はつかんでいない。

…以上を総合的に点検すると、(1)~(3)すべてに〇が付くのは北、東北、日水研であり、(2)だけ×というのは中央、南西、西海水研である。当所は(1)の「遠洋水研」を取ると(2)、(3)が×である。ただし、創立以来一貫して、外線への応答は「遠洋水研です。」と言ってきたし、この方が略称としてより明確であると思うのだが。

(嶋津)



遠水研の30年の  
功績を称えて!!

宮口・高林  
清水・渡辺  
鎌谷・渡辺

祝 30周年



祝 30周年



あけみ研究部 長野光子  
宮城島崎子  
原田恵子

我が研究所の  
栄えあることとお祈りいたします。

鈴木みや子



祝 30周年

マバチ



祝 30周年

カハダ



熱帯性まぐろ  
研究室

丸藤 内  
金 佐 大

祝 30周年

ピンナガ



祝 30周年



ヨシキリザメ



マカジキ



まぐろ生態研究室 石井、池澤

石川 冊子  
村松 洋子  
若林 こと美

人に例えると  
"筑地"なんだね...  
30才おめでとう!  
安田




志田 加奈子

鳥津を長とぞに20周年の  
お手紙を山津所長と30周年  
のえん周りと鳥津所長と60  
の私と遠水研ハッピー  
新海

至らぬ所長と至らぬ研究者を  
支えて今日に至った皆様になし  
♥から感謝します。

所長 鳥津靖孝




遠藤 秀子 森 主 恵子  
金剛 達 路 室



30周年とうとうその輝かしい  
年に身を置き、一層に  
祝えることほど喜び光栄  
はひとと思っております。  
志 希

30年の一部ですが多くのお魚に  
用まらいろいろ学ばせて下さる  
した (佐藤)



重 律子  
高橋 千佳子



池谷 まさよ  
高橋 明子



祝 30周年  
30年、一言でいっても  
とても長い専任も  
思います。 岸 洋子

ついで先日、20周年記念式典が  
終わったばかりだと思ってる  
もう30周年。月日うたつた  
早いものです。  
遠洋水研の発展を祈って  
ハンサ〜イ (山岸)

祝 30周年  
心清ければ  
永遠に天世  
常々こうお祈り  
思っているのが  
現実...  
生熟系研究室  
山根 紋子 岸 入 恵子



30周年の研究所に  
とって勤めて10年にも  
満たない私にはまだ  
まだ、いふことできません  
++



遠洋水産研究所の研究を見えないところで支えてきたパートの方々から、メッセージを頂きました。

《資料編》

表1. 国際会議等参加、乗船調査、研究業務の実績

表2. 在外研究一覧

表3. 国外研究員の研修実績

表4. 国際研究集会、国際漁業委員会

及び海外指導等への参加実績

表5. 海上及び海外調査への実績

表6. 遠洋水産研究所が関係する

国際条約・協定及び国際機関

表7. 遠洋水産研究所と各漁業との関わり

表8. 漁業生産量、生産額の経年変化

表9. 遠洋水産研究所組織体制の変遷

表10. 遠洋水産研究所職員一覧

表11. 俸給表別職員数の推移

表12. 遠洋水産研究所関連年表

表1. 国際会議等参加、乗船調査、研究業績の実績

(和暦年度)

項目		52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	元	2	3	4	5	6	7	8	
国際会議等	国内	件数	7	8	8	11	6	9	12	4	21	9	6	11	20	13	11	8	14	15	11	16
	海外	件数	22	24	20	24	25	22	22	23	28	30	32	39	41	38	35	37	45	47	42	54
		延人数	28	35	27	36	39	32	41	41	43	47	52	48	61	66	55	55	79	73	82	105
		延日数	541	659	449	474	555	471	535	478	390	548	645	405	659	548	572	422	638	835	942	1418
乗船調査	件数	15	20	25	21	22	16	15	19	16	20	27	35	28	34	25	27	33	33	40	39	
	延人数	20	22	28	37	29	22	19	24	19	26	42	49	35	47	37	38	49	41	62	52	
	延日数	1266	1082	1190	1545	1160	1031	928	1075	928	915	1267	1170	1006	1203	1607	1303	1473	1878	1599	1507	
	延調査日数	920	958	1099	1364	1042	912	834	826	791	782	1058	851	944	882	1309	1150	1290	1352	1277	1218	
業績	邦文	61	69	76	104	111	68	82	121	122	131	126	129	172	162	160	147	166	188	194	166	
	欧文	68	53	50	44	77	72	97	95	86	88	62	62	83	82	140	85	105	117	97	147	
	合計	129	122	126	148	188	140	179	216	208	219	188	191	255	244	300	232	271	305	291	313	

注) 国際会議等；国内外で行われた国際会議、国際研究集会、及び乗船調査を除く海外での調査

表2. 在外研究一覧

年度	氏名	所属	派遣先	研究課題	期間	備考
62	手島 和之	底魚資源部	北西アラスカ漁業センター (シアトル)	底魚資源共同研究	63.1.20~4.15	
63	水戸 啓一	北洋資源部	北西アラスカ漁業センター (シアトル)	底魚資源共同研究	6.18~10.2	
	石塚 吉生	浮魚資源部	全米熱帯まぐろ委員会 (ラホヤ)	クロマグロ共同研究	9.1~64.2.1	中期在外研究
元	辻 祥子	浮魚資源部	南太平洋委員会 (ヌメア)	キハダ共同研究	9.18~12.31	
	中野 秀樹	浮魚資源部	全米熱帯まぐろ委員会 (ラホヤ)	マグロ資源共同研究	2.3.8~3.3.7	パートギャランティ研究員
4	上野 康弘	北洋資源部	カナダ太平洋生物学研究所 (ナナイモ)	北太平洋におけるサケ類の分布におよぼす海面水温の影響研究	5.2.16~4.15	個別重要国際共同研究
5	宮部 尚純	浮魚資源部	南太平洋委員会 (ヌメア)	キハダ共同研究	5.3.25~5.26	
6	西田 勤	浮魚資源部	ワシントン大学 (シアトル)		8.1~11.2	中期在外研究
7	魚崎 浩司	浮魚資源部	全米熱帯まぐろ委員会 (ラホヤ)	東部太平洋におけるまぐろはえ縄漁業資料の資源学的研究	5.30~8.5.31	パートギャランティ研究員

表 3. 国外研究員の研修実績

年度	氏名	所属	受入部	期間	目的	備考
62	Dr. R. S. Otto	北西アラスカ漁業センター	北洋資源部	63.3.16~3.26	東部ベーリング海におけるタラバ稚ガニの成長研究	
元	Dr. L. Ronholt	NMFS アラスカ漁業科学センター	北洋資源部	7.7~9.1	日米共同トロール調査取りまとめ	科技庁招へい制度 科 技 庁 フェロー シップ
	DR. N. Williamson	NMFS アラスカ漁業科学センター	北洋資源部	12.5~2.5.31	ベーリング海スケトウダラ資源研究	
	Dr. N. Bartoo	NMFS 南西漁業センター	浮魚資源部	2.2.8~3.22	北太平洋ビンナガ資源共同研究	
2	Dr. C. Fowler	NMML (米国)	北洋資源部	3.2.1~2.28	オットセイ網絡まり影響評価研究	
	梶村 博	NMML (米国)	北洋資源部	3.2.25~3.24	オットセイ網絡まりに関する研究	
	Dr. T. Loughlin	NMML (米国)	北洋資源部	3.2.27~3.22	海産哺乳動物の有害化学物質汚染に関する研究	
3	Dr. S. B. Reilly	NMFS 南西漁業センター	外洋資源部	4.1.27~2.14	南極海生態系及びピグミーシロナガスの食性及び分布特性の共同研究	
	Dr. T. Polacheck	CSIRO (豪)	浮魚資源部	4.2.24~3.13	ミナミマグロ共同研究	
	Dr. R. Campbel					
4	Dr. K. Bailey Dr. A. Brown	NMFS アラスカ漁業科学センター	北洋資源部	10.26~11.7		重点基礎研究
5	Dr. T. Polacheck Dr. R. Campbel	CSIRO (豪)	浮魚資源部	4.15~5.14	ミナミマグロ共同研究	
6	Dr. B. Hearn	CSIRO (豪)	浮魚資源部	5.18~7.22	ミナミマグロの成長に関する研究	
7	Mr. K. Mahapatra	オリッサ リモートセンシング技術センター (インド)	海洋・南大洋部	8.1.28~4.27	南極海域における光エネルギーと基礎生産力に関する研究	S T A フェロー シップ
8	Dr. F. Moravec	科学アカデミー寄生虫研究所 (チェコ)	北洋資源部	12.1~9.2.28	系群識別のための寄生性線虫類の形態及び分類に関する研究	S T A フェロー シップ
	呉 繼倫 (Chin-Lun Wu)	台湾	浮魚資源部	6.21~7.7	南大洋ビンナガの成長の推定	



表 4 . 国際研究集会、国際漁業委員会及び海外指導等への参加実績

年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的
62	佐々木喬	底魚資源部	シアトル ( 米国 )	5.25 ~ 5.28	日米科学者会議
	手島和之	"	"	"	"
	和田志郎	海洋・南大洋部	ボーンマス ( 英国 )	5.30 ~ 6.13	IWC第39回科学小委員会
	大隅清治	企画連絡室	"	5.30 ~ 6.28	" 及び本委員会
	粕谷俊雄	海洋・南大洋部	"	"	"
	佐々木喬	底魚資源部	シアトル ( 米国 )	6. 1 ~ 6. 5	INPFC底魚共同調査作業部会
	手島和之	"	"	"	"
	嶋津靖彦	海洋・南大洋部	パリ ( フランス )	6. 2 ~ 6. 6	CCAMLR/IOC「南極海の海洋変動海洋と海洋生物資源 - とりわけオキアミへの影響」に関する科学セミナー
	川原重幸	底魚資源部	ダートマス ( カナダ )	6. 3 ~ 6.18	NAFO科学理事会
	畑中 寛	底魚資源部	ウエリントン ( ニューゼーランド )	6. 9 ~ 6.11	日本・ニューゼーランド漁業協議
	嶋津靖彦	海洋・南大洋部	ダマリィーレーリィ ( フランス )	6.10 ~ 6.16	CCAMLR 第 2 回生態系モニタリング作業部会
	林 繁一	所長	清水 ( 日本 )	8.11 ~ 8.13	北太平洋ビンナガ研究会議
	米盛 保	浮魚資源部	"	"	"
	本間 操	企画連絡室	"	"	"
	浮魚資源部員	浮魚資源部	"	"	"
	海洋・南大洋部員	海洋・南大洋部	"	"	"
	河野秀雄	浮魚資源部	ホバート ( 豪州 )	8.14 ~ 8.24	ミナミマグロ三国科学者会議
	石塚吉生	"	"	"	"
	林 繁一	所長	東京 ( 日本 )	8.17 ~ 8.18	INPFC-BRC 運営委員会
	高木健治	北洋資源部	"	"	"
	手島和之	底魚資源部	"	"	"
	米盛 保	浮魚資源部	マニラ ( フィリピン )	8.23 ~ 8.29	東南アジアまぐろ研究集会
	河野秀雄	浮魚資源部	キャンベラ ( 豪州 )	8.31 ~ 9. 4	ミナミマグロ三国行政官会議
	高木健治	北洋資源部	ジュノー、シアトル ( 米国 )	9. 2 ~ 9. 7	日米漁業協議
	河野秀雄	浮魚資源部	キャンベラ ( 豪州 )	9. 7 ~ 9.11	日・豪漁業交渉
	川原重幸	底魚資源部	ハリファックス ( カナダ )	9. 9 ~ 9.18	NAFO年次会議
	大隅清治	企画連絡室	東京 ( 日本 )	9.16 ~ 9.23	IWC-IDCR調査に係わる専門家会議及び計画会議
	永井達樹	浮魚資源部	マドリード ( スペイン )	10. 6 ~ 10.13	ICCATメカジキワークショップ
	宮部尚純	"	"	"	"
	大隅清治	企画連絡室	ワシントンD.C ( 米国 )	10.12 ~ 10.18	南極海鯨類調査捕獲に関する対米交渉
	吉田主基	底魚資源部	カイルア・コナ ( 米国 )	10.13 ~ 10.14	海洋廃棄物に関する環北太平洋漁業者会議
	永井達樹	浮魚資源部	マドリード ( スペイン )	10.14 ~ 10.22	ICCAT科学者会議
	宮部尚純	"	"	"	"
	林 繁一	所長	バンクーバー ( カナダ )	10.20 ~ 11.30	INPFC第34回定例年次会議
	高木健治	北洋資源部	"	"	"
	伊藤 準	"	"	"	"
	佐々木喬	底魚資源部	"	"	"
	水戸啓一	"	"	"	"
	加藤 守	北洋資源部	ナホトカ ( ソ連 )	10.22 ~ 11. 6	1987年日ソ漁業専門家・科学者会議
	小牧勇蔵	海洋・南大洋部	ホバート ( 豪州 )	10.23 ~ 11. 7	CCAMLR第6回年次会合
	畑中 寛	底魚資源部	サンホセ ( コスタリカ )	11. 2 ~ 11.12	コスタリカ水産資源開発調査
	水戸啓一	底魚資源部	シアトル ( 米国 )	11. 2 ~ 11. 6	INPFC底魚共同調査作業部会
	佐々木喬	"	"	"	"
	三尾眞一	海洋・南大洋部	カイルア・コナ ( 米国 )	11. 4 ~ 11.18	環北太平洋マリンデブリス漁業者会議
	吉田主基	底魚資源部	"	"	"
	林 繁一	所長	バンクーバー ( カナダ )	11. 6 ~ 11. 9	いか流し網漁業混獲調査に関する日米技術者会議
	高木健治	北洋資源部	"	"	"
	米盛 保	浮魚資源部	ボンタ・デルガーダ ( ボルトガル )	11.15 ~ 11.27	ICCAT第10回年次会議
	畑中 寛	底魚資源部	マドリード ( スペイン )	11.28 ~ 12.17	ICSEAF第9回定例会議

年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的
62	林 繁一	所長	オタワ ( カナダ )	62.12. 6 ~ 12.11	北太平洋及びベーリング海に関する科学機関設立準備会議
	手島和之	底魚資源部	ホノルル ( 米国 )	12. 9 ~ 12.13	日米板鯧類研究集会
	大隅清治	企画連絡室	ケンブリッジ ( 英国 )	12.13 ~ 12.20	IWC 科学委員会特別会議
	粕谷俊雄	海洋・南大洋部	"	"	"
	馬場徳寿	底魚資源部	シアトル ( 米国 )	63. 1.27 ~ 2. 1	ネットワークオットセイに関するワークショップ
	高木健治	北洋資源部	シアトル ( 米国 )	1.30 ~ 2. 7	さけ・ます及びいか流し網オブザーバー問題に関する日米漁業協議
	粕谷俊雄	海洋・南大洋部	"	"	"
	大隅清治	企画連絡室	シアトル ( 米国 )	2.27 ~ 3. 3	さけ・ます及びいか流し網調査計画に関する日米協議
	高木健治	北洋資源部	"	"	"
	粕谷俊雄	海洋・南大洋部	"	"	"
	高木健治	北洋資源部	東京 ( 日本 )	2.29 ~ 3.12	日ソ漁業合同委員会第 4 回会議
	伊藤 準	"	"	"	"
	加藤 守	"	"	"	"
	佐々木喬	底魚資源部	"	"	"
	伊藤 準	北洋資源部	東京 ( 日本 )	3.10 ~ 3.12	INPFC さけ・ます調査調整会議
	加藤 守	"	"	"	"
	伊藤外夫	"	"	"	"
	石田行正	"	"	"	"
	東 照雄	"	"	"	"
	小倉未基	"	"	"	"
	大隅清治	企画連絡室	東京 ( 日本 )	3.14 ~ 3.17	INPFC 海産哺乳動物科学会議
	高木健治	北洋資源部	"	"	"
	伊藤 準	"	"	"	"
	加藤 守	"	"	"	"
	小倉未基	"	"	"	"
	粕谷俊雄	海洋・南大洋部	"	"	"
米盛 保	浮魚資源部	キャンベラ、パース、フリーマントル ( 豪州 )	3.21 ~ 3.30	ミナミマグロ加入量モニタリング事前協議	
河野秀雄	"	"	"	"	
63	高木健治	北洋資源部	ワシントン ( 米国 )	63. 4. 2 ~ 4. 9	日・米科学者会議
	高木健治	北洋資源部	オタワ ( カナダ )	4.10 ~ 4.14	日・加漁業協議
	河野秀雄	浮魚資源部	東京 ( 日本 )	4.18 ~	日・豪漁業協議
	高木健治	北洋資源部	モスクワ ( ソ連 )	4.24 ~ 5. 1	日ソ漁業合同委員会第 4 回追加協議
	宮下富夫	外洋資源部	サンディエゴ ( 米国 )	4.29 ~ 5. 4	IWC 科学委員会非致死の方法作業部会
	大隅清治	企画連絡室	オークランド ( 米国 )	5.24 ~ 6. 3	IWC 第40回年次会議関連会議
	粕谷俊雄	外洋資源部	"	"	"
	高木健治	北洋資源部	モスクワ ( ソ連 )	5.24 ~ 5.28	日ソ漁業合同委員会第 4 回会議追加会議
	粕谷俊雄	外洋資源部	タウンスビル ( 豪州 )	6. 5 ~ 6.12	オキゴンドウの繁殖生物学に関する研究集会
	川原重幸	外洋資源部	ダートマス ( カナダ )	6. 8 ~ 6.23	NAFO 科学理事会
	佐々木喬	北洋資源部	シアトル ( 米国 )	6.13 ~ 6.17	INPFC 底魚共同調査作業部会
	水戸啓一	"	"	"	"
	畑中 寛	企画連絡室	サンホセ ( コスタリカ )	6.17 ~ 6.28	コスタリカ水産資源調査現地調査
	鈴木治郎	浮魚資源部	ポートルイス ( モーリシャス )	6.22 ~ 7. 1	インド洋におけるマグロ資源評価専門家会議及び第10回インド洋漁業委員会
	林 繁一	所長	東京 ( 日本 )	7.12 ~ 7.13	日本・ポーランド漁業協議
	佐々木喬	北洋資源部	"	"	"
	林 繁一	所長	シトカ ( 米国 )	7.19 ~ 7.21	ベーリング海の漁業に関する国際シンポジウム
	佐々木喬	北洋資源部	"	"	"
	水戸啓一	"	"	"	"

年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的
63	川原重幸	外洋資源部	ウエリントン( ニュージーランド )	63. 7.27 ~ 7.29	日本・ニュージーランド漁業協議
	林 繁一	所長	ヌメア( ニューカレドニア )	7.28 ~ 7.29	SPCまぐる・かじき常設委員会第 1 回会合
	水野恵介	海洋・南大洋部	シドニー( カナダ ) サンディエゴ( 米国 )	7.29 ~ 8. 7	TOGA 計画に関する資料解析専門家パネル
	鈴木治郎	浮魚資源部	ハワイ( 米国 )	8. 1 ~ 8. 5	国際かじき類シンポジウム
	渡邊 洋	"	"	"	"
	米盛 保	浮魚資源部	ウエリントン( ニュージーランド )	8.15 ~ 8.19	ミナミマグロ三国科学者会議
	河野秀雄	"	"	"	"
	鈴木治郎	浮魚資源部	マレーシア フィリピン	8.20 ~ 9.10	東南アジアまぐる第 2 回会議出席及びフィリピンにおけるまぐる漁業観察
	渡邊 洋	浮魚資源部	マドリッド( スペイン )	9. 6 ~ 9.13	ICCAT 第 2 回メカジキワークショップ
	宮部尚純	"	"	"	"
	川原重幸	外洋資源部	ダートマス、オタワ( カナダ )	9. 7 ~ 9.16	NAFO年次会議
	河野秀雄	浮魚資源部	ウエリントン( ニュージーランド ) キャンベラ( 豪州 )	9.10 ~ 10. 1	ミナミマグロ三国行政官会議及び日豪漁業協議
	塩浜利夫	浮魚資源部	フィリピン	9.20 ~ 10. 5	FAO 第 1 次フィリピンまぐる類標識放流指導
	高木健治	北洋資源部	シアトル( 米国 )	10. 1 ~ 10. 7	日米加さけ・ます科学者会議
	石田行正	"	"	"	"
	松村皐月	海洋・南大洋部	清水( 日本 )	10. 4 ~ 10. 6	日仏海洋コンファレンス
	松村皐月	海洋・南大洋部	ワシントン D.C( 米国 )	10. 8 ~ 10.20	NASA Sea WiF'S Prelaunching Scientist Working Group
	遠藤宜成	海洋・南大洋部	ホバート( 豪州 )	10.18 ~ 11. 6	CCAMLR 第 7 回年次会合
	大隅清治	所長	東京( 日本 )	10.21 ~ 11.29	INPFC 第35回定例年次会議
	伊藤 準	北洋資源部	"	"	"
	吉田主基	"	"	"	"
	加藤 守	"	"	"	"
	石田行正	"	"	"	"
	東 照雄	"	"	"	"
	小倉未基	"	"	"	"
	上野康弘	"	"	"	"
	佐々木喬	"	"	"	"
	手島和之	"	"	"	"
	水戸啓一	"	"	"	"
	吉村 拓	"	"	"	"
	三尾眞一	海洋・南大洋部	"	"	"
	松村皐月	"	"	"	"
	平松一彦	"	"	"	"
	粕谷俊雄	外洋資源部	"	"	"
	早瀬茂雄	"	"	"	"
	米盛 保	企画連絡室	マドリッド( スペイン )	11. 1 ~ 11.10	ICCAT 調査統計小委員会 ( SCRS )
	宮部尚純	浮魚資源部	"	"	"
	北洋資源部員	北洋資源部	清水( 日本 )	11. 4 ~ 11. 5	底魚共同調査作業部会
	加藤 守	北洋資源部	東京( 日本 )	11. 7 ~ 11.19	日ソ漁業専門家・科学者会議
	大隅清治	所長	シドニー( カナダ )	11.13 ~ 11.18	PICES 設立準備会議
米盛 保	企画連絡室	マドリッド( スペイン )	11.14 ~ 11.16	ICCAT 第 6 回特別会議	
手島和之	北洋資源部	アンカレッジ( 米国 )	11.14 ~ 12.17	スケトウダラ国際シンポジウム	
塩浜利夫	浮魚資源部	フィリピン	11.20 ~ 12. 5	FAO 第 2 次まぐる類標識放流調査指導	
畑中 寛	企画連絡室	マドリッド( スペイン )	12. 2 ~ 12.16	南東大西洋漁業国際委員会 ( ICSEAF ) 第 8 回特別会議	
渡邊 洋	浮魚資源部	東京( 日本 )	12. 6 ~ 12. 7	まぐる問題定期協議三国会議	
石田行正	北洋資源部	ワシントン( 米国 )	12.10 ~ 12.16	日米加さけ・ます協議	



年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的
63	鈴木治郎	浮魚資源部	バンコック ( タイ )	元 . 1.23 ~ 1.28	資源評価に関するトレーニングコース及びタイ湾とマレー半島東岸の小型マグロ類に関する研究集会
	粕谷俊雄	外洋資源部	ローウストフト ( 英国 )	2. 4 ~ 2.13	IWC資源管理作業部会
	畑中 寛	企画連絡室	コスタリカ	2. 5 ~ 2.10	コスタリカ水産資源調査現地調査
	石田行正	北洋資源部	ポートルドロ ( 米国 )	2.22 ~ 2.24	カラフトマスおよびシロザケ第14回研究集会
	加藤 守	北洋資源部	シドニー ( カナダ )	2.26 ~ 3. 4	日米加3国さけ・ます協議
	松村皐月	海洋・南大洋部	東京 ( 日本 )	2.28 ~ 3. 2	MOS-1検証国際シンポジウム
	加藤 守	北洋資源部	東京 ( 日本 )	3. 8 ~ 3.11	INPFC さけ・ます調査調整会議
	石田行正	"	"	"	"
	伊藤外夫	"	"	"	"
	上野康弘	"	"	"	"
	東 照雄	"	"	"	"
	小倉未基	"	"	"	"
	伊藤 準	北洋資源部	東京 ( 日本 )	3.10 ~ 3.11	日米加いか流し網協議
	早瀬茂雄	外洋資源部	"	"	"
	加藤 守	北洋資源部	モスクワ ( ソ連 )	3.13 ~ 3.26	日ソ合同委員会第5回会議
	北洋資源部員	北洋資源部	清水 ( 日本 )	3.18	日・ポーランドの意見交換
	佐々木喬	北洋資源部	ワルシャワ ( ポーランド )	3.28	日本・ポーランド2国間協議
元	松村皐月	海洋・南大洋部	ホノルル ( 米国 )	元 . 4. 2 ~ 4. 7	海洋廃棄物に関する第2回国際会議
	平松一彦	"	"	"	"
	渡邊 洋	浮魚資源部	"	"	"
	馬場徳寿	北洋資源部	"	"	"
	伊藤 準	北洋資源部	ワシントン D.C ( 米国 )	4. 2 ~ 4.10	日米加さけ・ます及びいか流し網漁業協議
	北洋資源部員	北洋資源部	清水 ( 日本 )	4. 4 ~ 4. 6	研究打合せ
	佐々木喬	北洋資源部	北京 ( 中国 )	4. 4	ベーリング公海のスケトウダラ資源と漁業に関する中国との2国間協議
	佐々木喬	北洋資源部	ソウル ( 韓国 )	4. 7	ベーリング公海のスケトウダラ資源と漁業に関する韓国との2国間協議
	海洋・南大洋部員	海洋・南大洋部	清水 ( 日本 )	4.18	PICES、TOCS 等人工衛星利用、その他関係研究者との意見交換
	加藤 守	北洋資源部	モスクワ ( ソ連 )	4.19 ~ 4.30	日ソ漁業合同委員会第5回追加協議
	伊藤 準	北洋資源部	東京 ( 日本 )	4.26 ~ 4.29	日米加いか流し網漁業協議
	佐々木喬	北洋資源部	東京 ( 日本 )	5.15 ~ 5.19	INPFC 底魚共同調査作業部会
	水戸啓一	"	"	"	"
	吉村 拓	"	"	"	"
	渡邊 洋	浮魚資源部	ラホヤ ( 米国 )	5.18 ~ 5.19	北太平洋ピンナガ第11回研究集会
	河野秀雄	"	"	"	"
	大隅清治	所長	サンディエゴ ( 米国 )	5.20 ~ 6.16	IWC第41回年次会議科学委員会及び本会議
	粕谷俊雄	外洋資源部	"	"	"
	北洋資源部員	北洋資源部	清水 ( 日本 )	5.22 ~ 5.23	スケトウダラ資源調査打合せ
	河野秀雄	浮魚資源部	レークアロウヘッド ( 米国 )	5.23 ~ 5.25	マグロ会議第40回
	渡邊 洋	"	"	"	"
	鈴木治郎	浮魚資源部	マドリード ( スペイン )	5.31 ~ 6. 6	ICCATキハダ研究年計画会議
	米盛 保	企画連絡室	ホバート ( 豪州 )	6. 4	ミナミマグロ加入量モニタリング調査ワークショップ
	河野秀雄	浮魚資源部	"	"	"
	魚住雄二	外洋資源部	ダートマス ( カナダ )	6. 5 ~ 6.23	北西大西洋漁業機関 ( NAFO ) 科学理事会
	北洋資源部員	北洋資源部	清水 ( 日本 )	6. 6	さけ・ます標本採集の協議
	遠藤宣成	海洋・南大洋部	サンディエゴ ( 米国 )	6. 6 ~ 6.22	CCAMLR オキアミCPUE 作業部会、オキアミ作業部会
	一井太郎	浮魚資源部	"	"	"
	渡邊 洋	"	スバ ( フィジー )	6.14 ~ 6.22	南太平洋ピンナガ第2回研究集会
	鈴木治郎	"	"	"	"

年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的
元	鈴木治郎	浮魚資源部	スバ( フィジー )	元 . 6.19 ~ 6.21	南太平洋まぐろ・かじき類常設研究委員会
	渡邊 洋	"	"	"	"
	鈴木治郎	浮魚資源部	スバ( フィジー )	6.26 ~ 6.28	南太平洋びんなが流し網漁業第 1 回会議
	渡邊 洋	"	"	"	"
	佐々木喬	北洋資源部	ウラジオストック ( ソ連 )	7. 5 ~ 7.12	日ソ共同はえなわ調査結果検討会
	中野秀樹	浮魚資源部	台北 ( 台湾 )	7.19 ~ 7.26	ICCAT ピンナガ延縄資料準備会議
	魚住雄二	外洋資源部	ウエリントン ( ニューゼーランド )	7.30 ~ 8. 6	日本・ニューゼーランド漁業協議
	浮魚資源部員	浮魚資源部	清水 ( 日本 )	7.31	ICCAT メカジキ研究打合せ
	粕谷俊雄	外洋資源部	ローマ ( イタリア )	8.21 ~ 9. 1	第 5 回国際真獣類学会
	鈴木治郎	浮魚資源部	パリ ( インドネシア )	8.22 ~ 9. 1	東南アジアマグロ第 3 回会議
	宮部尚純	"	"	"	"
	大隅清治	所長	清水 ( 日本 )	8.23 ~ 8.26	ベーリング海スケトウダラ資源国際科学調査協力会議
	佐々木喬	北洋資源部	"	"	"
	吉村 拓	"	"	"	"
	海洋・南大洋部員	海洋・南大洋部	清水 ( 日本 )	8.31	パタゴニア研究所との交流の可能性について検討
	大隅清治	所長	清水 ( 日本 )	9. 4 ~ 9.10	ミナミマグロ三国科学者会議
	米盛 保	企画連絡室	"	"	"
	岡田啓介	浮魚資源部	"	"	"
	浮魚資源部員	"	"	"	"
	魚住雄二	外洋資源部	ブリュッセル ( ベルギー )	9. 4 ~ 9.17	NAFO 年次会議
	加藤 守	北洋資源部	ユージノサハリンス ( ソ連 )	9. 8 ~ 9.18	国際さけ・ますシンポジウム
	石田行正	"	"	"	"
	大隅清治	所長	東京 ( 日本 )	9.18 ~ 9.21	ミナミマグロ三国行政官会議
	米盛 保	企画連絡室	"	"	"
	岡田啓介	浮魚資源部	"	"	"
	河野秀雄	"	"	"	"
	石塚吉生	"	"	"	"
	辻 祥子	浮魚資源部	ヌーメア ( ニューカレドニア )	9.18 ~ 12.31	南太平洋委員会 ( SPC ) とのキハダ共同研究
	中野秀樹	浮魚資源部	マドリッド ( スペイン )	9.19 ~ 9.25	ICCAT ピンナガ作業部会
	和田志郎	外洋資源部	ラホヤ ( 米国 )	9.25 ~ 10. 1	鯨類集団の遺伝的解析に関する IWC ワークショップ
	鈴木治郎	浮魚資源部	ヌーメア ( ニューカレドニア )	9.26 ~ 10. 3	南太平洋委員会 ( SPC ) とのキハダ共同研究打合せ
	外洋資源部員	外洋資源部	清水 ( 日本 )	9.28	研究情報交換
	岡田啓介	浮魚資源部	ハリファックス ( カナダ )	10. 4 ~ 10. 6	カナダ 200 海里水域内出漁説明会議
	海洋・南大洋部員	海洋・南大洋部	清水 ( 日本 )	10. 7 ~ 10. 9	海外リモートセンシング研究打合せ
	河野秀雄	浮魚資源部	キャンベラ ( 豪州 )	10. 8 ~ 10.18	ミナミマグロ三国行政官会議
	加藤 守	北洋資源部	ナホトカ ( ソ連 )	10.20 ~ 11. 3	日ソ漁業専門家・科学者会議
	石塚吉生	浮魚資源部	マドリッド ( スペイン )	10.23 ~ 11. 3	ICCAT 調査統計小委員会 ( SCRS )
	宮部尚純	"	"	"	"
	大隅清治	所長	シアトル ( 米国 )	10.29 ~ 11.10	INPFC 第 36 回定例年次会議
	佐々木喬	北洋資源部	"	"	"
	石田行正	"	"	"	"
	水戸啓一	"	"	"	"
	伊藤 準	外洋資源部	"	"	"
	早瀬茂雄	"	"	"	"
	鈴木治郎	浮魚資源部	ヌーメア ( ニューカレドニア )	10.30 ~ 11. 3	太平洋まぐろ資源の評価と Interaction に関する専門家の準備会議
	一井太郎	海洋・南大洋部	ホバート ( 豪州 )	11. 3 ~ 11.21	CCAMLR 第 8 回年次会合
	川原重幸	外洋資源部	パルマ ( スペイン )	11.25 ~ 12. 9	南東大西洋漁業国際委員会 ( ICSEAF ) 第 10 回通常会議
	鈴木治郎	浮魚資源部	ウエリントン ( ニューゼーランド )	11.27 ~ 11.29	南太平洋流し網漁業会議

年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的
元	加藤 守	北洋資源部	モスクワ (ソ連)	元 .11.27 ~ 12.26	日ソ漁業委員会第 6 回会議
	粕谷俊雄	外洋資源部	オスロ (ノルウェー)	2. 2. 1 ~ 2. 8	IWC管理方式作業部会
	宮下富夫	"	"	"	"
	奈須敬二	海洋・南大洋部	紋別 (日本)	2. 4 ~ 2. 5	第 5 回オホーツク海と流氷に関する国際シンポジウム
	大隅清治	所長	ワシントン (米国)	2.13 ~ 2.14	日米科学者との意見交換
	清田雅史	北洋資源部	オランダ、スウェーデン	2.25 ~ 3. 6	鱈脚類の海洋汚染に関する研究打合せ
	松村皐月	海洋・南大洋部	東京 (日本)	2.26	日米合同水色リモートセンシングシンポジウム
	松村皐月	海洋・南大洋部	箱根 (日本)	2.27 ~ 3. 1	日米水色研究ワークショップ
	鈴木治郎	浮魚資源部	ホニアラ (ソロモン)	3. 2	第 2 回南太平洋ピンナガ資源管理体制整備会議
	渡邊 洋	"	"	"	"
	伊藤 準	外洋資源部	東京 (日本)	3. 5 ~ 3. 9	1989年いか流し網オブザーバー・プログラム取りまとめ科学者会議
	早瀬茂雄	"	"	"	"
	粕谷俊雄	"	"	"	"
	谷津明彦	"	"	"	"
	岡田啓介	浮魚資源部	"	"	"
	粕谷俊雄	外洋資源部	東京 (日本)	3. 7 ~ 3. 9	いか流し網混獲調査日米加協議
	伊藤 準	外洋資源部	東京 (日本)	3.12 ~ 3.15	1990年流し網オブザーバー計画科学者会議
	岡田啓介	浮魚資源部	"	"	"
	渡邊 洋	"	"	"	"
	粕谷俊雄	外洋資源部	"	"	"
	早瀬茂雄	"	"	"	"
	谷津明彦	"	"	"	"
	加藤 守	北洋資源部	"	"	"
	加藤 守	北洋資源部	東京 (日本)	3.12 ~ 3.24	日ソ漁業合同第 6 回委員会
	石田行正	"	"	"	"
	上野康弘	"	"	"	"
	伊藤 準	外洋資源部	東京 (日本)	3.26 ~ 3.31	日米加さけ・ます / いか流し網 / 大目流し網協議
岡田啓介	浮魚資源部	"	"	"	
畑中 寛	企画連絡室	"	"	"	
2	伊藤 準	企画連絡室	東京 (日本)	2. 4. 2 ~ 4. 4	INPFC 流し網代替漁法検討会
	岡田啓介	浮魚資源部	"	"	"
	渡邊 洋	"	"	"	"
	早瀬茂雄	外洋資源部	"	"	"
	谷津明彦	"	"	"	"
	佐々木喬	北洋資源部	ハバロフスク (ソ連)	4. 2 ~ 4. 5	ベーリング海漁業に関する国際科学シンポジウム
	水戸啓一	"	"	"	"
	鈴木治郎	浮魚資源部	ローマ (イタリア)	4. 2 ~ 4. 6	FAO 流し網専門家会議
	北洋資源部員	北洋資源部	清水 (日本)	4. 2 ~ 4. 6	日加科学技術協力にもとづく研究打合せ
	大隅清治	所長	シアトル (米国)	4.23 ~ 4.27	IWC科学委員会コククジラ包括的評価作業部会
	粕谷俊雄	外洋資源部	"	"	"
	加藤秀弘	"	"	"	"
	北洋資源部員	北洋資源部	清水 (日本)	4.25	はえなわ調査打合せ
	岡田啓介	浮魚資源部	コロンボ (スリランカ)	5.18 ~ 5.24	インド・太平洋漁業委員会
	水戸啓一	北洋資源部	東京 (日本)	5.21 ~ 5.26	INPFC 日米共同底魚調査作業部会
	西村 明	"	"	"	"
	吉村 拓	"	"	"	"
	佐々木喬	"	"	"	"
	鈴木治郎	浮魚資源部	レークアロウヘッド (米国)	5.22 ~ 5.24	まぐる会議第41回
	石塚吉生	"	"	"	"



年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的
2	辻 祥子	浮魚資源部	レークアロウヘッド ( 米国 )	2. 5.22 ~ 5.24	まぐろ会議第41回
	宮部尚純	"	"	"	"
	中野秀樹	"	"	"	"
	外洋資源部員	外洋資源部	清水 ( 日本 )	5.25	水産海洋研究打合せ
	鈴木治郎	浮魚資源部	ラホヤ ( 米国 )	5.25 ~ 5.31	世界クロマグロ会議
	石塚吉生	"	"	"	"
	辻 祥子	"	"	"	"
	宮部尚純	"	"	"	"
	早瀬茂雄	外洋資源部	シアトル ( 米国 )	6. 2 ~ 6. 8	米加いか流し網漁業オブザーバー講習会
	辻 祥子	浮魚資源部	ヌメア ( ニューカレドニア )	6. 2 ~ 6. 8	南太平洋まぐろ・かじき類常設研究委員会
	魚住雄二	外洋資源部	ダートマス ( カナダ )	6. 6 ~ 6.21	NAFO科学理事会
	大隅清治	所長	ルーベンホルスト、ノルドヴェイク ( オランダ )	6. 9 ~ 7. 7	IWC第42回年次会議
	粕谷俊雄	外洋資源部	"	"	"
	加藤秀弘	"	"	"	"
	宮下富夫	"	"	"	"
	北洋資源部員	北洋資源部	清水 ( 日本 )	6.14	シンポジウム打合せ及び共同調査立案
	宮部尚純	浮魚資源部	パリ ( イタリア )	6.21 ~ 6.27	地中海における大型表層魚類の資源評価専門会議
	鈴木治郎	浮魚資源部	バンコク ( タイ )	7. 2 ~ 7.12	インド洋まぐろ類資源評価専門家会議及び第11回 IOFCまぐろ管理委員会
	水野恵介	海洋・南大洋部	ホノルル ( 米国 )	7.15 ~ 7.20	国際TOGA科学コンファレンス
	佐々木喬	北洋資源部	清水 ( 日本 )	7.17 ~ 7.19	底はえなわ共同調査に関する日ソ科学者会議
	水戸啓一	"	"	"	"
	岡田啓介	浮魚資源部	ホバート ( 豪州 )	8. 7 ~ 8. 9	ミナミマグロ加入量モニタリング調査打合せ
	永延幹男	海洋・南大洋部	レニングラード ( ソ連 )	8.27 ~ 9. 3	CCAMLRオキアミ作業部会
	魚住雄二	外洋資源部	ハリファクス ( カナダ )	9. 3 ~ 9.17	NAFO年次会議
	永延幹男	海洋・南大洋部	ストックホルム ( スウェーデン )	9. 6 ~ 9.13	CCAMLR生態系モニタリング作業部会
	西村 明	北洋資源部	グジニア ( ポーランド )	9.10 ~ 9.14	スケトウダラの年齢査定法に関する作業部会
	吉村 拓	"	"	"	"
	宮部尚純	浮魚資源部	マドリッド ( スペイン )	9.11 ~ 9.19	ICCATメカジキ資源評価会議
	石塚吉生	浮魚資源部	ホバート ( 豪州 )	9.17 ~ 9.21	ミナミマグロ三国科学者第9回会議
	辻 祥子	"	"	"	"
	石塚吉生	浮魚資源部	キャンベラ ( 豪州 )	9.25 ~ 10. 5	ミナミマグロ三国行政官会議
	北洋資源部員	北洋資源部	清水 ( 日本 )	10. 9 ~ 10.12	ベーリング海スケトウダラ資源調査結果解析等の打合せ
	渡邊 洋	浮魚資源部	ヌーメア ( ニューカレドニア )	10. 8	南太平洋ピンナガ第3回研究集会
	大隅清治	所長	ワシントン ( 米国 )	10.11 ~ 10.12	鯨類捕獲調査に関する日米協議
	上野康弘	北洋資源部	東京 ( 日本 )	10.15 ~ 10.25	日ソ漁業専門家・科学者会議
	粕谷俊雄	外洋資源部	ラホヤ ( 米国 )	10.19 ~ 10.25	受動的漁具による鯨類の死亡に関するIWCシンポジウム及び研究集会
	谷津明彦	"	"	"	"
	永延幹男	海洋・南大洋部	ホバート ( 米国 )	10.19 ~ 11. 4	CCAMLR第9回年次会議
	一井太郎	"	"	"	"
	川原重幸	外洋資源部	イズミル他各地 ( トルコ )	10.22 ~ 11. 4	トルコ水産資源開発調査に関する現地協議
	大隅清治	所長	バンクーバー ( カナダ )	10.26 ~ 11. 3	INPFC第37回定例年次会議
	伊藤 準	企画連絡室	"	"	"
	畑中 寛	外洋資源部	"	"	"
	粕谷俊雄	"	"	"	"
	谷津明彦	"	"	"	"
佐々木喬	北洋資源部	"	"	"	
石田行正	"	"	"	"	

年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的
2	水戸啓一	北洋資源部	バンクーバー (カナダ)	2. 10.26 ~ 11. 3	INPFC第37回定例年次会議
	松村皐月	海洋・南大洋部	つくば (日本)	10.29 ~ 11.31	地球観測計画国際シンポジウム
	鈴木治郎	浮魚資源部	マドリッド (スペイン)	10.29 ~ 11. 9	ICCAT調査統計小委員会 (SCRS)
	石塚吉生	"	"	"	"
	宮部尚純	"	"	"	"
	水戸啓一	北洋資源部	シアトル (米国)	11. 5 ~ 11. 9	INPFC日米共同底魚調査作業部会
	石田行正	北洋資源部	ナナイモ (カナダ)	11.11 ~ 11.13	日加共同打合せ
	鈴木治郎	浮魚資源部	マドリッド (スペイン)	11.12 ~ 11.16	ICCAT第7回特別会議
	馬場徳寿	北洋資源部	シアトル、サンディエゴ (米国)	11.12 ~ 11.24	海洋廃棄物によるオットセイ資源への影響及び鰭脚類研究集会
	北洋資源部員	北洋資源部	清水 (日本)	3. 1.21	ベーリング公海漁業に関する意見交換
	佐々木喬	北洋資源部	シアトル (米国)	2. 4 ~ 2. 8	スケトウダラ資源評価作業部会
	水戸啓一	"	"	"	"
	松村皐月	海洋・南大洋部	ホノルル (米国)	2.12	衛星画像受信装置を用いた海洋研究ワークショップ
	佐々木喬	北洋資源部	ワシントン (米国)	2.17 ~ 2.18	ベーリング公海漁業国会議
	佐々木喬	北洋資源部	ワシントン (米国)	2.19 ~ 2.21	ベーリング公海における生物資源の保存と管理に関する関係国会議
	加藤秀弘	外洋資源部	レイキャビック (アイスランド)	2.23 ~ 3. 2	IWC北大西洋ナガスジラ特別会議
	上野康弘	北洋資源部	パークスビル (カナダ)	2.28 ~ 3. 1	カラフトマス及びシロザケワークショップ
	浮魚資源部員	浮魚資源部	清水 (日本)	3.27	インド洋キハダ資源評価について打合せ
	畑中 寛	企画連絡室	シアトル (米国)	3.29	流し網オブザーバープログラム日・米科学者会議
	3	畑中 寛	企画連絡室	ワシントン D.C (米国)	3. 4. 2 ~ 4. 4
鈴木治郎		浮魚資源部	セント (フランス)	4.10 ~ 4.14	ICCATクロマグロ年計画 (BYP) 打合せ
鈴木治郎		浮魚資源部	マイアミ (米国)	4.17 ~ 4.24	ICCAT 西大西洋キハダ資源研究集会
川原重幸		外洋資源部	ウエリントン (ニュージーランド)	4.29 ~ 5. 2	ニュージーランド資源評価委員会
粕谷俊雄		外洋資源部	レイキャビック (アイスランド)	5. 8 ~ 5.20	IWC第43回科学小委員会年次会議
加藤秀弘		"	"	"	"
宮下富夫		"	"	"	"
西村 明		北洋資源部	シアトル (米国)	5.19 ~ 5.27	INPFC日米共同底魚調査作業部会
粕谷俊雄		外洋資源部	レイキャビック (アイスランド)	5.21 ~ 5.30	IWC第43回年次会議
加藤秀弘		"	"	"	"
辻 祥子		浮魚資源部	ラホヤ (米国)	5.24 ~ 5.25	世界クロマグロ会議作業グループ打合せ
畑中 寛		企画連絡室	釜山 (韓国)	5.29 ~ 5.31	日・韓・台流し網民間協議
魚住雄二		外洋資源部	ハリファックス (カナダ)	6. 3 ~ 6.22	NAFO科学理事会
加藤秀弘		外洋資源部	ベルゲン (ドイツ)	6. 4 ~ 6. 5	ミンククジラ年齢査定作業部会
伊藤 準		所長	シドニー (カナダ)	6.11 ~ 6.14	公海流し網科学レビュー会合
畑中 寛		企画連絡室	"	"	"
渡邊 洋		浮魚資源部	"	"	"
谷津明彦		外洋資源部	"	"	"
粕谷俊雄		"	"	"	"
平松一彦		海洋・南大洋部	"	"	"
長澤和也		北洋資源部	ナナイモ (カナダ)	6.16 ~ 6.22	放流さけ類と天然さけ類の相互関係に関する国際シンポジウム
辻 祥子		浮魚資源部	ポートビラ (バヌアツ)	6.17 ~ 6.21	SPC第4回まぐる・かじき常設委員会
中野秀樹		浮魚資源部	東京 (日本)	6.18 ~ 6.20	IATTC第49回年次会議

年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的
3	加藤秀弘	外洋資源部	東京 ( 日本 )	3. 6.18 ~ 6.20	IATTC 第49回年次会議
	西川康夫	浮魚資源部	レイクアローヘッド ( 米国 )	6.20 ~ 6.23	Tuna Conference 第42回
	辻 祥子	"	"	"	"
	岡田啓介	浮魚資源部	清水 ( 日本 )	6.24 ~ 6.28	IPTP インド洋キハダ資源評価ワー クショップのためのはえなわ関係国 による準備会議
	鈴木治郎	"	"	"	"
	藁科侑生	"	"	"	"
	辻 祥子	"	"	"	"
	宮部尚純	"	"	"	"
	中野秀樹	"	"	"	"
	魚崎浩司	"	"	"	"
	伊藤 準	所長	東京 ( 日本 )	6.25 ~ 6.26	INPFCシンポジウム打合せ
	鈴木治郎	浮魚資源部	ワシントン D.C ( 米国 )	6.25 ~ 6.28	大西洋クロマグロに関する米国関係 機関との協議
	畑中 寛	企画連絡室	東京 ( 日本 )	7. 8 ~ 8.13	頭足類の漁業生物学における最近の 進歩に関するワークショップ
	川原重幸	外洋資源部	"	"	"
	魚住雄二	"	"	"	"
	永延幹男	海洋・南大洋部	ヤルタ(ソ連)テネリフェ(ス 페인)	7.15 ~ 8.15	CCAMLR おきあみ・生態系モニタ リング作業部会
	畑中 寛	企画連絡室	清水 ( 日本 )	7.23 ~ 7.25	第12回北太平洋ピンナガ研究集会
	浮魚資源部員	浮魚資源部	"	"	"
	佐々木喬	北洋資源部	東京 ( 日本 )	7.29 ~ 8. 2	ベーリング公海スケトウダラ漁業に 関する関係国会議及び漁業国会議
	水戸啓一	"	"	"	"
	渡邊 洋	浮魚資源部	シアトル ( 米国 )	7.30	流し網オブザーバートレーニング
	畑中 寛	企画連絡室	シアトル ( 米国 )	7.31 ~ 8. 3	1990/1991 大目流し網オブザーバ ータレビュー会議
	渡邊 洋	浮魚資源部	"	"	"
	中野秀樹	"	"	"	"
	松村臯月	海洋・南大洋部	ワシントン D.C ( 米国 )	8. 5 ~ 8.10	Sea WiFS 科学者のワーキンググル ープ会合
	長澤和也	北洋資源部	ペトロザポーツ ( ソ連 )	8.12 ~ 8.23	第 3 回魚類寄生虫国際シンポジウム
	小倉未基	北洋資源部	ペトロパブロフスク・カム チャッキー ( ソ連 )	8.16 ~ 8.30	日ソ科学技術協力計画に基づく、さ けます再生産問題に関する意見交換
	魚住雄二	外洋資源部	ハリファックス ( カナダ )	9. 2 ~ 9.16	NAFO年次会議
	鈴木治郎	浮魚資源部	セントアンドリュース ( カナ ダ )	9.10 ~ 9.17	ICCATメカジキ作業部会
	宮部尚純	"	"	"	"
	平松一彦	海洋・南大洋部	"	"	"
	石塚吉生	浮魚資源部	ウエリントン ( ニュージーラ ンド )	9.21 ~ 10. 5	ミナミマグロ三国科学者第10回会議
	辻 祥子	"	"	"	"
	畑中 寛	企画連絡室	ワシントンD.C ( 米国 )	10. 7 ~ 10.13	公海流し網漁業協議
	長澤和也	北洋資源部	ナホトカ ( ソ連 )	10.18 ~ 11. 1	日・ソ漁業専門家・科学者会議
	永延幹男	海洋・南大洋部	ホバート ( 豪州 )	10.18 ~ 11. 8	CCAMLR年次会議
	一井太郎	"	"	"	"
	伊藤 準	所長	東京 ( 日本 )	10.24 ~ 11. 8	INPFC第38回定例年次会議
	畑中 寛	企画連絡室	"	"	"
	粕谷俊雄	外洋資源部	"	"	"
加藤秀弘	"	"	"	"	
宮下富夫	"	"	"	"	
早瀬茂雄	"	"	"	"	
谷津明彦	"	"	"	"	
佐々木喬	北洋資源部	"	"	"	
馬場徳寿	"	"	"	"	
水戸啓一	"	"	"	"	
西村 明	"	"	"	"	
石田行正	"	"	"	"	



年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的
3	上野康弘	北洋資源部	東京 ( 日本 )	3.10.24 ~ 11. 8	INPFC第38回定例年次会議
	小倉未基	"	"	"	"
	長澤和也	"	"	"	"
	渡邊 洋	浮魚資源部	"	"	"
	中野秀樹	"	"	"	"
	鈴木治郎	浮魚資源部	マドリッド ( スペイン )	10.28 ~ 11. 8	ICCAT 科学調査小委員会及び年次 会議
	石塚吉生	"	"	"	"
	宮部尚純	"	"	"	"
	平松一彦	海洋・南大洋部	"	"	"
	伊藤 準	所長	清水 ( 日本 )	11.11	太平洋における将来のさけ・ます類 研究に関する国際研究集会
	他多数				
	水戸啓一	北洋資源部	東京 ( 日本 )	11.18 ~ 11.25	INPFC日米共同底魚調査作業部会
	西村 明	"	"	"	"
	鈴木治郎	浮魚資源部	ヌーメア ( ニューカレドニア )	12. 1 ~ 12.13	北太平洋におけるまぐろ漁業の相互 作用に関するFAO専門家会議
	石塚吉生	"	"	"	"
	宮部尚純	"	"	"	"
	畑中 寛	企画連絡室	シアトル ( 米国 )	12.10 ~ 12.13	PICESワークショップ
	岡田啓介	浮魚資源部	気仙沼 ( 日本 )	4. 1.26 ~ 1.29	ミナミマグロ 3 国 3 者会議
	鈴木治郎	"	"	"	"
	石塚吉生	"	"	"	"
	伊藤智幸	"	"	"	"
	鈴木治郎	浮魚資源部	ラホヤ ( 米国 )	2.10	海洋漂流物に関するシンポジウム
	粕谷俊雄	外洋資源部	コペンハーゲン ( デンマーク )	2.22 ~ 3. 9	IWC改訂管理方式作業部会及び科学 委員会特別会議
水戸啓一	北洋資源部	シアトル ( 米国 )	2.24 ~ 2.28	スケトウダラ資源評価作業部会	
西村 明	北洋資源部	シアトル ( 米国 )	2.26 ~ 2.28	ベーリング公海オブザーバー・プロ グラム作業部会	
長澤和也	北洋資源部	東京 ( 日本 )	3. 2 ~ 3. 7	日口漁業合同第 8 回委員会	
4	畑中 寛	企画連絡室	ヌーク ( グリーンランド )	4. 4 7 ~ 4. 9	海産哺乳類の合理的利用に関する国 際会議
	佐々木喬	北洋資源部	ワシントンD.C ( 米国 )	4.12	ベーリング公海漁業国会議
	畑中 寛	企画連絡室	ワシントンD.C ( 米国 )	4.13 ~ 4.14	日米漁業協議
	佐々木喬	北洋資源部	ワシントンD.C ( 米国 )	4.13 ~ 4.15	ベーリング公海漁業全関係国会議
	畑中 寛	企画連絡室	ウエリントン ( ニュージーラ ンド )	4.27 ~ 4.30	あざらし及び海鳥と漁業との相互 作用に関するワークショップ
	水戸啓一	北洋資源部	シアトル ( 米国 )	5.11 ~ 5.15	INPFC日米共同底魚調査作業部会
	鈴木治郎	浮魚資源部	ホノルル ( 米国 )	5.18 ~ 5.21	第 5 回南太平洋まぐろ・かじき類常 設研究委員会
	辻 祥子	"	"	"	"
	石塚吉生	浮魚資源部	ホバート ( 豪州 )	5.27 ~ 5.29	ミナミマグロワークショップ
	西田 勤	"	"	"	"
	余川浩太郎	外洋資源部	ダートマス ( カナダ )	6. 1 ~ 6.17	NAFO 科学理事会
	粕谷俊雄	外洋資源部	グラスゴー ( 英国 )	6. 9 ~ 6.22	IWC 第44回科学委員会及び本委員会
	加藤秀弘	"	"	"	"
	鈴木治郎	浮魚資源部	ホノルル ( 米国 )	6.17 ~ 6.24	西部太平洋キハダ資源研究ワーク ショップ
	辻 祥子	"	"	"	"
	魚住雄二	浮魚資源部	レシフェ ( ブラジル )	7. 1 ~ 7. 7	ICCAT 南西大西洋まぐろ類デー ター準備会議
	魚住雄二	浮魚資源部	マイアミ ( 米国 )	7.22 ~ 7.29	ICCAT かじき作業部会
	中野秀樹	"	"	"	"
	畑中 寛	企画連絡室	プンタアレナス ( チリ )	7.27 ~ 8.15	CCAMLR 会議
	永延幹男	海洋・南大洋部	"	"	"
	魚住雄二	浮魚資源部	ラホヤ ( 米国 )	7.30 ~ 7.31	日米ピンナガ会議事前打合せ会議
	中野秀樹	"	"	"	"
	佐々木喬	北洋資源部	モスクワ ( ロシア )	8.12 ~ 8.14	ベーリング公海全関係国第 5 回会議

年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的
4	松村臯月	海洋・南大洋部	沖縄 ( 日本 )	4. 8.24 ~ 8.29	国際ワークショップ「水色リモートセンシングによる海洋広域基礎生産力測定」
	川崎 清	"	"	"	"
	水野恵介	海洋・南大洋部	バンガロール ( インド )	8.25 ~ 8.28	CCCOインド洋パネル
	辻 祥子	浮魚資源部	ジェネラルサントス ( フィリピン )	9. 1 ~ 9. 4	東南アジアまぐる第5回会議
	張 成年	"	"	"	"
	平松一彦	海洋・南大洋部	ダートマス ( カナダ )	9. 9 ~ 9.11	NAFO 科学者特別会議
	余川浩太郎	外洋資源部	"	"	"
	余川浩太郎	外洋資源部	ダートマス ( カナダ )	9.12 ~ 9.18	NAFO 年次会議
	宮部尚純	浮魚資源部	クレタ ( ギリシャ )	9.15 ~ 9.26	GFCM/ICCAT 会議及び ICCAT メカジキ会議
	鈴木治郎	浮魚資源部	マドリッド ( スペイン )	9.28 ~ 10. 3	ICCAT メカジキ作業部会議
	中野秀樹	"	"	"	"
	浮魚資源部員	浮魚資源部	清水 ( 日本 )	10. 5 ~ 10.10	ミナミマグロ3国科学者第11回会議
	魚住雄二	浮魚資源部	マドリッド ( スペイン )	10.10 ~ 10.20	ICCAT ピンナガワークショップ
	鈴木治郎	浮魚資源部	東京 ( 日本 )	10.11 ~ 10.16	ミナミマグロ3国行政官第11回会議
	石塚吉生	"	"	"	"
	畑中 寛	企画連絡室	ピクトリア ( カナダ )	10.11 ~ 10.17	PICES 第1回年次会議
	佐々木喬	北洋資源部	"	"	"
	石田行正	北洋資源部	ピクトリア ( カナダ )	10.13 ~ 10.16	PICES 関係シンポジウム「気候変動と北方魚類資源」
	石塚吉生	浮魚資源部	東京 ( 日本 )	10.14 ~ 10.16	第2回ミナミマグロ3国科学者ワークショップ
	辻 祥子	浮魚資源部	"	"	"
	西田 勤	"	"	"	"
	伊藤智幸	"	"	"	"
	石田行正	北洋資源部	シドニー ( カナダ )	10.17 ~ 10.18	カナダ海洋漁業省主催ワークショップ「沿岸域サケ幼魚の成長、分布および死亡率」
	上野康弘	"	"	"	"
	伊藤 準	所長	新潟 ( 日本 )	10.19 ~ 10.20	日・口漁業専門家・科学者会議
	長澤和也	北洋資源部	"	"	"
	畑中 寛	企画連絡室	シアトル ( 米国 )	10.20 ~ 10.21	INPFC 生物学調査常設委員会
	佐々木喬	北洋資源部	"	"	"
	石田行正	"	"	"	"
	永延幹男	海洋・南大洋部	ホバート ( 豪州 )	10.23 ~ 11. 8	CCAMLR 本会議
	一井太郎	"	"	"	"
	鈴木治郎	浮魚資源部	マドリッド ( スペイン )	10.24 ~ 11.13	ICCAT 科学調査小委員会及び年次会議
	宮部尚純	"	"	"	"
	平松一彦	海洋・南大洋部	"	"	"
	伊藤 準	所長	東京 ( 日本 )	10.26 ~ 10.29	日・口漁業専門家科学者会議
	加藤秀弘	外洋資源部	"	"	"
	伊藤 準	所長	箱根 ( 日本 )	11.12 ~ 11.14	ADEOS/NACAT 国際ワークショップ
	石塚吉生	浮魚資源部	ホバート ( 豪州 )	11.23 ~ 11.29	ミナミマグロ調査ワークショップ
	西田 勤	"	"	"	"
	粕谷俊雄	外洋資源部	リージェ ( ベルギー )	11.25 ~ 12. 3	海産哺乳類と漁業の競合に関するワークショップ
	北洋資源部員	北洋資源部	清水 ( 日本 )	12.18	日加科学技術協力による水産音響ワークショップ事前打合せ会議
	松村臯月	海洋・南大洋部	アナポリス ( 米国 )	5. 1.17 ~ 1.25	Sea WiFS サイエンスチームミーティング
	西村 明	北洋資源部	サウスカロライナ ( 米国 )	1.23 ~ 1.27	耳石国際シンポジウム
	西村 明	北洋資源部	ナナイモ ( カナダ )	2.24 ~ 2.26	日加水産音響シンポジウム
	加藤秀弘	外洋資源部	ウラジオストック ( ロシア )	2.25 ~ 3. 5	北太平洋ミンククジラ調査のロシアとの打合せ会議
	長澤和也	北洋資源部	モスクワ ( ロシア )	2.28 ~ 3.19	日口漁業合同第9回委員会

年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的
4	魚住雄二	浮魚資源部	パペーテ ( タヒチ )	5. 3.29 ~ 4. 2	南太平洋ビンナガ第 5 回研究集会
5	鈴木治郎	浮魚資源部	マイアミ ( 米国 )	5. 4. 6 ~ 4. 9	照洋丸大西洋クロマグロ調査、メキシコ湾調査打合せ会議
	辻 祥子	"	"	"	"
	鈴木治郎	浮魚資源部	ラホヤ ( 米国 )	4.19 ~ 4.13	IATTC 太平洋クロマグロワークショップ
	辻 祥子	"	"	"	"
	加藤秀弘	外洋資源部	京都 ( 日本 )	4.19 ~ 5.14	IWC第45回科学委員会及び本会議
	永延幹男	海洋・南大洋部	"	"	"
	一井太郎	"	"	"	"
	畑中 寛	企画連絡室	"	"	"
	粕谷俊雄	外洋資源部	"	"	"
	宮下富夫	"	"	"	"
	木白俊哉	"	"	"	"
	島田裕之	"	"	"	"
	岩崎俊秀	"	"	"	"
	松村臯月	海洋・南大洋部	安山・京城 ( 韓国 )	4.21 ~ 4.25	韓国リモートセンシングセミナー
	西田 勤	浮魚資源部	レークアローヘッド ( 米国 )	5.16 ~ 5.22	Tuna Conference 第44回
	魚崎浩司	"	"	"	"
	鈴木治郎	浮魚資源部	パリ ( イタリア )	5.20 ~ 5.21	照洋丸大西洋クロマグロ調査地中海打合せ会議
	辻 祥子	"	"	"	"
	粕谷俊雄	外洋資源部	南京 ( 中国 )	6. 1 ~ 6. 4	ヨウスコウカワイルカの保護に関するワークショップ
	余川浩太郎	外洋資源部	ダートマス ( カナダ )	6. 2 ~ 6.15	NAFO科学理事会
	川崎 清	海洋・南大洋部	サンディエゴ ( 米国 )	6.13 ~ 6.26	The Second Sea WiFS Inter calibration Round・Robin Experiment 研究交流集会
	伊藤 準	所長	焼津 ( 日本 )	6.14	ミナミマグロ 3 国 3 者会議
	浮魚資源部員	浮魚資源部	"	"	"
	辻 祥子	浮魚資源部	ポナペ ( ミクロネシア )	6.16 ~ 6.18	SPCまぐる・かじき常設委員会
	岡本浩明	"	"	"	"
	辻 祥子	浮魚資源部	ポナペ ( ミクロネシア )	6.21 ~ 6.23	西部太平洋キハダ資源研究ワークショップ
	岡本浩明	"	"	"	"
	石田行正	北洋資源部	ウラジオストック ( ロシア )	6.21 ~ 6.24	さけます 4 カ国条約科学調査統計委員会
	石塚吉生	浮魚資源部	ホバート ( 豪州 )	6.26 ~ 7. 5	ミナミマグロモニタリング調査ワークショップ
	西田 勤	"	"	"	"
	佐々木喬	北洋資源部	東京 ( 日本 )	6.28	ベーリング公海漁業国会議
	水戸啓一	"	"	"	"
	佐々木喬	北洋資源部	東京 ( 日本 )	6.29 ~ 7. 1	ベーリング公海漁業全関係国会議
水戸啓一	"	"	"	"	
余川浩太郎	外洋資源部	ケンブリッジ ( イギリス )	7. 4 ~ 7.10	南大洋の頭足類、その生活史と個体群についての国際シンポジウム	
魚住雄二	浮魚資源部	セントアンドリュース ( カナダ )	7. 4 ~ 7.13	ICCAT主催のワークショップ 「Technical Aspects of Methodologies which account for individual Growth Variability by Age」	
川原重幸	外洋資源部	アンカラ ( トルコ )	7.26 ~ 8. 7	トルコ水産資源調査に関するセミナー	
加藤秀弘	外洋資源部	東京 ( 日本 )	8. 4 ~ 8.12	WG-KRLL会議	
畑中 寛	企画連絡室	ソウル ( 韓国 )	8.16 ~ 8.23	WG-CEMP会議	
永延幹男	海洋・南大洋部	"	"	"	
一井太郎	"	"	"	"	
水戸啓一	北洋資源部	アンカレッジ ( 米国 )	8.24 ~ 8.25	PICESベーリング海作業部会	
粕谷俊雄	外洋資源部	コペンハーゲン ( デンマーク )	8.30 ~ 9. 3	ICESヒレナガゴンドウ研究班会合	
早瀬茂雄	外洋資源部	富山 ( 日本 )	9. 6 ~ 9. 9	PACEM IN MARIBUS 国際海洋法学会第21回高岡世界大会	



年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的
5	余川浩太郎	外洋資源部	ダートマス ( カナダ )	5. 9. 6 ~ 9.10	NAFO年次会議
	水野恵介	海洋・南大洋部	プレスト ( フランス )	9.11 ~ 9.18	TOGA / WOCE XBT 評 価 ワ ー ク シ ョ ッ プ
	余川浩太郎	外洋資源部	ダートマス ( カナダ )	9.13 ~ 9.15	NAFO科学者特別会合
	松村皐月	海洋・南大洋部	ワシントンD.C ( 米国 )	9.21 ~ 10. 1	衛星による海洋生物研究方針打合せ 及び第 4 回日米水色ワークショップ
	鈴木治郎	浮魚資源部	マドリッド ( スペイン )	9.24 ~ 10. 1	ICCAT クロマグロ資源評価作業部 会議
	宮部尚純	"	"	"	"
	平松一彦	海洋・南大洋部	"	"	"
	川崎 清	海洋・南大洋部	ゴダード ( 米国 )	9.25 ~ 10. 1	日米水色ワークショップ
	伊藤 準	所長	ウラジオストック ( ロシア )	10. 3 ~ 10.14	日口漁業専門家科学者会議
	長澤和也	北洋資源部	"	"	"
	加藤秀弘	外洋資源部	東京 ( 日本 )	10. 3 ~ 10. 9	IWC/IDCR 調査専門家会議及び計画 会議
	島田裕之	"	"	"	"
	宮下富夫	"	"	"	"
	辻 祥子	浮魚資源部	マヘ ( セイシェル )	10. 4 ~ 10. 8	インド洋まぐろ資源に関する専門家 会議
	西田 勤	"	"	"	"
	佐々木喬	北洋資源部	ソウル ( 韓国 )	10. 5 ~ 10. 8	ベーリング公海全関係国第 8 回会議
	畑中 寛	所長	東京 ( 日本 )	10.10 ~ 10.13	IWCシロナガスクジラ調査特別作業 部会
	加藤秀弘	外洋資源部	"	"	"
	島田裕之	"	"	"	"
	鈴木治郎	浮魚資源部	ホバート ( 豪州 )	10.10 ~ 10.20	第12回ミナミマグロ科学者会議
	石塚吉生	"	"	"	"
	西田 勤	"	"	"	"
	平松一彦	海洋・南大洋部	"	"	"
	粕谷俊雄	外洋資源部	台北 ( 台湾 )	10.14 ~ 10.25	台湾産鯨類研究計画に関する会議
	石塚吉生	浮魚資源部	キャンベラ ( 豪州 )	10.21 ~ 10.25	ミナミマグロ行政官会議
	永延幹男	海洋・南大洋部	ホバート ( 豪州 )	10.22 ~ 11. 8	CCAMLR年次会議
	一井太郎	"	"	"	"
	畑中 寛	企画連絡室	シアトル ( 米国 )	10.25 ~ 11.30	PICES 第 2 回年次会議
	佐々木喬	北洋資源部	"	"	"
	石田行正	"	"	"	"
	長澤和也	"	"	"	"
	鈴木治郎	浮魚資源部	マドリッド ( スペイン )	10.25 ~ 11. 5	ICCAT SCRS
	魚住雄二	"	"	"	"
	宮部尚純	"	"	"	"
	平松一彦	海洋・南大洋部	"	"	"
	西村 明	北洋資源部	シアトル ( 米国 )	10.26 ~ 11. 1	スケトウダラ加入に関するワー クシ ョ ッ プ
	石田行正	北洋資源部	バンクーバー ( カナダ )	11. 1 ~ 11. 5	北太平洋遡河性魚類第 1 回委員会
	辻 祥子	浮魚資源部	ホノルル ( 米国 )	11. 8 ~ 11.12	太平洋キハダ資源・モデリングワ ークシ ョ ッ プ
	佐々木喬	北洋資源部	ワシントンD.C ( 米国 )	11.29 ~ 12. 3	ベーリング公海全関係国第 9 回会議
	加藤秀弘	外洋資源部	武漢、南京、大連、北京 ( 中 国 )	12. 4 ~ 12.18	日中鯨類研究共同協議
松村皐月	海洋・南大洋部	東京 ( 日本 )	12. 8 ~ 12. 9	国際ワークショップ 地球環境と複 合リモートセンシング	
魚住雄二	浮魚資源部	ラホヤ ( 米国 )	12. 8 ~ 12.14	北太平洋ビンナガ第13回研究集会	
中野秀樹	"	"	"	"	
魚崎浩司	"	"	"	"	
松村皐月	海洋・南大洋部	箱根 ( 日本 )	12.10	オーシャンカラー国際ワークシ ョ ッ プ	
伊藤 準	所長	清水 ( 日本 )	12.15	日口共同さけ・ます研究集会	
畑中 寛	企画連絡室	"	"	"	
石塚吉生	浮魚資源部	ホバート ( 豪州 )	6. 1.15 ~ 2. 5	ミナミマグロワークショップ	
辻 祥子	"	"	"	"	

年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的
5	平松一彦 佐々木喬	海洋・南大洋部 北洋資源部	ホバート(豪州) 東京(日本)	6. 1.15 ~ 2. 5 1.24 ~ 1.28	ミナミマグロワークショップ ベーリング海スケトウダラ共同調査 作業部会
	水戸啓一	"	"	"	"
	西村 明	"	"	"	"
	柳本 卓	"	"	"	"
	伊藤 準	所長	カウイチャンベイ(カナダ)	2. 7 ~ 2.13	日加さけ・ますワークショップ
	小林時正	企画連絡室	"	"	"
	石田行正	北洋資源部	"	"	"
	長澤和也	"	"	"	"
	東 照雄	"	"	"	"
	小倉未基	"	"	"	"
	塩本明弘	海洋・南大洋部	"	"	"
	余川浩太郎	外洋資源部	ブリュッセル(ベルギー)	2.13 ~ 2.17	NAFO科学理事会ならびに漁業委員 会特別会議
	畑中 寛	企画連絡室	ノーフォーク島(豪州)	2.18 ~ 2.26	IWC南氷洋サンクチュアリー作業部 会
	一井太郎	海洋・南大洋部	"	"	"
	水戸啓一	北洋資源部	シアトル(米国)	2.22 ~ 2.25	ベーリング海スケトウダラ資源評価 作業部会
	水野恵介	海洋・南大洋部	東京(日本)	2.24 ~ 2.25	日中アジアモンスーンワークショッ プ
	伊藤 準	所長	東京(日本)	2.28 ~ 3.11	日口漁業合同委員会
長澤和也	北洋資源部	"	"	"	
石田行正	"	"	"	"	
松村臯月	海洋・南大洋部	ワシントンD.C(米国)	3.13 ~ 3.20	Sea WiFSサイエンスミーティング	
6	北洋資源部員	北洋資源部	清水(日本)	6. 4. 5 ~ 4.12	北鳳丸調査打合せ会議
	宮下富夫	外洋資源部	キャンベラ(豪州)	4.16 ~ 4.23	資源量推定作業部会
	鈴木治郎	浮魚資源部	ウェリントン(ニュージーラ ンド)	4.19 ~ 4.29	ミナミマグロ三国科学者第13回会議
	石塚吉生	"	"	"	"
	西田 勤	"	"	"	"
	平松一彦	海洋・南大洋部	"	"	"
	加藤秀弘	外洋資源部	プエルト・バジャルタ(メキ シコ)	4.30 ~ 5.17	IWC第46回科学委員会及び本会議
	岩崎俊秀	"	"	"	"
	一井太郎	海洋・南大洋部	"	"	"
	畑中 寛	所長	"	4.30 ~ 5.31	"
	宮下富夫	外洋資源部	"	"	"
	松村臯月	海洋・南大洋部	マイアミ(米国)	5. 7 ~ 5.16	国際海洋廃棄物第3回会議
	馬場徳寿	北洋資源部	"	"	"
	魚住雄二	浮魚資源部	台北(台湾)	5.10 ~ 5.16	ICCATはえなわ資料整備会議
	中野秀樹	"	"	"	"
	水野恵介	海洋・南大洋部	トリエステ(イタリア)	5.13 ~ 5.20	WCRPインド洋パネル
	西田 勤	浮魚資源部	レイクアローヘッド(米国)	5.23 ~ 5.26	45 Tuna Conference レイクアロー ヘッド
	石塚吉生	浮魚資源部	ウェリントン(ニュージーラ ンド)	5.23 ~ 5.27	ミナミマグロ保存条約第1回委員会
	一井太郎	海洋・南大洋部	ベニス(イタリア)	5.28 ~ 6. 5	第6回南極生物学シンポジウム
	鈴木治郎	浮魚資源部	ビルバオ(スペイン)	5.31 ~ 6.10	ICCATピンナガ調査計画最終会議
	魚住雄二	"	"	"	"
	松村臯月	海洋・南大洋部	コナ(米国)	5.31 ~ 6. 7	ADEOS/NSCAT サイエンスワー クショップ
	粕谷俊雄	外洋資源部	グアダハラ(メキシコ)サ ンルイスオビスポ(米国)	6. 7 ~ 6.17	Society for Conservation Biology
余川浩太郎	外洋資源部	ダートマス(カナダ)	6. 8 ~ 6.22	NAFO科学理事会	
加藤秀弘	外洋資源部	ワシントン(米国)	6.22 ~ 6.26	北太平洋鯨類捕獲調査再考に関する 日米協議会	

年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的
6	魚住雄二	浮魚資源部	プレスト ( フランス )	6. 6.26 ~ 7. 1	ICCAT 第 2 回体長組成変換に関するワークショップ
	宮部尚純	浮魚資源部	ラホヤ ( 米国 )	6.26 ~ 7. 2	米国クロマグロ資源評価ヒヤリング・レビュー
	水戸啓一	北洋資源部	シアトル ( 米国 )	7.14 ~ 7.15	PICESベーリング海作業部会
	石塚吉生	浮魚資源部	ホバート ( 豪州 )	7.15 ~ 7.23	ミナミマグロ幼魚加入量モニタリングワークショップ
	西田 勤	"	"	"	"
	渡邊朝生	海洋・南大洋部	ホノルル ( 米国 )	7.17 ~ 7.24	米国海洋学会太平洋海盆会議
	永延幹男	海洋・南大洋部	ケープタウン ( 南アフリカ )	7.18 ~ 8. 8	CCAMLR科学委員会作業部会
	一井太郎	"	"	7.25 ~ 8. 2	"
	水戸啓一	北洋資源部	石巻、釧路、函館 ( 日本 )	7.19 ~ 8. 7	韓国科学者との共同調査検討会
	石田行正	北洋資源部	カムチャッカ ( ロシア )	8. 1 ~ 8.12	1994年日口科学技術協力計画に基づくさけ・ます再生産条件に係る意見交換
	鈴木治郎	浮魚資源部	ダマンドレ ( ブラジル )	8. 1 ~ 8.13	ICCAT 南大西洋のマグロ類資源に対するCPUEの開発のためのデータ準備会議
	中野秀樹	"	"	"	"
	宮部尚純	浮魚資源部	コロール ( パラオ )	8. 3 ~ 8.13	南太平洋委員会マグロ・カジキ常設委員会及び第 4 回中西部太平洋キハダ研究グループ会議
	北洋資源部員	北洋資源部	清水 ( 日本 )	8. 8 ~ 8. 9	日米韓共同調査検討会
	加藤秀弘	外洋資源部	長崎 ( 日本 )	8.28 ~ 8.30	日中鯨類共同研究検討会議
	佐木 喬	企画連絡室	モスクワ ( ロシア )	9.12 ~ 9.19	ベーリング公海漁業準備会議
	余川浩太郎	外洋資源部	ダートマス ( カナダ )	9.13 ~ 9.26	NAFO年次会議・科学者特別会合
	鈴木治郎	浮魚資源部	マラガ ( スペイン )	9.19 ~ 9.27	GFCM/ICCAT 共同ワークショップ及び ICCAT 東大西洋クロマグロ資源評価会合
	宮部尚純	"	"	"	"
	平松一彦	海洋・南大洋部	"	"	"
	川崎 清	海洋・南大洋部	サンディエゴ ( 米国 )	9.25 ~ 10. 2	SIRREXワークショップ
	加藤秀弘	外洋資源部	東京 ( 日本 )	10. 4 ~ 10. 8	IWC/IDCR 南ミンククジラ資源調査航海計画会議
	島田裕之	"	"	"	"
	若林 清	北洋資源部	ウラジオストック ( ロシア )	10. 9 ~ 10.16	NPAFC 第 2 回年次会議
	北洋資源部員	北洋資源部	清水 ( 日本 )	10.14 ~ 10.14	ベーリング海スケトウダラ資源調査検討会
	長澤和也	北洋資源部	根室 ( 日本 )	10.15 ~ 10.17	PIDES GLOBECワークショップ
	石田行正	"	"	"	"
	佐々木喬	企画連絡室	根室 ( 日本 )	10.17 ~ 10.24	PICES第 3 回年次会議
	若林 清	北洋資源部	"	"	"
	長澤和也	"	"	10.18 ~ 10.22	"
	水戸啓一	"	"	"	"
	柳本 卓	"	"	"	"
	塩本明弘	海洋・南大洋部	"	"	"
	谷津明彦	外洋資源部	"	10.17 ~ 10.22	"
	森 純太	"	"	"	"
	加藤秀弘	"	"	10.20 ~ 10.22	"
	鈴木治郎	浮魚資源部	マドリッド ( スペイン )	10.17 ~ 10.28	ICCATメカジキ資源評価会議
	中野秀樹	"	"	"	"
	永延幹男	海洋・南大洋部	ホバート ( 豪州 )	10.21 ~ 11. 6	CCAMLR 第13回年次会議同科学委員会
	一井太郎	"	"	"	"
水戸啓一	北洋資源部	波崎 ( 日本 )	10.24 ~ 10.25	ベーリング海スケトウダラ資源日米共同調査作業部会	
西村 明	"	"	"	"	
柳本 卓	"	"	"	"	
佐々木喬	企画連絡室	新潟、東京 ( 日本 )	10.30 ~ 11. 9	日口漁業専門家科学者会議	
長澤和也	"	"	"	"	



年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的
6	石田行正	北洋資源部	新潟、東京 (日本)	6.10.30 ~ 11. 9	日口漁業専門家科学者会議
	鈴木治郎	浮魚資源部	マドリッド (スペイン)	11.12 ~ 12. 5	ICCAT 科学統計小委員会、年次会議
	宮部尚純	"	"	"	"
	石塚吉生	"	"	11.12 ~ 11.28	"
	魚住雄二	"	"	"	"
	平松一彦	海洋・南大洋部	"	"	"
	馬場徳寿	北洋資源部	伊勢 (日本)	11.17 ~ 11.18	天然資源の開発利用に関する日米会議 ( UJNR ) 水産増殖専門部会
	東 照雄	"	"	"	"
	粕谷俊雄	外洋資源部	トロムソ (ノルウェー)	11.26 ~ 12. 3	北東大西洋海産哺乳類生産学国際シンポジウム
	加藤秀弘	外洋資源部	トロムソ、ベルゲン (ノルウェー)	11.26 ~ 12.12	北東大西洋海産哺乳類生産学国際シンポジウム、g(0)作業部会
	木白俊哉	"	"	"	"
	粕谷俊雄	外洋資源部	ホンコン (香港)	12. 3 ~ 12. 8	アジア産カワイルカ委員会第1回会合
	魚住雄二	浮魚資源部	エンセナダ (メキシコ)	12.10 ~ 12.17	太平洋メカジキシンポジウム
	中野秀樹	"	"	"	"
	長澤和也	北洋資源部	ブラジリア、ベレーン (ブラジル)	12.10 ~ 12.25	アマゾン河口水産資源調査事前調査
	渡邊朝生	海洋・南大洋部	シアトル (米国)	7. 1. 8 ~ 1.15	GOOS専門家会議
	浮魚資源部員	浮魚資源部	清水 (日本)	1.23 ~ 1.31	FAOまぐろ類漁業相互作用会議
	粕谷俊雄	外洋資源部	鴨川 (日本)	1.27 ~ 1.29	海産哺乳類に関する国際シンポジウム
	加藤秀弘	"	"	"	"
	岩崎俊秀	"	"	"	"
	余川浩太郎	外洋資源部	ブリュッセル (ベルギー)	1.28 ~ 2. 4	NAFO特別会議
	浮魚資源部員	浮魚資源部	清水 (日本)	2. 1 ~ 2. 2	北太平洋クロマグロに関するIATTCとの会議
	若林 清	北洋資源部	シアトル (米国)	2. 5 ~ 2.12	ベーリング海スケトウダラ専門家会議
	西村 明	"	"	"	"
	畑中 寛	所長	ワシントン (米国)	3. 1 ~ 3. 5	鯨類捕獲調査に関する日米協議
	若林 清	北洋資源部	シアトル (米国)	3. 5 ~ 3. 8	NPAFC調査計画調整会合
	石田行正	"	"	"	"
	佐々木喬	企画連絡室	モスクワ (ロシア)	3. 5 ~ 3.18	日口漁業合同委員会第11回会議
	加藤秀弘	外洋資源部	東京 (日本)	3. 6 ~ 3.11	IWC/SC シロナガスクジラ会合
	渡邊朝生	海洋・南大洋部	東京 (日本)	3. 6 ~ 3.11	海洋変動の数値予測に関する国際ワークショップ
	水野恵介	"	"	3. 7 ~ 3.10	"
鈴木治郎	浮魚資源部	ジェノア (イタリア)	3.11 ~ 3.17	ICAT クロマグロ研究者会議、FAO 事務局打合せ	
辻 祥子	"	"	"	"	
川崎 清	海洋・南大洋部	クワラトレンガ (マレーシア)	3.18 ~ 3.25	SEAFDEC/MFRAMD セミナ	
川口 創	外洋資源部	ベルゲン (ノルウェー)	3.25 ~ 3.31	IWC 汚染ワークショップ	
渡邊朝生	海洋・南大洋部	メルボルン (豪州)	3.30 ~ 4. 9	TOG95シンポジウム	
7	加藤秀弘	外洋資源部	キャンベラ (豪州) オークランド、ウェリントン (ニュージーランド)	7. 4. 2 ~ 4. 8	IWC コミッショナー 海外交渉
	石塚吉生	企画連絡室	コペンハーゲン (デンマーク)、ベルゲン (ノルウェー)	4. 3 ~ 4.14	TAC 決定過程に関する情報収集
	辻 祥子	浮魚資源部	ヌメア (ニューカレドニア)	4. 7 ~ 4.15	SPC 海洋漁業プログラム等に関する調査意見交換
	鈴木治郎	浮魚資源部	台北 (台湾)	4. 9 ~ 4.16	北太平洋ピンナガ第14回研究集会
	魚住雄二	"	"	"	"
	中野秀樹	"	"	"	"
	魚崎浩司	"	"	"	"
	畑中 寛	所長	ダブリン (アイルランド)	5. 6 ~ 6. 5	IWC 第47回総会・科学委員会

年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的
7	加藤秀弘	外洋資源部	ダブリン (アイルランド)	7. 5. 6 ~ 6. 5	IWC第47回総会・科学委員会
	宮下富夫	"	"	"	"
	一井太郎	"	"	"	"
	島田裕之	"	"	"	"
	平松一彦	海洋・南大洋部	"	"	"
	鈴木治郎	浮魚資源部	ヨテポリ (スウェーデン)	6. 3 ~ 6.15	漁獲漁業のプレコーショナリアブ ローチに関する専門家会議
	余川浩太郎	外洋資源部	ダートマス (カナダ)	6. 5 ~ 6.23	NAFO科学理事会
	粕谷俊雄	外洋資源部	台北 (台湾)	6.14 ~ 6.22	鯨類の生態と管理についてのシンポ ジウム
	浮魚資源部員	浮魚資源部	清水 (日本)	7.10 ~ 7.19	CCSBT 1995年科学者会議
	永延幹男	海洋・南大洋部	ハンブルグ (ドイツ)、シア ナ (イタリア)	7.15 ~ 8. 6	CCAMLR 国際共同調査ワー クショップ、生態系モニタリング管理 作業部会
	一井太郎	"	"	"	"
	川口 創	"	"	"	"
	長澤和也	北洋資源部	東京 (日本)	7.19 ~ 7.21	「北極圏環境研究」国際シンポジウ ム
	柳本 卓	北洋資源部	東京 (日本)	7.21	日韓共同調査打合せ会議
	畑中 寛	所長	カムチャッカ (ロシア)	7.29 ~ 8.11	日口間の科学技術協力に基づくサケ ・マス再生産に関する会議
	辻 祥子	浮魚資源部	ホバート (豪州)	8. 5 ~ 8.12	ミナミマグロ幼魚モニタリングワー クショップ
	西田 勤	"	"	"	"
	松村臯月	海洋・南大洋部	ワシントンD.C (米国)	8. 7 ~ 8.11	Sea WiFS サイエンスレビューミー ティング
	魚崎浩司	浮魚資源部	コペンハーゲン (デンマーク)	8.13 ~ 8.21	ICES板鰓類研究集会
	中野秀樹	"	"	"	"
	辻 祥子	浮魚資源部	ヌメア (ニューカレドニア)	8.14 ~ 8.25	南太平洋委員会及び中西部太平洋キ ハダワークショップ
	宮部尚純	"	"	"	"
	加藤秀弘	外洋資源部	ハリファックス (カナダ)	9. 4 ~ 9.18	NAFO科学者特別会合科学理事会及 び年次会議
	余川浩太郎	"	"	"	"
	魚住雄二	浮魚資源部	アンティグア (グアテマラ)	9. 9 ~ 9.18	ワシントン条約動物委員会
	中野秀樹	"	"	"	"
	松村臯月	海洋・南大洋部	台北 (台湾)	9.11 ~ 9.18	OCI (海洋水色イメージャー) 第1 回サイエンスチームワーキンググル ープ会合
	永延幹男	海洋・南大洋部	台北 (台湾)	9.11 ~ 9.18	亜熱帯海域衛星観測研究会
	川崎 清	"	"	"	"
	鈴木治郎	浮魚資源部	プリンディジ (イタリア)	9.11 ~ 9.23	ICCAT / GFCM 共同ワークショップ 及び ICCAT ツナシンポジウム作業 部会
	竹内幸夫	"	"	"	"
	西田 勤	浮魚資源部	コロンボ (スリランカ)	9.23 ~ 10. 3	IPTP / インド洋マグロ会議
	岡本浩明	"	"	"	"
	佐々木喬	企画連絡室	ウラジオストック (ロシア)	9.24 ~ 9.28	ロシア太平洋漁業海洋研究所70周年 記念式典
	鈴木治郎	浮魚資源部	マドリッド (スペイン)	9.30 ~ 10.16	ICCAT SCRS
	辻 祥子	"	"	"	"
	中野秀樹	"	"	"	"
	宮部尚純	"	"	"	"
	平松一彦	海洋・南大洋部	"	"	"
	加藤秀弘	外洋資源部	東京 (日本)	10. 1 ~ 10. 6	シロナガスクジラ国際共同調査計画 会議・IWC / IDCR南極海ミンクジ ラ調査計画会議
平松一彦	海洋・南大洋部	"	"	"	
石塚吉生	企画連絡室	キャンベラ (豪州)	10. 1 ~ 10. 8	CCSBT 特別会合	
長澤和也	北洋資源部	ミュンヘン (ドイツ)	10. 1 ~ 10. 9	第4回魚類寄生虫国際シンポジウム	

年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的
7	水野恵介	海洋・南大洋部	ジャカルタ (インドネシア)	7.10. 9 ~ 10.13	インドネシア通過流に関する国際ワークショップ
	佐々木喬	企画連絡室	青島 (中国)	10.14 ~ 10.25	PICES第4回年次会議
	加藤秀弘	外洋資源部	"	"	"
	水戸啓一	北洋資源部	"	"	"
	長澤和也	"	"	"	"
	上野康弘	"	"	"	"
	谷津明彦	外洋資源部	"	"	"
	西田 勤	浮魚資源部	北京 (中国)	10.15 ~ 10.21	アジア水産学会第4回北京大会
	永延幹男	海洋・南大洋部	ホバート (豪州)	10.20 ~ 11. 5	CCAMLR第14回年次会議
	一井太郎	"	"	"	"
	西村 明	北洋資源部	シアトル (米国)	10.24 ~ 10.29	スケトウダラの生産と加入に関するセミナー
	柳本 卓	"	"	"	"
	中野秀樹	浮魚資源部	東京 (日本)	10.28	IUCN「東アジアの生物多様性を保全する国際フォーラム」
	佐々木喬	企画連絡室	ウラジオストック (ロシア)	10.29 ~ 11. 9	日・口漁業専門家・科学者会議
	石田行正	北洋資源部	"	"	"
	若林 清	北洋資源部	シアトル (米国)	10.29 ~ 11.14	ベーリング公海漁業条約締約国会議及び北太平洋遡河性魚類委員会第3回年次会議
	鈴木治郎	浮魚資源部	マドリッド (スペイン)	11. 8 ~ 11.20	ICCAT第14回通常会議
	宮部尚純	"	"	"	"
	石塚吉生	企画連絡室	京都 (日本)	12. 3 ~ 12.10	食料安全保障国際漁業会議
	粕谷俊雄	外洋資源部	オーランド (米国)	12.12 ~ 12.20	海産哺乳類学会
	馬場徳寿	北洋資源部	"	"	"
	魚住雄二	浮魚資源部	ウエリントン (ニュージーランド)	12.16 ~ 12.21	ミナミマグロ保存委員会生態学的関連種検討グループ第1回会合
	石塚吉生	企画連絡室	キャンベラ (豪州)	8. 1.15 ~ 1.22	CCSBT 特別会議
	外洋資源部員	外洋資源部	東京 (日本)	1.25 ~ 2. 2	鯨類資源国際検討会
	外洋資源部員	外洋資源部	鴨川 (日本)	2. 2 ~ 2. 4	海獣類国際シンポジウム
	鈴木治郎	浮魚資源部	マイアミ (米国)	2.24 ~ 3. 1	ICCATサメ類作業部会
	魚住雄二	"	"	"	"
	中野秀樹	"	"	"	"
	松村臯月	海洋・南大洋部	紋別 (日本)	2.28 ~ 2.29	北方圏極国際シンポジウム
	石塚吉生	企画連絡室	ホバート (豪州)	3. 2 ~ 3.23	ミナミマグロモデリングワークショップ
	辻 祥子	浮魚資源部	"	"	"
	竹内幸夫	"	"	"	"
	魚住雄二	浮魚資源部	ラロトンガ (クック諸島)	3. 4 ~ 4.11	南太平洋ピンナガ第6回研究集会
	松永浩昌	"	"	"	"
	佐々木喬	企画連絡室	東京 (日本)	3.10 ~ 3.20	日・口漁業合同委員会第12回会議
	若林 清	北洋資源部	"	"	"
石田行正	"	"	"	"	
松村臯月	海洋・南大洋部	サンディエゴ、ワシントンD.C (米国)	3.13 ~ 3.21	日米水色ワークショップ	
加藤秀弘	外洋資源部	ワシントンD.C (米国)	3.20 ~ 3.24	調査捕鯨に関わる日米協議	
谷津明彦	外洋資源部	マルデルプラタ (アルゼンチン)	3.23 ~ 3.31	アルゼンチンマツイカの生物学に関する共同調査打合せ会議	
余川浩太郎	"	"	"	"	
加藤秀弘	外洋資源部	ハワイ (米国)	3.23 ~ 4. 2	IWCシンポジウム「気候変動が鯨類に与える影響」と関係ワークショップ	
一井太郎	海洋・南大洋部	"	3.25 ~ 4. 2	"	
木白俊哉	外洋資源部	トロムソ (ノルウェー)	3.26 ~ 3.31	NAMMCO第6回年次会議	
8	伊藤智幸	浮魚資源部	シアトル、マイアミ、モントレ、ラホヤ (米国)	4. 4 ~ 4.12	アーカイバルタグ、太平洋クロマグロに関する打合せ
	西田 勤	浮魚資源部	シアトル、ウッズホール (米国)	4. 4 ~ 4.14	まぐろ類資源研究の方法に関する検討会



年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的
8	川口 創	海洋・南大洋部	ホバート、タウンズビル(豪州)	8. 4. 9 ~ 4.17	南極オキアミ生態研究打合せ会議
	松永浩昌	浮魚資源部	モンレー、ナラガンセット(米国)	4.10 ~ 4.17	サメ類の漁業資源標識等について情報収集会議
	辻 祥子	浮魚資源部	イスタンブール(トルコ)、カルタヘナ(スペイン)	4.11 ~ 4.15	大西洋クロマグロ漁獲情報収集会議
	竹内幸夫	"	"	"	"
	清田雅史	北洋資源部	ワシントンD.C(米国)	4.11 ~ 4.18	アシカ類の再生産特性と保全に関する国際シンポジウム
	辻 祥子	浮魚資源部	マドリッド(スペイン)	4.16 ~ 4.19	ICCATクロマグロ作業部会
	宮部尚純	"	"	"	"
	竹内幸夫	"	"	"	"
	平松一彦	海洋・南大洋部	"	"	"
	島田裕之	外洋資源部	ホバート(豪州)	4.17 ~ 4.19	鯨類音響資源調査ワークショップ
	粕谷俊雄	外洋資源部	ケンブリッジ(英国)	4.20 ~ 4.28	ICESヒレナガゴンドウクジラ作業部会
	辻 祥子	浮魚資源部	ファノ(イタリア)	4.23 ~ 4.25	ICCAT クロマグロ年、卵稚仔ワークショップ
	西川康夫	"	"	"	"
	竹内幸夫	"	"	"	"
	魚住雄二	浮魚資源部	ロンドン(英国)	4.26 ~ 5. 3	IUCNレッドリスト会合
	鈴木治郎	浮魚資源部	キャンベラ(豪州)	4.27 ~ 5. 4	CCSBT 第 2 回特別会合
	石塚吉生	企画連絡室	"	"	"
	永延幹男	海洋・南大洋部	ケンブリッジ(英国)	5. 5 ~ 5.10	CCAMLR統計サブグループ会合
	一井太郎	"	"	"	"
	畑中 寛	所長	東京(日本)	5. 7 ~ 5.10	北太平洋クロマグロ類科学委員会
	鈴木治郎	浮魚資源部	"	"	"
	辻 祥子	"	"	"	"
	宮部尚純	"	"	"	"
	伊藤智幸	"	"	"	"
	魚住雄二	"	"	"	"
	中野秀樹	"	"	"	"
	張 成年	"	"	"	"
	張 成年	浮魚資源部	レイクアロウヘッド(米国)	5.20 ~ 5.25	マグロ会議第47回
	岡崎 誠	海洋・南大洋部	"	"	"
	水野恵介	海洋・南大洋部	むつ(日本)	5.28 ~ 5.31	太平洋海洋観測ブイネットワーク国際ワークショップ
	鈴木治郎	浮魚資源部	清水(日本)	5.27 ~ 6. 6	ミナミマグロ調査漁獲ワークショップ
	石塚吉生	企画連絡室	"	"	"
	辻 祥子	浮魚資源部	"	"	"
	西田 勤	"	"	"	"
	伊藤智幸	"	"	"	"
	竹内幸夫	"	"	"	"
	松本隆之	"	"	"	"
	畑中 寛	所長	アバディーン(英国)	5.28 ~ 7. 2	IWC第48回科学委員会・年次会議
	加藤秀弘	外洋資源部	"	"	"
	宮下富夫	"	"	"	"
	平松一彦	北洋資源部	"	"	"
	一井太郎	海洋・南大洋部	"	"	"
	松村泉月	企画連絡室	東京(日本)	6. 3 ~ 6. 4	ADEOS/OCTS国際ワークショップ
	余川浩太郎	外洋資源部	ダートマス(カナダ)	6. 3 ~ 6.22	NAFO科学理事会6月会合
	鈴木治郎	浮魚資源部	アゾレス(ポルトガル)	6.10 ~ 6.21	ICCAT まぐる漁業に関するシンポジウム
	鈴木治郎	浮魚資源部	マイアミ(米国)	7. 9 ~ 7.22	ICCATカジキ類ワークショップ
	魚住雄二	"	"	"	"
	魚崎浩司	"	"	"	"
	外洋資源部員	外洋資源部	東京(日本)	7.18 ~ 7.19	外洋性大型イカ類に関する国際シンポジウム

年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的
8	宮部尚純	浮魚資源部	ヌメア ( ニューカレドニア )	8. 7.12 ~ 7.24	中部太平洋かつお・まぐろ漁業データ収集調査に関する技術会議
	岡本浩明	浮魚資源部	ヌメア ( ニューカレドニア )	7.19 ~ 7.28	SPC 第 9 回まぐろ・かじき常設委員会
	辻 祥子	浮魚資源部	ホバート ( 豪州 )	7.23 ~ 7.26	ミナミマグロ加入量モニタリングワークショップ
	西田 勤	"	"	"	"
	若林 清	北洋資源部	カムチャッカ ( ロシア )	7.28 ~ 8. 8	日口科学技術協力調査( さけ・ます )
	石田行正	北洋資源部	プリスベーン ( 豪州 )	7.29 ~ 8. 4	第 2 回世界水産学会
	長澤和也	北洋資源部	オルデンブルグ ( ドイツ )	7.29 ~ 8. 5	国際カイアシ類会議
	中野秀樹	浮魚資源部	プリスベーン ( 豪州 )	7.31 ~ 8. 4	IUCN ( 世界自然保護連合 ) サメ専門家会合
	魚住雄二	"	"	"	"
	鈴木治郎	浮魚資源部	台北 ( 台湾 )	8. 3 ~ 8.11	ICCAT ピンナガ資源評価会合
	魚崎浩司	"	"	"	"
	永延幹男	海洋・南大洋部	ベルゲン ( ノルウェー )	8. 5 ~ 8.29	CCAMLR 作業部会
	一井太郎	"	"	"	"
	川口 創	"	"	"	"
	宮地邦明	海洋・南大洋部	ビクトリア ( カナダ )	8.11 ~ 8.18	PORSEC ( 太平洋リモセン会議 ) '96
	渡邊朝生	海洋・南大洋部	ニューポートビーチ ( 米国 )	8.18 ~ 8.25	WOCE 太平洋ワークショップ
	畑中 寛	所長	ホバート ( 豪州 )	8.24 ~ 9. 8	OCSBT 科学委員会
	石塚吉生	企画連絡室	"	"	"
	辻 祥子	浮魚資源部	"	"	"
	西田 勤	"	"	"	"
	竹内幸夫	"	"	"	"
	平松一彦	北洋資源部	"	"	"
	余川浩太郎	外洋資源部	サンクトペテルブルグ ( ロシア )	9. 1 ~ 9.15	NAFO 科学者特別会合及び年次会議
	岡村 寛	"	"	"	"
	鈴木治郎	浮魚資源部	ジェノバ ( イタリア )	9. 9 ~ 9.22	ICCAT クロマグロ作業部会
	宮部尚純	"	"	"	"
	竹内幸夫	"	"	"	"
	平松一彦	北洋資源部	"	"	"
	鈴木治郎	浮魚資源部	プラハ ( チェコ )	9.22 ~ 9.28	CITES 動物委員会
	中野秀樹	"	"	"	"
	石塚吉生	企画連絡室	キャンベラ ( 豪州 )	9.23 ~ 9.27	CCSBT 本会議
	辻 祥子	浮魚資源部	"	"	"
	鈴木治郎	浮魚資源部	ハリファックス ( カナダ )	9.30 ~ 10.11	ICCAT メカジキ作業部会
	魚住雄二	"	"	"	"
	若林 清	北洋資源部	シアトル ( 米国 )	10. 7 ~ 10.11	公海スケトウダラ条約科学者・専門家会合
	西村 明	"	"	"	"
	松村皐月	企画連絡室	ナナイモ ( カナダ )	10.10 ~ 10.22	PICES 第 5 回年次会議
	長澤和也	北洋資源部	"	"	"
	馬場徳寿	"	"	"	"
	西村 明	"	"	"	"
	加藤秀弘	外洋資源部	"	"	"
	森 純太	"	"	"	"
	塩本明弘	海洋・南大洋部	"	"	"
	若林 清	北洋資源部	東京 ( 日本 )	10.21 ~ 10.26	NPAFC 年次会議
	長澤和也	"	"	"	"
	石田行正	"	"	"	"
	粕谷俊雄	外洋資源部	サンチアゴ ( チリ )	10.19 ~ 10.27	南米海産哺乳類学会
	永延幹男	海洋・南大洋部	ホバート ( 豪州 )	10.19 ~ 11. 3	CCAMLR 本会議
	一井太郎	"	"	"	"
	鈴木治郎	浮魚資源部	マドリッド ( スペイン )	10.19 ~ 11. 3	ICCAT 科学者委員会
	宮部尚純	"	"	"	"
	魚住雄二	"	"	"	"
	中野秀樹	"	"	"	"
	平松一彦	北洋資源部	"	"	"

年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的	
8	長澤和也	北洋資源部	新潟、東京 ( 日本 )	8.10.31 ~ 11.10	日口漁業専門家・科学者会議	
	石田行正	"	"	"	"	
	宮部尚純	浮魚資源部	ラホヤ ( 米国 )	11.11 ~ 11.15	世界メパチ会議	
	岡本浩明	"	"	"	"	
	若林 清	北洋資源部	モスクワ ( ロシア )	11.11 ~ 11.16	ベーリング公海スケトウダラ条約年次会議	
	西村 明	北洋資源部	アンカレッジ ( 米国 )	11.12 ~ 11.20	飼魚類の重要性に関する国際シンポジウム	
	鈴木治郎	浮魚資源部	サンセバスチャン ( スペイン )	11.25 ~ 11.30	ICCATコミッショナー会議	
	宮部尚純	"	"	"	"	
	永延幹男	海洋・南大洋部	東京 ( 日本 )	12. 2 ~ 12. 6	第19回国際極域生物シンポジウム	
	一井太郎	"	"	"	"	
	西村 明	北洋資源部	マンデルプラタ ( アルゼンチン )	12. 2 ~ 12.23	アルゼンチン水産資源評価管理計画短期専門家会議	
	水野恵介	海洋・南大洋部	京都 ( 日本 )	12. 3 ~ 12. 6	モンスーンアジアの気候システムに関する国際ワークショップ	
	渡邊朝生	"	"	"	"	
	魚住雄二	浮魚資源部	ロンドン ( 英国 )	12.12 ~ 12.16	IUCN英国支部主催持続可能な漁業セミナー	
	石田行正	北洋資源部	コペンハーゲン ( デンマーク )	9. 1.20 ~ 1.26	太平洋さけ及び大西洋さけ研究集会	
	長澤和也	"	"	"	"	
	粕谷俊雄	外洋資源部	鴨川 ( 日本 )	1.31 ~ 2. 2	国際海洋生物研究シンポジウム	
	加藤秀弘	"	"	"	"	
	宮下富夫	"	"	"	"	
	吉田英可	"	"	"	"	
	( 特別研究員 )					
	辻 祥子	浮魚資源部	キャンベラ ( 豪州 )	2.16 ~ 2.22	CCABT再開協議	
	粕谷俊雄	外洋資源部	ダッカ ( バングラデシュ )	2.19 ~ 3. 5	第2回アジアカワイルカ会議と関連会合	
	上野康弘	北洋資源部	パークスプリー ( カナダ )	2.25 ~ 3. 2	ベニザケとシロザケワークショップ	
	鈴木治郎	浮魚資源部	ハワイ ( 米国 )	3. 1 ~ 3. 9	メカジキ第2回国際シンポジウム	
	魚住雄二	"	"	"	"	
	張 成年	"	"	"	"	
	竹内幸夫	"	"	"	"	
	余川浩太郎	外洋資源部	"	"	"	
	松永浩昌	浮魚資源部	ホバート ( 豪州 )	3. 1 ~ 3. 9	FAO主催漁獲統計調整作業部会	
	石田行正	北洋資源部	モスクワ ( ロシア )	3. 1 ~ 3.16	日口漁業合同委員会	
	若林 清	北洋資源部	バンクーバー ( カナダ )	3. 2 ~ 3. 3	NPAFC調査調整会合	
	岩崎俊秀	外洋資源部	トロムソ ( ノルウェー )	3. 8 ~ 3.18	NAMMCO ( 北大西洋海産哺乳類委員会科学委員会 )	
松村臯月	企画連絡室	横浜 ( 日本 )	3.10 ~ 3.14	ADEOS国際ワークショップ		
亀田卓彦	海洋・南大洋部	"	"	"		
浮魚資源部員	浮魚資源部	清水 ( 日本 )	3.11 ~ 3.14	ICCATサメ会議		
松村臯月	企画連絡室	神奈川 ( 日本 )	3.12 ~ 3.14	海洋トモグラフィ国際シンポジウム		
松村臯月	企画連絡室	熱海 ( 日本 )	3.15 ~ 3.16	日米水色ワークショップ		
松村臯月	企画連絡室	東京 ( 日本 )	3.17	IOCCG ( 国際海洋水色会議 ) ワークショップ		
西村 明	北洋資源部	シアトル ( 米国 )	3.23 ~ 3.30	ベーリング公海漁業オブザーバートレーニング		



表 5 . 海上及び海外調査の実績

年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的
62	馬場徳寿	底魚資源部	駿河湾	62. 4.10 ~ 4.14	バイオテレメトリーによる魚類の行動調査( 俊鷹丸 )
	小井土隆	浮魚資源部	"	"	"
	小倉未基	北洋資源部	"	"	"
	吉田主基	底魚資源部	三陸沖	4.12 ~ 5.12	オットセイ海上調査( 若竹丸 )
	馬場徳寿	底魚資源部	三陸沖	5. 7 ~ 6.12	オットセイ海上調査( 若潮丸 )
	西川康夫	浮魚資源部	南西諸島水域	5. 9 ~ 6. 5	クロマグロ産卵調査( 俊鷹丸 )
	水戸啓一	底魚資源部	大陸棚	5.13 ~ 7.14	日米共同アラスカ湾海底魚資源調査( 第35大清丸 )
	小倉未基	北洋資源部	北西太平洋	5.30 ~ 6.25	日加さけ・ます共同調査( 北米丸 )
	東 照雄	北洋資源部	ベーリング海	6. 1 ~ 7.25	さけ・ます資源及び北洋イルカ資源調査( 若竹丸 )
	加藤 守	北洋資源部	北西太平洋	6.27 ~ 7.22	日ソさけ・ます共同調査( 北米丸 )
	吉田主基	底魚資源部	セント・ポール島	7. 1 ~ 8.10	オットセイ網絡まり日米共同調査
	吉村 拓	底魚資源部	大陸棚	7.10 ~ 9.10	日米共同アラスカ湾海底魚資源調査( 第35大清丸 )
	山田陽巳	底魚資源部	グリーンランド海域西岸	7.11 ~ 8.19	グリーンランド海域底魚資源調査( 深海丸 )
	粕谷俊雄	海洋・南大洋部	千葉県沖	7.19 ~ 8. 2	ツチクジラ調査
	鈴木治郎	浮魚資源部	上ノ加江及び石垣島沖	7.24 ~ 8. 7	クロマグロ幼魚の標識放流
	粕谷俊雄	海洋・南大洋部	千葉県沖	8. 5 ~ 8.18	ツチクジラ調査
	村松臯月	海洋・南大洋部	鹿島灘～遠州灘	8.20 ~ 8.29	中小型魚群の索餌環境調査( 俊鷹丸 )
	塩本明弘	企画連絡室	"	"	"
	粕谷俊雄	海洋・南大洋部	千葉県沖	8.20 ~ 8.21	ツチクジラ調査
	宮下富夫	海洋・南大洋部	北西太平洋	9. 1 ~ 10.31	北西太平洋鯨類目視調査( 第15利丸 )
	和田志郎	海洋・南大洋部	中部北太平洋	9. 6 ~ 11.10	いか流し網漁業調査( 第81金栄丸 )
	吉田主基	底魚資源部	北部太平洋	10.20 ~ 12.10	北部太平洋のアカイカ資源調査( 北鳳丸 )
	嶋津靖彦	海洋・南大洋部	南極スコシア海南西部海域	10.28 ~ 63. 3.18	第5次南極海調査航海( 開洋丸 )
	遠藤直成	"	"	"	"
	石塚吉生	浮魚資源部	オーストラリア西岸沖合	11.25 ~ 63. 2. 7	ミナミマグロ調査( 照洋丸 )
	和田志郎	海洋・南大洋部	岩手県の大沢事業所	11.26 ~ 12.18	マッコウクジラ生物調査
	西川康夫	浮魚資源部	焼津市場	12.21 ~ 12.27	まぐろ類生物調査
	清田雅史	企画連絡室	"	"	"
	吉田主基	底魚資源部	沼津	63. 1.10 ~ 1.13	バイオテレメトリーの実験
	馬場徳寿	底魚資源部	"	1.12	バイオテレメトリーの実験
	吉田主基	底魚資源部	三陸沖	1.19 ~ 2. 4	オットセイ海上調査( 若潮丸 )
	手島和之	底魚資源部	アリュースシャン海盆	1.20 ~ 4.14	スケトウダラ調査( ミラーフリーマン号 )
	馬場徳寿	底魚資源部	三陸沖	2. 3 ~ 2.19	オットセイ海上調査( 若潮丸 )
	清田雅史	企画連絡室	長崎県五島沖	2. 4 ~ 2.19	ヨコワ標識放流
	粕谷俊雄	海洋・南大洋部	宮城、福島両県	2.15 ~ 2.17	マッコウクジラ頭骨計測
	宮下富夫	"	"	"	"
	渡邊 洋	浮魚資源部	下田	3. 9 ~ 3.10	かじき類資源調査
	西川康夫	"	"	"	"
	宮下富夫	海洋・南大洋部	沖縄	3.11 ~ 3.18	沖縄石弓イルカ漁業調査
	三尾眞一	海洋・南大洋部	遠州灘	3.17 ~ 3.29	海洋漂流物精密目視調査
行縄茂理	"	"	"	"	
塩本明弘	企画連絡室	"	"	"	
63	吉田主基	北洋資源部	北太平洋	63. 4.10 ~ 5.27	海産哺乳動物・アカイカ調査( 新りあす丸 )
	小井土隆	浮魚資源部	南西諸島沖合水域	4.12 ~ 5. 6	まぐろ類の行動生態調査( 俊鷹丸 )
	馬場徳寿	北洋資源部	"	"	"
	石田行正	"	"	"	"
	馬場徳寿	北洋資源部	三津	5.16 ~ 5.17	衛星用発信機の装着実験
	清田雅史	"	"	"	"
	西川康夫	浮魚資源部	南西諸島～九州西方水域	5.20 ~ 6.15	クロマグロ稚仔採集調査( 俊鷹丸 )
	宮下富夫	外洋資源部	パロー( アラスカ )	5.21 ~ 5.28	アラスカ捕鯨調査

年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的
63	小倉未基	北洋資源部	北東太平洋	63. 5.30 ~ 7.18	日加さけ・ます共同調査 ( W.E.Ricker 号 )
	東 照雄	北洋資源部	ベーリング海	6. 7 ~ 7.28	さけ・ます及び北洋いるか資源調査 ( 若竹丸 )
	馬場徳寿 清田雅史	北洋資源部 "	三津 "	6. 7 ~ 6. 9 "	衛星用発信機の性能試験 "
	石田行正	北洋資源部	千島水域	6.15 ~ 7.11	日ソさけ・ます共同調査( 若潮丸 )
	加藤 守	北洋資源部	北西太平洋	6.25 ~ 7.19	日ソさけ・ます共同調査( 北光丸 )
	清田雅史	北洋資源部	ベーリング海	7. 2 ~ 8.24	オットセイ分布・生態及び網絡まり 調査( 俊鷹丸 )
	馬場徳寿 米盛 保	北洋資源部 浮魚資源部	セントポール島 近畿大学水産研究所 (大島分 場) 及び日配飼料K K (南宇 和島)	7. 4 ~ 8. 8 7. 8 ~ 7.15	日米共同オットセイ網絡まり調査 クロマグロ産卵促進実験
	西川康夫	"	"	"	"
	和田志郎	外洋資源部	網走沖	7. 9 ~ 8. 2	イシイルカ生物調査( 第1安丸 )
	粕谷俊雄	外洋資源部	和田浦、鮎川、網走	7. 9 ~ 7.31	ツチクジラ調査
	吉村 拓	北洋資源部	八戸沖	7.12 ~ 7.21	計量魚探システムに関する予備調査 ( 第28正寿丸 )
	渡邊 洋 宮部尚純	浮魚資源部 "	下田港 "	7.14 ~ 7.15 "	かじき類資源調査 "
	宮下富夫	外洋資源部	和田浦	7.23 ~ 7.27	ツチクジラ生物調査
	手島和之	北洋資源部	ベーリング海アリューシャン 海盆	7.24 ~ 9.11	アリューシャン海盆スケトウダラ資 源調査( 第28正寿丸 )
	粕谷俊雄	外洋資源部	オホーツク海	8. 1 ~ 8.20	ツチクジラ調査
	松村臯月	海洋・南大洋部	三陸沖	9. 1 ~ 9.12	中小型魚類の索餌環境調査( 俊鷹丸 )
	塩本明弘	"	"	"	"
	宮下富夫	外洋資源部	北海道太平洋岸	9. 1 ~ 9.22	鯨類目視調査( 第15利丸 )
	吉村 拓	北洋資源部	ベーリング海アリューシャン 海盆	9. 7 ~ 10.23	アリューシヤ海盆スケトウダラ資源 調査( 第28正寿丸 )
	山田陽巳	外洋資源部	南東太平洋( チリ沖合 )	9.30 ~ 11. 8	マアジ調査( 越前丸 )
	粕谷俊雄	外洋資源部	鮎川	11. 1 ~ 11.10	ゴンドウクジラ調査
	佐々木喬	北洋資源部	三宅島近海	11.14 ~ 11.18	計量魚探システムテスト航海( 開洋 丸 )
	河野秀雄	浮魚資源部	オーストラリア西岸沖合	11.16 ~ 元 . 2. 3	ミナミマグロ調査( 照洋丸 )
	中野秀樹	"	"	"	"
	手島和之	北洋資源部	ベーリング海アリューシャン 海盆	12. 1 ~ 元 . 3.20	アリューシャン海盆スケトウダラ資 源調査( 開洋丸 )
	加藤秀弘	外洋資源部	南極海	12.17 ~ 元 . 4.25	南極海鯨類捕獲調査
	佐々木喬	北洋資源部	北海道羅臼	元 . 3. 3 ~ 3. 8	スケトウダラ標本採取
	馬場徳寿	北洋資源部	沼津市三津	3. 6	テレメトリー機器実験
	清田雅史	"	"	"	"
	鈴木治郎	浮魚資源部	東北水研	3. 9	まぐろ類標識放流データに関する調 査
	三尾眞一	海洋・南大洋部	串本沖	3. 9 ~ 3.22	潮目実態調査( 第5茨城丸 )
	松村臯月	"	"	"	"
塩浜利夫	浮魚資源部	東京魚市場	3.13 ~ 3.15	魚市場調査	
渡邊 洋	浮魚資源部	下田、伊東	3.23 ~ 3.24	カジキ類水揚調査	
西川康夫	"	"	"	"	
西川康夫	浮魚資源部	焼津魚市場	3.30 ~ 3.31	まぐろ魚体測定及び漁業情報の収集	
元	宮部尚純	浮魚資源部	南西諸島沖合水域	元 . 4. 8 ~ 5. 1	まぐろ類のバイテレ調査( 俊鷹丸 )
	遠藤宜成	海洋・南大洋部	三陸沖	4.10 ~ 4.12	三陸沖オキアミ漁調査
	早瀬茂雄	外洋資源部	ハワイ諸島周辺水域	4.10 ~ 5.26	アカイカ資源調査( 北鳳丸 )
	吉田主基	北洋資源部	三陸沖	4.12 ~ 5.28	海産哺乳動物・アカイカ調査( 新り あす丸 )
	山田陽巳	外洋資源部	駿河湾	5.10 ~ 5.12	浮魚類の魚種別、体長別のターゲッ トストレングスの推定調査( 俊鷹丸 )
	小倉未基	北洋資源部	北西太平洋	5.30 ~ 7.25	北洋さけ・ます資源調査( 新りあす 丸 )

年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的	
元	馬場徳寿	北洋資源部	北太平洋～東部ベーリング海	元 6. 3 ~ 8. 4	オットセイ分布、生態、網絡まり調査(俊鷹丸)	
	川原重幸	外洋資源部	ウルグアイ・アルゼンチン沖	6.14 ~ 11. 4	南西大西洋マツイカ調査(開洋丸)	
	東 照雄	北洋資源部	北西太平洋	6.18 ~ 7.15	北洋さけ・ます資源調査(北光丸)	
	清田雅史	北洋資源部	セントポール島	7. 3 ~ 8.14	日米共同網絡まり調査	
	上野康弘	北洋資源部	北海道東部・千島海域	7. 9 ~ 8.11	さけ・ます幼魚調査(若潮丸)	
	谷津明彦	外洋資源部	北太平洋中部海域	7. 9 ~ 8.14	アカイカ資源調査(若鳥丸)	
	加藤秀弘	外洋資源部	鮎川	7. 9 ~ 8. 2	小型捕鯨業生物調査	
	粕谷俊雄	外洋資源部	和田浦	7.10 ~ 8.14	小型捕鯨業生物調査	
	宮下富夫	外洋資源部	道東・三陸沖及びオホーツク海	7.11 ~ 8.28	ソ連200海里内鯨類目視調査(第1京丸)	
	水戸啓一	北洋資源部	ベーリング海	7.19 ~ 9. 3	スケトウダラ資源調査	
	加藤秀弘	外洋資源部	網走	8.31 ~ 9.14	小型捕鯨業生物調査	
	吉村 拓	北洋資源部	ベーリング海	8.31 ~ 10.18	スケトウダラ資源調査(第28正寿丸)	
	松村臯月	海洋・南大洋部	遠州灘沖海域	9. 4 ~ 9.19	中小型魚類の索餌環境調査(俊鷹丸)	
	塩本明弘	"	"	"	"	
	粕谷俊雄	外洋資源部	長崎県宇久島	9. 4 ~ 9.25	小型捕鯨業生物調査	
	塩浜利夫	浮魚資源部	オーストラリア西岸沖海域	9.25 ~ 12.26	ミナミマグロ幼魚調査(照洋丸) 三陸沿岸におけるシロザケ親魚の標本採集	
	上野康弘	北洋資源部	三陸沿岸	11. 7 ~ 11.15	本採集	
	渡辺 洋	浮魚資源部	タスマン海	11.18 ~ 12.26	ピンナガ資源調査	
	中野秀樹	浮魚資源部	三崎魚市場	11.19 ~ 11.20	ミナミマグロ耳石サンプリング	
	佐々木喬	北洋資源部	ベーリング海	2. 1.20 ~ 2.16	ベーリング公海スケトウダラ資源調査(開洋丸)	
	粕谷俊雄	外洋資源部	太地	1.22 ~ 1.27	捕鯨資料収集	
	小倉未基	北洋資源部	東京	3. 5 ~ 3. 7	生物体内磁性物質の透過電顕観察	
	石塚吉生	浮魚資源部	築地魚市場	3. 9	まぐろ類魚体資料収集	
	塩浜利夫	"	"	"	"	
	宮下富夫	外洋資源部	太地	3. 9	イルカ追い込み漁業資料受け取り及び調査説明	
	加藤秀弘	外洋資源部	太地	3.12 ~ 3.14	イルカ追い込み漁業資料受け取り及び調査説明	
	粕谷俊雄	外洋資源部	小笠原・父島	3.16 ~ 3.21	ザトウクジラ生態調査	
	加藤秀弘	"	"	"	"	
	石田行正	北洋資源部	山田・大槌	3.18 ~ 3.20	延縄用餌いなし調査及び秋ザケ研究打合せ	
	2	馬場徳寿	北洋資源部	三陸沖	2. 4.12 ~ 4.26	オットセイの分布・生態及び網絡まり調査(俊鷹丸)
		木白俊哉	外洋資源部	宇久島近海	5. 1 ~ 5.31	沿岸小型捕鯨生物調査及び監視
		川原重幸	外洋資源部	伊豆諸島沖	5. 7 ~ 5.11	浮魚類の魚探調査(俊鷹丸)
		魚住雄二	"	"	"	"
余川浩太郎		"	"	"	"	
塩本明弘		海洋・南大洋部	道東～三陸沖	5.12 ~ 6. 1	基礎生産力調査(蒼鷹丸)	
川原重幸		外洋資源部	アグラスバンク	5.16 ~ 6.18	底魚調査(アフリカーナ号)	
清田雅史		北洋資源部	北太平洋・ベーリング海	6. 1 ~ 8.10	オットセイ・海洋投棄物調査(俊鷹丸)	
谷津明彦		外洋資源部	北太平洋	6. 8 ~ 7.14	アカイカ資源調査(若鳥丸)	
小倉未基		北洋資源部	北西太平洋及びベーリング海	6.10 ~ 7.21	北洋さけ・ます資源調査(新りあす丸)	
石塚吉生		浮魚資源部	焼津	6.20	クロマグロ魚体測定	
渡辺 洋		"	"	"	"	
伊藤智幸		企画連絡室	"	"	"	
東 照雄		北洋資源部	北西太平洋	6.21 ~ 7.18	北洋さけ・ます資源調査(北光丸)	
馬場徳寿		北洋資源部	プリビロフ諸島	6.30 ~ 8. 5	日・米オットセイ繁殖島調査	
加藤秀弘		外洋資源部	宮城県鮎川	7. 4 ~ 7.25	沿岸小型捕鯨調査及び操業の監視	
上野康弘		北洋資源部	千島列島沿岸	7. 9 ~ 8. 9	日ソ共同さけ・ます幼魚調査(若潮丸)	
吉村 拓		北洋資源部	ベーリング海	7. 9 ~ 8.17	ベーリング公海漁業対策調査(第128大安丸)	



年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的
2	宮下富夫	外洋資源部	オホーツク海	2. 7.26 ~ 9.22	オホーツク海鯨類目視調査 ( 第 1 京丸 )
	渡邊 洋	浮魚資源部	下田	7.27 ~ 9.28	かじき類標本採取
	伊藤智幸	"	"	"	"
	松村皐月	海洋・南大洋部	駿河湾	8. 1 ~ 9. 2	ヘリコプター搭載水色計実験
	木白俊哉	外洋資源部	中緯度北太平洋	8. 2 ~ 9.28	中緯度北太平洋鯨類目視調査 ( 新宝洋丸 )
	西村 明	北洋資源部	ベーリング海	8.13 ~ 10. 7	ベーリング公海漁業対策調査( 第128 大安丸 )
	松村皐月	海洋・南大洋部	親潮水域	8.31 ~ 9.19	クロロフィル測定精度に関する実験航海 ( 俊鷹丸 )
	塩本明弘	"	"	"	"
	加藤秀弘	外洋資源部	北海道網走	9. 1 ~ 9.13	沿岸小型捕鯨監視及び調査
	上野康弘	北洋資源部	サハリン	9.17 ~ 10. 1	サハリンさけ・ます増殖河川調査
	馬場徳寿	北洋資源部	沼津	10.12	生態情報記憶装置の魚への装着実験
	清田雅史	"	"	"	"
	木白俊哉	外洋資源部	鮎川	10.22 ~ 11.21	沿岸小型捕鯨生物調査及び監視
	馬場徳寿	北洋資源部	沼津	10.24 ~ 10.25	オットセイ網絡まり実験
	清田雅史	"	"	"	"
	清田雅史	北洋資源部	セントポール島	10.30 ~ 11.12	オットセイ回遊調査
	石井晴人	海洋・南大洋部	ドレイク海峡から南極半島にかけた海域	11. 1 ~ 3. 2.25	第 6 次南極海調査 ( 開洋丸 )
	永延幹男	"	"	"	"
	一井太郎	"	"	"	"
	辻 祥子	浮魚資源部	オーストラリア西岸から北西岸沖	11. 6 ~ 3. 1.29	ミナミマグロ幼魚調査 ( 照洋丸 )
	渡邊 洋	"	"	"	"
	伊藤智幸	"	"	"	"
	石田行正	北洋資源部	天竜川	12.11	サツキマス標本採集
	粕谷俊雄	外洋資源部	太地	3. 1.17 ~ 1.19	いるか追込み漁業調査
	木白俊哉	"	"	"	"
	余川浩太郎	外洋資源部	南西大西洋公海域	1.26 ~ 3. 8	いか釣り調査 ( 第 2 新興丸 )
	奈須敬二	海洋・南大洋部	福岡、佐賀、鳴子、唐津、下関	2.18 ~ 2.25	ミンククジラ捕獲記録調査
伊藤智幸	浮魚資源部	養殖研究所	2.18 ~ 2.21	まぐろ類稚魚の同定	
上野康弘	北洋資源部	函館	3.27 ~ 3.28	アカイカ調査用流し網検査	
3	馬場徳寿	北洋資源部	三陸沖	3. 4.12 ~ 5. 1	オットセイの廃棄物汚染及び漁具に対する行動調査 ( 俊鷹丸 )
	清田雅史	北洋資源部	"	"	"
	川原重幸	外洋資源部	ニュージーランド200海里水域	5. 3 ~ 6.25	マアジトロール船便乗調査
	魚住雄二	外洋資源部	伊豆諸島近海	5. 7 ~ 5.10	アカイカ調査 ( 俊鷹丸 )
	余川浩太郎	外洋資源部	"	"	"
	石田行正	北洋資源部	中央太平洋及びベーリング海	6. 3 ~ 7.25	北洋さけ・ます資源調査 ( 若竹丸 )
	馬場徳寿	北洋資源部	ベーリング海	6. 3 ~ 7.29	オットセイの分布・生態及び網絡まり調査 ( 俊鷹丸 )
	木白俊哉	外洋資源部	太地	6. 5 ~ 7. 1	沿岸小型捕鯨生物調査及び監視
	小倉未基	北洋資源部	北西太平洋及びベーリング海	6. 9 ~ 7.25	北洋さけ・ます資源調査 ( 新りあす丸 )
	早瀬茂雄	外洋資源部	北太平洋	6.11 ~ 7.15	アカイカ資源調査 ( 若鳥丸 )
	水戸啓一	北洋資源部	ベーリング海東部大陸棚及びアリュースシャン海盆	6.11 ~ 7.21	ベーリング公海漁業対策調査 ( 翔洋丸 )
	西村 明	"	"	7.17 ~ 9.10	"
	東 照雄	北洋資源部	北太平洋	6.22 ~ 7.20	北洋さけ・ます調査 ( 北光丸 )
	田中博之	外洋資源部	北太平洋	6.28 ~ 8.22	アカイカ及び海鳥の生態調査 ( 照洋丸 )
	加藤秀弘	外洋資源部	和田浦	6.30 ~ 7.16	沿岸小型捕鯨生物調査
	清田雅史	北洋資源部	セントポール島	7. 1 ~ 8.11	日米共同オットセイ調査
	岩崎俊秀	外洋資源部	和田浦	7. 6 ~ 8.12	沿岸小型捕鯨生物調査及び監視

年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的
3	粕谷俊雄	外洋資源部	和田浦	3. 7.16 ~ 7.20	沿岸小型捕鯨生物調査
	宮下富夫	外洋資源部	北太平洋	7.22 ~ 9.22	鯨類目視調査(第1京丸)
	島田裕之	外洋資源部	北太平洋	7.23 ~ 9.22	鯨類目視調査(新宝洋丸)
	馬場徳寿	北洋資源部	小笠原父島近海	8. 5 ~ 8.10	海亀の海洋汚染及び生態調査
	加藤秀弘	外洋資源部	三陸~道東沖海域	8. 9 ~ 8.31	鯨類目視調査(俊鷹丸)
	岩崎俊秀	外洋資源部	"	8.26 ~ 9.19	"
	木白俊哉	外洋資源部	太地、鮎川	8.30 ~ 9.29	沿岸小型捕鯨生物調査
	伊藤智幸	浮魚資源部	南インド洋	9.28 ~ 11.18	ミナミマグロ調査
	木白俊哉	外洋資源部	鮎川	10. 1 ~ 10.29	沿岸小型捕鯨生物調査
	清田雅史	北洋資源部	セントポール島	10.20 ~ 11. 2	人工衛星を利用したオットセイの回遊調査
	島田裕之	外洋資源部	南半球V区	10.30 ~ 4. 3.25	IWC/IDCR 南極海鯨類資源調査
	松村臯月	海洋・南大洋部	太平洋赤道海域	11. 1 ~ 4. 1.10	海洋大循環調査(開洋丸)
	水野恵介	"	"	4. 1. 7 ~ 3.19	"
	渡邊朝生	"	"	"	"
	木白俊哉	外洋資源部		11.15 ~ 12. 1	沿岸小型捕鯨生物調査
	辻 祥子	浮魚資源部	東部インド洋	11.15 ~ 4. 3. 4	ミナミマグロの幼稚仔調査(照洋丸)
	魚崎浩司	"	"	"	"
	宮部尚純	浮魚資源部北	"	4. 1. 7 ~ 3. 4	"
	馬場徳寿	北洋資源部	駿河湾	11.25 ~ 11.27	パイオテレメトリー実験(俊鷹丸)
	西村 明	北洋資源部	アラスカ漁業科学センター	4. 1.31 ~ 2.29	日米共同スケトウダラ耳石研究
木白俊哉	外洋資源部	太地	2.24 ~ 2.29	追込み漁業調査	
4	魚住雄二	浮魚資源部	南アフリカ沖漁場	4. 4. 4 ~ 6.27	ミナミマグロのリアルタイムモニタリング計画(RTMT) オブザーバー調査
	清田雅史	北洋資源部	北海道沿岸	4.14 ~ 4.26	鱈脚類の分布生態調査(新りあす丸)
	馬場徳寿	北洋資源部	三陸沖	5. 7 ~ 6. 4	オットセイ海上調査
	谷津明彦	外洋資源部	北太平洋	5.14 ~ 6.23	平成4年度第1次航海(開洋丸)
	小倉未基	北洋資源部	千島列島沿岸	5.21 ~ 6.19	日口共同ベニザケ資源調査(新りあす丸)
	畑中 寛	企画連絡室	北太平洋	5.28 ~ 6.23	アカイカ流し網代替漁法開発調査(茨城丸)
	木白俊哉	外洋資源部	太地	5.31 ~ 6. 7	沿岸小型捕鯨生物調査
	石田行正	北洋資源部	中央太平洋及びベーリング海	6.10 ~ 7.24	北洋さけ・ます資源調査(若竹丸)
	早瀬茂雄	外洋資源部	北太平洋	6.12 ~ 7.22	アカイカ資源・いか流し網代替漁法開発調査(若鳥丸)
	小倉未基	北洋資源部	北西太平洋	6.26 ~ 7.29	北洋さけ・ます資源調査(新りあす丸)
	岩崎俊秀	外洋資源部	太地	6.30 ~ 7.16	沿岸小型捕鯨生物調査
	木白俊哉	"	"	6.30 ~ 8. 5	"
	清田雅史	北洋資源部	セントポール島	7. 6 ~ 8. 8	日米共同オットセイ網絡まり調査
	島田裕之	外洋資源部	伊勢湾	7.11 ~ 7.13	スナメリ目視調査
	上野康弘	北洋資源部	オホーツク海南部	7.11 ~ 8.12	日口共同さけ・ます幼魚調査(若潮丸)
	宮下富夫	外洋資源部	三河湾及び知多湾	7.15 ~ 7.16	スナメリ目視調査
	木白俊哉	外洋資源部	北太平洋	7.31 ~ 9. 3	鯨類目視調査(俊鷹丸)
	宮下富夫	外洋資源部	オホーツク海	8. 2 ~ 9.28	鯨類目視調査(第1京丸)
	加藤秀弘	外洋資源部	網走	8.31 ~ 9.10	沿岸小型捕鯨生物調査
	石田行正	北洋資源部	道東及び千島列島沿岸	9. 8 ~ 9.28	日口共同さけ・ます標識放流調査(北鳳丸)
	長澤和也	北洋資源部	"	9.28 ~ 10. 7	"
	木白俊哉	外洋資源部	鮎川	9.30 ~ 10.25	沿岸小型捕鯨生物調査
	中野秀樹	浮魚資源部	北太平洋	10.12 ~ 12.17	サメ混獲調査
	清田雅史	北洋資源部	セントポール島	10.18 ~ 11. 1	日米共同オットセイ回遊調査
	宮下富夫	外洋資源部	伊勢湾	10.23 ~ 10.24	スナメリ目視調査
	島田裕之	外洋資源部	南極海	11. 6 ~ 5. 2.22	IWC/IOCR 国際鯨類資源調査
	岩崎俊秀	外洋資源部	太地	11. 8 ~ 12.20	スジイルカ捕獲・分布調査
木白俊哉	外洋資源部	鮎川	11.15 ~ 12. 2	沿岸小型捕鯨生物調査	
長澤和弘	北洋資源部	北太平洋	11.24 ~ 12.30	さけ・ます越冬期調査(開洋丸)	

年度	氏名	所属	出張先	期間	目的
4	上野康弘	北洋資源部	北太平洋	4.11.24 ~ 12.30	さけ・ます越冬期調査 (開洋丸)
	辻 祥子	浮魚資源部	東部インド洋	12. 8 ~ 5. 3.10	ミナミマグロ調査 (照洋丸)
	岡本浩明	"	"	"	"
	水戸啓一	北洋資源部	ベーリング海	12.19 ~ 5. 3.24	スケトウダラ資源調査 (開洋丸)
	粕谷俊雄	外洋資源部	伊勢湾	5. 2. 1 ~ 2. 3	伊勢湾スナメリ目視調査
	宮下富夫	"	"	"	"
	木白俊哉	外洋資源部	北太平洋	2. 5 ~ 3. 3	北太平洋鯨類冬期分布目視調査
	岩崎俊秀	外洋資源部	大槌	2.25 ~ 3. 1	イシイルカ漁業調査
	宮下富夫	外洋資源部	北西太平洋	2.28 ~ 3.24	大型鯨類冬季分布目視調査 (第21興南丸)
5	馬場徳寿	北洋資源部	三陸沖	5. 4. 1 ~ 4.30	鰭脚類の分布生態調査
	宮部尚純	浮魚資源部	フィリピン	4.10 ~ 4.24	FAO プロジェクト「フィリピンの表層漁業における小型まぐろ類の種別判別」のサンプリング
	東 照男	北洋資源部	日本海	4.12 ~ 4.29	日口共同日本海マス調査 (北鳳丸)
	早瀬茂雄	外洋資源部	北太平洋	4.23 ~ 5.24	アカイカ資源調査 (開運丸)
	西村 明	北洋資源部	ベーリング海	5.12 ~ 7. 9	スケトウダラ仔稚魚調査 (開洋丸)
	柳本 卓	"	"	"	"
	西川康夫	浮魚資源部	南西諸島海域	5.13 ~ 6. 7	クロマグロ産卵調査 (照洋丸)
	川崎 清	海洋・南大洋部	道東・千島列島南部太平洋	5.13 ~ 5.28	基礎生産力グローバルマッピング手法調査 (俊鷹丸)
	塩本明弘	"	"	"	"
	木白俊哉	外洋資源部	太地	5.15 ~ 6. 5	沿岸小型捕鯨生物調査
	馬場徳寿	北洋資源部	オホーツク海	5.28 ~ 6.24	日口オットセイ海上調査
	長澤和也	北洋資源部	北太平洋及びベーリング海	6. 9 ~ 7.26	日米共同さけ・ます資源調査 (若竹丸)
	谷津明彦	外洋資源部	北太平洋	6.14 ~ 8.29	アカイカ好漁場探索調査 (63富士丸)
	木白俊哉	外洋資源部	和田浦	6.30 ~ 8. 5	沿岸小型捕鯨生物調査
	岩崎俊秀	外洋資源部	鮎川	7. 1 ~ 7.14	"
	石田行正	北洋資源部	北西太平洋	7. 1 ~ 7.26	さけ・ます資源調査 (北光丸)
	清田雅史	北洋資源部	セントポール島	7. 2 ~ 8. 9	オットセイ繁殖島調査
	川崎 清	海洋・南大洋部	オホーツク海	7. 8 ~ 7.27	衛星可視センサーによる基礎生産力に関する調査 (俊鷹丸)
	塩本明弘	"	"	"	"
	伊藤智幸	浮魚資源部	鳥取沖	7.28 ~ 7.30	クロマグロ調査
	宮下富夫	外洋資源部	西部北太平洋	8. 1 ~ 9.27	黒潮海域鯨類目視調査 (第1京丸)
	岩崎俊秀	外洋資源部	日本の南西海域	8.12 ~ 9. 2	鯨類目視調査 (俊鷹丸)
	木白俊哉	外洋資源部	"	8.31 ~ 9.22	"
	島田裕之	外洋資源部	オホーツク海	8.15 ~ 9.25	鯨類目視調査 (新宝洋丸) (31純友丸)
	上野康弘	北洋資源部	オホーツク海南部	8.16 ~ 9.13	さけ・ます幼魚調査 (若潮丸)
	小倉未基	北洋資源部	道東及び千島列島沿岸	9.15 ~ 9.24	日口共同さけ・ます調査
	張 成年	浮魚資源部	フィリピン海域	9.15 ~ 10. 1	FAO プロジェクト「小型まぐろ類種判別」第3回フィールド調査
	(特別研究員)				
	田中博之	外洋資源部	北太平洋	9.22 ~ 12. 8	アカイカ資源調査 (照洋丸)
	小倉未基	北洋資源部	オホーツク海及び北西太平洋	10.11 ~ 11. 4	さけ・ます幼魚調査 (開洋丸)
	上野康弘	"	"	10.11 ~ 11.30	"
	柳本 卓	北洋資源部	中部北太平洋海山(天皇海山)海域	10.24 ~ 11.30	中部北太平洋海山海域底魚調査
	岩崎俊秀	外洋資源部	北太平洋	10.31 ~ 11.15	200海里水域内流し網調査 (新宝洋丸)
東 照男	北洋資源部	オホーツク海及び北西太平洋	11. 6 ~ 11.30	さけ・ます幼魚調査 (開洋丸)	
木白俊哉	外洋資源部	鮎川	11.15 ~ 12. 2	沿岸小型捕鯨生物調査	
伊藤智幸	浮魚資源部	対馬周辺海域	11.24 ~ 11.30	クロマグロ調査	
島田裕之	外洋資源部	南極海及びソロモン諸島周辺海域	11.25 ~ 6. 3. 4	IWC / IDCR 国際鯨類資源調査及び南半球中低緯度鯨類目視調査	
岩崎俊秀	外洋資源部	太地	11.30 ~ 12.12	いるか漁業漁獲物調査	
西田 勤	浮魚資源部	西オーストラリア州アルバニー沖	6. 1..3 ~ 2. 9	ミナミマグロ音響調査	
岩崎俊秀	外洋資源部	太地	1. 7 ~ 2. 2	いるか漁業漁獲物調査	



年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的
5	岡崎 誠	海洋・南大洋部	北太平洋	6. 1. 7 ~ 3.18	海洋大循環調査及びアカイカ産卵調査(開洋丸)
	粕谷俊雄	外洋資源部	揚子江の自然保護区	1.17 ~ 2. 4	ヨウスコウカワイルカの保護に関する調査
	木白俊哉	"	"	1.17 ~ 2.10	"
	宮下富夫	外洋資源部	伊勢湾・三河湾	1.24 ~ 2.25	伊勢湾・三河湾スナメリ目視調査
	岩崎俊秀	"	"	"	"
	岩崎俊秀	外洋資源部	太地	1.30 ~ 2. 9	いるか漁業漁獲物調査
	宮下富夫	外洋資源部	西部北太平洋	2. 3 ~ 3. 2	ニタリクジラ冬季分布目視調査(第38歡喜丸)
	木白俊哉	"	"	2.28 ~ 3.30	"
	伊藤智幸	浮魚資源部	長崎県五島	2. 6 ~ 2.14	クロマグロ調査
谷津明彦	外洋資源部	北太平洋亜熱帯海域	2.10 ~ 3.18	平成5年度第4次航海(開洋丸)	
6	東 照雄	北洋資源部	日本海	6. 4.13 ~ 4.28	日共同日本海マス調査(北鳳丸)
	馬場徳寿	北洋資源部	三陸沖	4.14 ~ 4.23	鰭脚類と海洋廃棄物の分布調査(俊鷹丸)
	清田雅史	"	"	"	"
	辻 祥子	浮魚資源部	メキシコ湾及び地中海	4.21 ~ 8.17	大西洋クロマグロ調査(照洋丸)
	魚崎浩司	"	"	4.21 ~ 6.18	"
	伊藤智幸	"	"	6.15 ~ 8.17	"
	岡本浩明	浮魚資源部	東部太平洋	5.22 ~ 8. 6	開発センター乗船調査(開洋丸)
	荻島 隆	海洋・南大洋部	カムチャッカ半島、千島列島、南部沖太平洋	5.23 ~ 6.11	基礎生産力グローバルマッピング手法調査(俊鷹丸)
	塩本明弘	"	"	"	"
	木白俊哉	外洋資源部	太地	5.31 ~ 6. 8	沿岸小型捕鯨生物調査及び監視
	谷津明彦	外洋資源部	北太平洋	6.12 ~ 7.25	平成6年度アカイカ資源調査(開運丸)
	田中博之	外洋資源部	北太平洋	6.12 ~ 8.25	平成6年度アカイカ好漁場探索調査(第11茨城丸)
	谷津明彦	外洋資源部	北太平洋	6.15 ~ 8.25	アカイカ釣り漁場調査(第11富士丸)(第11茨城丸)
	清田雅史	北洋資源部	プリビロフ諸島	6.26 ~ 8.21	日米共同オットセイ網絡まり調査
	木白俊哉	外洋資源部	西部北太平洋	6.29 ~ 9.10	北太平洋鯨類捕獲調査(日新丸)
	石田行正	北洋資源部	北西太平洋	7. 1 ~	さけ・ます資源調査(北光丸)
	岩崎俊秀	外洋資源部	黄海、東シナ海、日本海南部	7. 6 ~ 8.18	日韓共同鯨類目視調査(俊鷹丸)
	上野康弘	北洋資源部	北西太平洋	7.10 ~ 8.11	さけ・ます幼魚調査(若潮丸)
	宮下富夫	外洋資源部	東シナ海	7.26 ~ 9.30	鯨類目視調査(第2共新丸)
	島田裕之	外洋資源部	日本海	7.30 ~ 9.28	鯨類目視調査(第1京丸)
	西村 明	北洋資源部	アリューシャン海盆の米国及びロシア水域	8. 1 ~ 9.22	ベーリング海スケトウダラ音響・中層トロール調査
	余川浩太郎	外洋資源部	ブラジル	8.15 ~ 9. 1	JICAアマゾン河口水産資源調査
	加藤秀弘	外洋資源部	土佐湾西部	9. 1 ~ 9. 7	ニタリクジラ生態調査
	川崎 清	海洋・南大洋部	カムチャッカ半島・千島列島南部沖太平洋海域	9. 2 ~ 9.22	海洋基礎生産力調査(俊鷹丸)
	塩本明弘	"	"	"	"
	岩崎俊秀	外洋資源部	三陸沖	10. 2 ~ 10.31	200海里内いるか混獲調査
	木白俊哉	外洋資源部	鮎川	10. 4 ~ 10.22	1994年沿岸小型捕鯨生物及び監視
	荻島 隆	海洋・南大洋部	南極海	10.21 ~ 7. 3.20	平成6年度第2次調査(開洋丸)
	川口 創	"	"	"	"
	長澤和也	北洋資源部	ブラジル、ペレーン	12.10 ~ 12.25	アマゾン河口水産資源事前調査
	余川浩太郎	外洋資源部	ペルー沖	12.21 ~ 7. 1.25	南米北西岸アメリカオアアカイカ釣り漁業乗船調査
島田裕之	外洋資源部	南極海	7. 1. 1 ~ 7.31	IDCR国際鯨類資源調査	
岡崎 誠	海洋・南大洋部	北太平洋海域	1.11 ~ 3.22	乗船調査(神海丸)	
木白俊哉	外洋資源部	土佐湾大方町沖	1.13 ~ 1.22	土佐湾西部に生息するニタリクジラの生息調査	
木白俊哉	外洋資源部	フィリピン西方海域及び南西諸島周辺	1.26 ~ 2.23	北太平洋鯨類冬季分布目視調査	
馬場徳寿	北洋資源部	三陸沖	1.31 ~ 2.27	鰭脚類の分布生態調査	

年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的
6	西田 勤	浮魚資源部	オルバニー沖	7. 2. 2 ~ 3.24	ミナミマグロ幼魚資源に関する共同調査・研究 ( CSIRO )
	竹内幸夫	浮魚資源部	ポートリンカン、オーストラリア湾	2.16 ~ 3. 1	ミナミマグロ幼魚資源に関する共同調査研究
	宮下富夫	外洋資源部	太平洋沿岸	2.27 ~ 3.31	イルカバイテレ調査航海
	木白俊哉	外洋資源部	伊勢湾及び三河湾	3. 8 ~ 3.10	伊勢湾・三河湾のスナメリ目視調査
7	馬場徳寿	北洋資源部	東北・北海道の太平洋及び日本海水域	7. 4. 3 ~ 4.26	平成 7 年度鰭脚類と海洋廃棄物調査 ( 第38歓喜丸 )
	石田正行	北洋資源部	日本海の日本水域	4.18 ~ 4.30	日本海におけるさけ・ます資源調査 ( 若竹丸 )
	水戸啓一	北洋資源部	相模湾の真鶴沖	4.18 ~ 4.21	スケトウダラ音響資源調査 ( 照洋丸 )
	西村 明	"	"	"	"
	柳本 卓	"	"	"	"
	魚住雄二	浮魚資源部	東部太平洋熱帯海域	5. 2 ~ 7.10	まぐろ延縄調査 ( 照洋丸 )
	岡本浩明	"	"	"	"
	辻 祥子	浮魚資源部	南西諸島海域	5. 8 ~ 5.29	太平洋クロマグロ卵稚仔調査 ( 俊鷹丸 )
	張 成年	"	"	5.26 ~ 6.16	"
	木白俊哉	外洋資源部	太地	5. 9 ~ 5.31	1995年沿岸小型捕鯨生物調査及び監視
	西村 明	北洋資源部	ベーリング海南東部海峡	5.16 ~ 6.30	ベーリング海スケトウダラ仔稚魚調査 ( 開洋丸第 1 次調査 )
	川崎 清	海洋・南大洋部	北海道東方海域	5.26 ~ 6.15	海洋基礎生産調査 ( 深海丸 )
	塩本明弘	"	"	"	"
	岩崎俊秀	外洋資源部	北太平洋	6. 9 ~ 8.22	北太平洋ミンククジラ捕獲調査 ( 日新丸 )
	森 純太	外洋資源部	中部北太平洋	6.11 ~ 7.23	平成 7 年度アカイカ資源調査 ( 開運丸 )
	谷津明彦	外洋資源部	中部北太平洋	6.14 ~ 7.21	平成 7 年度アカイカ好漁場探索調査 ( 31宝来丸 )
	清田雅史	北洋資源部	アラスカ州セントポール島	6.25 ~ 8.20	日米共同オットセイ繁殖島調査
	石田行正	北洋資源部	北西太平洋	6.28 ~ 7.24	さけ・ます資源調査 ( 北光丸 )
	木白俊哉	外洋資源部	鮎川	6.30 ~ 7.14	沿岸小型捕鯨生物調査及び監視
	田中博之	外洋資源部	中部北太平洋	7. 4 ~ 8.19	平成 7 年度アカイカ資源調査 ( 若鳥丸 )
	上野康弘	北洋資源部	オホーツク海	7. 8 ~ 8.10	さけ・ます資源調査 ( 若潮丸 )
	加藤秀弘	外洋資源部	房総 ~ 三陸	7.10 ~ 7.30	鯨類目視調査 ( 俊鷹丸 )
	木白俊哉	"	"	7.28 ~ 8.17	"
	島田裕之	外洋資源部	北太平洋低緯度海域	7.25 ~ 10. 1	鯨類目視調査 ( 第 2 共新丸 )
	木白俊哉	外洋資源部	房総・三陸沖	7.28 ~ 8.17	鯨類目視調査 ( 俊鷹丸 )
	柳本 卓	北洋資源部	東京湾	9. 6 ~ 9.12	日韓共同スケトウダラ資源予備調査 ( 開洋丸 )
	伊藤智幸	浮魚資源部	北海道及び青森県大間	9.26 ~ 10. 5	クロマグロ漁業調査
	森 純太	外洋資源部	小笠原海域	9.27 ~ 10.14	アカイカ産卵調査 ( 俊鷹丸 )
	馬場徳寿	北洋資源部	北海道・東北の太平洋海域	10. 4 ~ 10.17	平成 7 年度鰭脚類の分布生態調査 ( 第38歓喜丸 )
	木白俊哉	外洋資源部	鮎川	10. 4 ~ 10.20	1995年沿岸小型捕鯨調査及び監視
	水野恵介	海洋・南大洋部	インド洋	10.20 ~ 8. 1. 8	平成 7 年度第 2 次航海調査 ( 照洋丸 )
	渡邊朝生	"	"	"	"
	岡崎 誠	"	"	"	"
岩崎俊秀	外洋資源部	三陸沖 ~ 房総沖	10.26 ~ 11.13	平成 7 年度いるか混獲調査 ( 第38歓喜丸 )	
柳本 卓	北洋資源部	北海道水域	10.30 ~ 11.20	日韓共同調査北海道水域スケトウダラ調査 ( 開洋丸 )	
西田 勤	浮魚資源部	豪州エスベラニス沖	11. 5 ~ 11.10	ミナミマグロ音響調査 ( 大廣丸 )	
瀬川恭平	海洋・南大洋部	遠州灘 ~ 鹿島灘	11. 6 ~ 11.13	海洋構造調査 ( 蒼鷹丸 )	
木白俊哉	外洋資源部	鮎川	11. 9 ~ 11.12	1995年沿岸小型捕鯨調査及び監視	
木白俊哉	外洋資源部	土佐湾西部	11.20 ~ 11.27	ニタリクジラ生態調査及び指導	
木白俊哉	外洋資源部	鮎川	11.28 ~ 12. 1	1995年沿岸小型捕鯨調査及び監視	

年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的
7	岩崎俊秀	外洋資源部	太地	7.12 1 1.14	いるか漁業漁獲物調査
	加藤秀弘	外洋資源部	オーストラリア南岸沖	11.28 8. 1. 7	日本 / IWC共同シロナガスクジラ調査
	島田裕之	"	"	"	"
	水戸啓一	北洋資源部	東京湾	12. 3 12. 8	ベーリング海スケトウダラ音響資源調査予備調査(開洋丸)
	西村 明	"	"	"	"
	柳本 卓	"	"	"	"
	瀬川恭平	海洋・南大洋部	伊豆諸島～三陸沖	12. 8 12.15	衛星可視域センサー検証実験調査(俊鷹丸)
	松永浩昌	浮魚資源部	カナダ沖の北西大西洋	12.12 8. 1.17	大西洋はえ縄実態調査
	加藤秀弘	外洋資源部	オーストラリア南岸沖	12.29 8. 1. 6	JAPAN / IWC シロナガスクジラ国際共同調査
	島田裕之	"	"	12.29 8. 1. 8	"
	石田行正	北洋資源部	太平洋	8. 1. 4 ~ 2. 4	さけ・ます冬期調査(開洋丸)
	上野康弘	"	"	"	"
	塩本明弘	海洋・南大洋部	"	"	"
	木白俊哉	外洋資源部	西部北太平洋中緯度海域	1.25 ~ 2.23	北太平洋鯨類冬季分布目視調査(加能丸)
	宮下富夫	"	"	2.24 ~ 3.15	"
	水戸啓一	北洋資源部	ベーリング海	2. 1 ~ 3.22	ベーリング海スケトウダラ音響資源調査
	柳本 卓	"	"	"	"
余川浩太郎	外洋資源部	ブラジル、ペレーン	2.10 ~ 2.23	アマゾン河口水産調査現地作監調査(JICA)	
岩崎俊秀	外洋資源部	太地	2.16 ~ 2.29	いるか漁業漁獲物調査	
加藤秀弘	外洋資源部	土佐湾	2.19 ~ 2.24	高知南西部沖ニタリクジラ調査	
吉田英可	外洋資源部	土佐湾沖	2.27 ~ 3.15	イルカバイオテレメトリー調査	
(特別研究員)					
張 成年	浮魚資源部	中西部熱帯太平洋	2.26 ~ 3.23	海外まき網オブザーバー調査	
8	馬場徳寿	北洋資源部	日本海北部及び常盤沖	8. 4. 3 ~ 4.27	鰭脚類と海洋廃棄物調査(第38歡喜丸)
	石田行正	北洋資源部	日本海	4.15 ~ 4.28	日本海さけ・ます調査(若竹丸)
	水野恵介	海洋・南大洋部	相模湾	5. 7 ~ 5. 9	スライド式曳航体試験(開洋丸)
	木白俊哉	外洋資源部	高知県	5. 7 ~ 4.13	土佐湾西部ニタリクジラ生態調査及び指導
	岡本浩明	浮魚資源部	東部太平洋熱帯海域	5.10 ~ 6.21	まぐる延縄調査(照洋丸)
	中野秀樹	"	"	5.21 ~ 7.28	"
	松永浩昌	"	"	6.22 ~ 8.22	"
	塩本明弘	海洋・南大洋部	房総沖から紀伊半島沖	5.20 ~ 6. 4	衛星画像による陸域負荷物質の海洋生態への影響評価調査(俊鷹丸)
	森 純太	外洋資源部	北太平洋中部	5.29 ~ 6.19	平成8年度アカイカ資源調査(開運丸)
	木白俊哉	外洋資源部	太地	6. 1 ~ 6. 8	沿岸小型捕鯨生物調査及び監視
	田中博之	外洋資源部	中部北太平洋	6. 3 ~ 7.23	いか釣り新漁場開発調査(第31宝来丸)
	水野恵介	海洋・南大洋部	西部北太平洋	6.20 ~ 7.15	WOCE航海(開洋丸)
	渡邊朝生	"	"	"	"
	石田行正	北洋資源部	西部北太平洋	6.27 ~ 7.23	さけ・ます資源調査(北光丸)
	清田雅史	北洋資源部	セントポール島	6.27 ~ 8.16	オットセイ繁殖島調査
	木白俊哉	外洋資源部	鮎川、和田浦	6.30 ~ 7.30	沿岸小型捕鯨生物調査及び監視
	岩崎俊秀	外洋資源部	伊豆沖～北海道沿岸	7. 1 ~ 8. 9	鯨類目視調査(俊鷹丸)
	島田裕之	外洋資源部	西部北太平洋	7. 5 ~ 8.10	北太平洋ミンククジラ生物調査(日新丸)
	加藤秀弘	外洋資源部	カルフォルニア沖	7.19 ~ 8. 6	シロナガスクジラ生物調査(米国船)
	宮下富夫	外洋資源部	カムチャッカ南方海域	8. 2 ~ 9.30	鯨類目視調査(第2昭南丸)
吉田英可	外洋資源部	北西北太平洋	8. 6 ~ 9.17	北西北太平洋ミンククジラ捕獲調査(日新丸)	
(特別研究員)					



年度	氏 名	所 属	出 張 先	期 間	目 的
8	上野康弘	北洋資源部	オホーツク海	8. 8.26 ~ 9.30	さけ・ます資源調査( 日口共同調査 ) ( 俊鷹丸 )
	島田裕之	外洋資源部	北太平洋グアム島周辺	8.28 ~ 9.26	北太平洋低緯度鯨類目視調査( 第11利丸 )
	加藤秀弘	外洋資源部	高知県水試	9. 8 ~ 9.14	土佐湾西部ニタリクジラ生態調査指導
	木白俊哉	"	"	"	"
	谷津明彦	外洋資源部	西部インド洋	9.17 ~ 11.18	インド洋トビイカ調査( 若鳥丸 )
	岩崎俊秀	外洋資源部	北太平洋	10. 1 ~ 10.15	我が国200海里水域内いるか混獲調査( 第38歡喜丸 )
	上野康弘	北洋資源部	オホーツク海	10. 3 ~ 11.13	さけ・ます幼魚調査( 開洋丸 )
	阪井淳子	"	"	"	"
	瀬川恭平	海洋・南大洋部	鹿島灘	10.11 ~ 10.19	可視域リモートセンシングに関する海洋構造調査( 俊鷹丸 )
	亀田卓彦	"	"	"	"
	加藤秀弘	外洋資源部	トロムソ大学	10.23 ~ 10.28	シロナガスクジラ骨格調査
	岩崎俊秀	外洋資源部	太地	11. 4 ~ 11.22	いるか漁業捕獲物調査
	木白俊哉	外洋資源部	鮎川	11.11 ~ 12. 2	沿岸小型捕鯨生物調査及び監視
	島田裕之	外洋資源部	インド洋	11.23 ~ 9. 1.10	IWC / SOWER Blue whale Cruise ( 第2 昭南丸 )
	柳本 卓	北洋資源部	高知県水試	11.24 ~ 11.30	クサカリツボダイ仔稚魚予備調査 ( 開洋丸 )
	加藤秀弘	外洋資源部	オーストラリア北西沖	11.27 ~ 12. 2	土佐湾ニタリクジラ生態調査( 土佐海洋丸 )
	水野恵介	海洋・南大洋部	オーストラリア西岸	12.26 ~ 9. 2.12	ミナミマグロ産卵場調査( 照洋丸 )
	伊藤智幸	浮魚資源部	"	12.26 ~ 9. 2.12	"
	亀田卓彦	海洋・南大洋部	"	12.26 ~ 9. 2.12	"
	魚崎浩司	浮魚資源部	"	9. 2. 7 ~ 9. 3.10	"
	岡崎 誠	海洋・南大洋部	"	"	"
	森 純太	外洋資源部	小笠原諸島近海	1. 7 ~ 1.25	アカイカ初期生活史調査( 俊鷹丸 )
	西田 勤	浮魚資源部	西オーストラリア沿岸域	1.18 ~ 2. 8	ミナミマグロ幼魚加入量調査( たいけい )
	木白俊哉	外洋資源部	南西諸島周辺海域	1.27 ~ 2.19	北太平洋鯨類冬季分布目視調査( 加能丸 )
	宮下富夫	"	"	2.21 ~ 3.20	"
	松本隆之	浮魚資源部	大西洋熱帯水域	1.19 ~ 3.23	まぐろはえなわ大西洋オブザーバー調査( 第88永伸丸 )
	柳本 卓	北洋資源部	天皇海山海域	2. 6 ~ 3.24	クサカリツボダイ仔稚魚調査( 開洋丸 )
石田行正	北洋資源部	日本海	2. 9 ~ 2.25	日口さけ・ます共同調査( 第38歡喜丸 )	
吉田英可 ( 特別研究員 )	外洋資源部	小笠原近海	2.17 ~ 2.20	小笠原周辺海域ザトウクジラ目視調査	
木白俊哉	外洋資源部	高知	2.20 ~ 2.28	土佐湾西部ニタリクジラ生態調査 ( 土佐海洋丸 )	
宮下富夫	外洋資源部	南西諸島から紀伊半島沖	2.21 ~ 3.20	鯨類冬季分布目視調査( 加能丸 )	
長澤和也	北洋資源部	ブラジル、ベレーン	3. 1 ~ 3.13	アマゾン河口域水産資源調査	

表 6. 遠洋水産研究所が関係する国際条約・協定及び国際機関

1. 多国間の条約・協定にもとづく国際機関

名 称	略 号	発効・設立年	日本加入・署名年
国際捕鯨委員会	I W C	1 9 4 6 設立	1 9 5 1 加入
*南太平洋委員会	S P C	1 9 4 6 設立	未加入
全米熱帯まぐろ類委員会	I A T T C	1 9 4 9 設立	1 9 7 0 加入
*地中海漁業総務理事会	G F C M	1 9 4 9 設立	未加入
大西洋まぐろ類保存国際委員会	I C C A T	1 9 6 6 設立	1 9 6 9 加入
絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約 ( C I T E S )		1 9 7 5 発効	1 9 8 0 日本に関し発効
北西大西洋漁業機関	N A F O	1 9 7 9 設立	1 9 8 0 加入
南極海洋生物資源保存委員会	C C A M L R	1 9 8 2 設立	1 9 8 0 署名
北太平洋の海洋科学機関	P I C E S	1 9 9 2 設立	1 9 9 1 署名
北太平洋溯河性魚類委員会	N P A F C	1 9 9 3 設立	1 9 9 2 署名
みなみまぐろ保存委員会	C C S B T	1 9 9 4 設立	1 9 9 3 署名
国連海洋法条約 ( U N C L O S )		1 9 9 4 発効	1 9 9 6 批准
ベーリング公海漁業条約		1 9 9 5 発効	1 9 9 4 署名
北太平洋マグロ類暫定的科学委員会	I S C	1 9 9 5 設立	1 9 9 5 加入
インド洋マグロ類委員会	I O T C	1 9 9 6 設立	1 9 9 6 加入

\*印は我が国が加入していない条約・協定による国際機関

2. 二国間の協定

名 称	発 効 年
日加漁業協定	1 9 7 8
日ソ漁業協定	1 9 8 4
日ソ漁業協力協定	1 9 8 5
その他、まぐろ漁業関係では必要に応じて関係する多くの二国間協定がある (日豪漁業協定等)	

表 7. 遠洋水産研究所と各漁業との関わり

漁業・養殖業統計年報による漁業分類 (平成7年)				総 合	関わり方の程度						
					漁 獲 成 績 報 告 書	漁 獲 統 計 作 成	生 物 調 査 実 施	国 際 漁 業 委 員 会	一 斉 更 新 資 料	業 界 の 指 導 助 言	
網 漁 業	底びき網	遠洋底びき網	北方トロール	◎	○	◎		○			
			転換トロール	○	○	○		○			
			北転船	○	○	○		○			
			南方トロール	◎	○	○	○	◎		○	
			えびトロール	○							
		以西底びき網									
		沖合底びき網	1 そうびき								
	2 そうびき										
	小型底びき網		縦びき1種								
			縦びきその他								
			横びき								
		船びき網	ひき回し網								
			ひき寄せ編み								
			地びき網								
		まき網	大中型まき網	遠洋かつおまぐろ 1 そうまき	◎	○	○	○	○	○	○
	近海かつおまぐろ 1 そうまき			◎	○	○			○	○	
	その他の1 そうまき										
			2 そうまき								
			中・小型まき網	1 そうまき巾着網							
		2 そうまき巾着網									
		その他のまき網									
		刺網	さけ・ます流し網	○				○			
			かじき等流し網	○			○	○		○	
	その他の刺網										
	敷網	さんま棒受網									
		その他の敷網									
	定置網	大型定置網									
		さけ定置網	○				○				
		小型定置網									
		その他の網漁業									
	北洋はえ縄・刺網			○	○	○		○			
釣 漁 業	はえ縄	まぐろはえ縄	遠洋まぐろはえ縄	◎	○	○	○	◎	○	○	
			近海まぐろはえ縄	○	○	○	○	○	○	○	
			沿岸まぐろはえ縄	○							
			さけ・ますはえ縄	○				○			
		その他のはえ縄									
	はえ縄以外の釣	かつお一本釣	遠洋かつお一本釣	○			○	○		○	
			近海かつお一本釣	○			○			○	
			沿岸かつお一本釣	○			○			○	
		いか釣	遠洋いか釣	◎							
			近海いか釣								
			沿岸いか釣								
			さば釣								
		ひき縄釣									
		その他の釣									
捕鯨業	小型捕鯨		◎		○	◎	◎		○		
そ の 他	いるか漁業		◎		○	◎	○		○		
	潜水器漁業										
	採貝										
	採藻										
	その他の漁業										
	ミンククジラ捕獲調査		○	○	○	○	○		○		

注) 関わり方の程度：◎強、○弱、空欄 関わり無し



表8-1. 漁業部門別生産量の推移

(単位：千トン、頭)

年次 (年)	総生産量 (捕鯨業を除く)	海面漁業・養殖業					内水面漁業 ・養殖業	捕鯨業 (捕獲頭数)
		計	遠洋	沖合	沿岸	養殖業		
1955	4,907	4,812	...	...	...	154	93	11,886
1960	6,192	6,102	1,410	2,514	1,893	284	90	19,649
1965	6,908	6,761	1,733	2,787	1,861	380	146	26,986
1966	7,103	6,963	1,912	2,773	1,872	405	140	22,784
1967	7,851	7,712	2,403	2,828	2,011	470	139	21,088
1968	8,670	8,515	2,830	3,158	2,004	522	155	21,586
1969	8,613	8,449	3,165	2,949	1,862	473	164	17,409
1970	9,315	9,147	3,429	3,279	1,889	549	168	16,887
1971	9,909	9,757	3,674	3,541	1,934	609	151	16,419
1972	10,213	10,048	3,905	3,594	1,902	648	165	17,590
1973	10,763	10,584	3,988	3,984	1,820	791	179	14,012
1974	10,808	10,629	3,698	4,178	1,874	880	179	14,277
1975	10,545	10,346	3,168	4,469	1,935	773	199	13,427
1976	10,656	10,455	2,969	4,637	2,000	850	201	9,632
1977	10,757	10,549	2,683	4,898	2,107	861	208	9,299
1978	10,828	10,600	2,175	5,518	1,990	917	228	5,954
1979	10,590	10,359	2,066	5,458	1,953	883	231	4,918
1980	11,122	10,900	2,167	5,705	2,037	992	221	5,191
1981	11,319	11,103	2,165	5,939	2,038	960	216	4,887
1982	11,388	11,170	2,089	6,070	2,072	938	219	4,967
1983	11,967	11,756	2,132	6,428	2,137	1,060	211	4,606
1984	12,816	12,612	2,280	6,956	2,266	1,111	204	4,473
1985	12,171	11,965	2,111	6,498	2,268	1,088	206	3,087
1986	12,739	12,539	2,336	6,792	2,213	1,198	200	2,840
1987	12,465	12,267	2,344	6,634	2,151	1,137	198	2,790
1988	12,785	12,587	2,247	6,897	2,115	1,327	198	190
1989	11,914	11,712	1,976	6,340	2,123	1,272	202	124
1990	11,052	10,843	1,496	6,081	1,992	1,273	209	96
1991	9,978	9,773	1,179	5,438	1,894	1,262	205	210
1992	9,266	9,078	1,270	4,534	1,968	1,306	188	164
1993	8,707	8,530	1,139	4,256	1,861	1,274	177	175
1994	8,103	7,934	1,063	3,720	1,807	1,344	169	129
1995	7,489	7,322	917	3,260	1,831	1,315	167	174

資料：農林水産省「漁業・養殖業生産統計年報」

備考： - ; 事実のないもの ... ; 事実不詳又は調査を欠くもの

表8-2. 漁業部門別生産額の推移

( 単位 : 億円 )

年次 (年)	水産業総合 (捕鯨業を含む)	海面漁業・養殖業					内水面漁業 ・養殖業	捕鯨業
		計	遠洋	沖合	沿岸	養殖業		
1955	2,092	1,880	...	...	...	175	72	160
1960	3,682	3,320	1,067	924	990	337	128	234
1965	5,928	5,333	1,670	1,442	1,404	816	226	366
1966	6,553	5,978	1,860	1,559	1,546	974	281	290
1967	7,279	6,751	2,193	1,727	1,758	1,074	275	252
1968	7,684	7,107	2,381	1,902	1,814	1,010	341	237
1969	8,709	8,059	2,702	2,088	2,138	1,130	429	221
1970	9,664	9,204	2,969	2,365	2,518	1,353	487	272
1971	11,208	10,331	3,348	2,746	2,863	1,374	563	314
1972	12,074	11,125	3,473	2,960	2,983	1,708	672	273
1973	14,915	13,815	4,310	3,788	3,465	2,251	826	327
1974	17,411	16,114	4,703	4,765	4,321	2,325	970	337
1975	19,207	17,740	4,761	5,311	5,132	2,536	1,130	337
1976	22,077	20,636	5,269	6,569	5,865	2,933	1,226	216
1977	25,657	24,035	6,215	7,526	6,772	3,522	1,416	206
1978	24,636	22,927	5,209	6,867	6,839	4,013	1,585	124
1979	26,587	24,788	5,789	7,695	7,076	4,229	1,691	107
1980	27,838	26,024	5,722	8,300	7,315	4,687	1,688	126
1981	27,891	26,090	5,938	8,258	7,330	4,565	1,690	112
1982	29,772	27,684	6,406	9,024	7,699	4,556	1,956	132
1983	29,164	27,239	6,403	8,195	7,456	5,186	1,793	132
1984	29,466	27,487	6,931	7,863	7,524	5,171	1,840	139
1985	29,020	27,144	6,828	7,583	7,508	5,225	1,762	115
1986	27,305	25,437	6,158	6,802	7,397	5,080	1,745	123
1987	26,006	24,174	5,402	6,561	7,290	4,922	1,703	129
1988	27,133	25,495	5,220	6,757	7,687	5,831	1,633	5
1989	26,923	25,208	5,121	6,565	7,856	5,667	1,710	5
1990	27,225	25,599	4,422	7,037	8,047	6,094	1,621	5
1991	27,125	25,483	4,238	7,041	7,798	6,407	1,637	6
1992	26,070	24,398	4,501	6,107	7,663	6,126	1,665	6
1993	24,888	23,232	4,142	5,657	7,364	6,069	1,649	7
1994	23,685	22,089	3,471	5,504	6,844	6,270	1,590	6
1995	22,496	20,851	2,770	5,559	6,783	5,739	1,637	7

資料：農林水産省「漁業・養殖業生産統計年報」

備考： - ; 事実のないもの ... ; 事実不詳又は調査を欠くもの

表8-3. 漁業生産に占める遠洋水産研究所の関係する漁業の割合

年次 (年)	生産量 (捕鯨業を除く) (千トン、%)					生産額 (捕鯨業を含む) (億円、%)				
	総生産量 (A)	遠洋漁業 (B)	遠洋漁業の 占める割合 (B/A×100)	遠洋水研の 関係漁業 (C)	遠洋水研の関 係漁業の割合 (C/A×100)	水産業総合 (D)	遠洋漁業 (E)	遠洋漁業の 占める割合 (E/D×100)	遠洋水研の 関係漁業 (F)	遠洋水研の関 係漁業の割合 (F/D×100)
1955	4,907	...	...	...	...	2,092	...	...	...	...
1960	6,192	1,410	23	1,181	19	3,682	1,067	29	1,226	33
1965	6,908	1,733	25	1,631	24	5,928	1,670	28	2,135	36
1966	7,103	1,912	27	1,835	26	6,553	1,860	28	2,282	35
1967	7,851	2,403	31	2,322	30	7,279	2,193	30	2,645	36
1968	8,670	2,830	33	2,714	31	7,684	2,381	31	2,749	36
1969	8,613	3,165	37	3,126	36	8,709	2,702	31	3,231	37
1970	9,315	3,429	37	3,381	36	9,664	2,969	31	3,528	37
1971	9,909	3,674	37	3,664	37	11,208	3,348	30	4,034	36
1972	10,213	3,905	38	3,956	39	12,074	3,473	29	4,215	35
1973	10,763	3,988	37	4,128	38	14,915	4,310	29	5,358	36
1974	10,808	3,698	34	3,832	35	17,411	4,703	27	5,932	34
1975	10,545	3,168	30	3,307	31	19,207	4,761	25	6,284	33
1976	10,656	2,969	28	3,161	30	22,077	5,269	24	6,725	30
1977	10,757	2,683	25	2,827	26	25,657	6,215	24	7,845	31
1978	10,828	2,175	20	2,372	22	24,636	5,209	21	6,706	27
1979	10,590	2,066	20	2,272	21	26,587	5,789	22	7,516	28
1980	11,122	2,167	19	2,382	21	27,838	5,722	21	7,530	27
1981	11,319	2,165	19	2,378	21	27,891	5,938	21	7,978	29
1982	11,388	2,089	18	2,326	20	29,772	6,406	22	8,496	29
1983	11,967	2,132	18	2,297	19	29,164	6,403	22	7,974	27
1984	12,816	2,280	18	2,488	19	29,466	6,931	24	8,305	28
1985	12,171	2,111	17	2,303	19	29,020	6,828	24	8,226	28
1986	12,739	2,336	18	2,487	20	27,305	6,158	23	7,153	26
1987	12,465	2,344	19	2,353	19	26,006	5,402	21	6,409	25
1988	12,785	2,247	18	2,284	18	27,133	5,220	19	6,308	23
1989	11,914	1,976	17	2,006	17	26,923	5,121	19	6,219	23
1990	11,052	1,496	14	1,783	16	27,225	4,422	16	6,060	22
1991	9,978	1,179	12	1,517	15	27,125	4,238	16	5,684	21
1992	9,266	1,270	14	1,517	16	26,070	4,501	17	5,938	23
1993	8,707	1,139	13	1,484	17	24,888	4,142	17	5,772	23
1994	8,103	1,063	13	1,384	17	23,685	3,471	15	4,809	20
1995	7,489	917	12	1,268	17	22,496	2,770	12	3,963	18

資料：農林水産省「漁業・養殖業生産統計年報」

備考：遠洋水研の関係漁業は、表4 遠洋水産研究所の関係する漁業の生産量（額については表5）の推移を参照



表8-4. 遠洋水産研究所の関係する漁業の生産量の推移

(単位:千トン、頭)

年次 (年)	母船式底 びき網等	北方・ 転換ト ロール	北転船	南方ト ナキョウ ナミ以外	ロール ナキョウ ナミ	えびト ロール	母船式さ け・ます	さけ・ま す流し網	かじき等 流し網	さけ・ま す定置網 ①	母船式 かに	北太平 洋ずわ いがに	北洋は え縄・ 刺網	大中型 まき網 ②	遠洋まぐ ろはえ縄 ③	近海まぐ ろはえ縄 ④	遠洋かつ お一本釣	近海かつ お一本釣	沿岸かつ お一本釣	遠洋いか 釣	いか流し 網	合計	母船式 捕鯨 (頭)	大型 捕鯨 (頭)	小型 捕鯨 (頭)	いるか 漁業 (頭)
1955	25	-	-	-	-	-	116	43	...	...	12	-	-	...	176	21	97	48	...	-	-	538	8,608	2,387	891	2,700
1960	472	-	-	13	-	-	54	68	...	10	19	-	-	...	398	38	80	29	...	-	-	1,181	15,825	3,030	794	4,400
1965	404	62	130	168	-	1	45	60	...	42	25	-	-	...	441	58	132	63	...	-	-	1,631	23,612	2,340	1,034	19,800
1966	454	97	211	182	-	0	39	50	...	37	25	-	-	...	403	79	168	90	...	-	-	1,835	19,176	2,516	1,092	17,400
1967	778	123	319	281	-	0	43	58	...	47	24	-	-	...	354	75	142	78	...	-	-	2,322	16,777	3,287	1,024	9,900
1968	843	192	618	285	-	1	38	52	...	23	47	...	...	...	341	78	126	70	...	-	-	2,714	15,991	4,777	818	16,000
1969	862	369	771	286	-	1	40	55	...	42	35	11	24	15	313	79	146	57	20	-	-	3,126	12,536	4,299	574	11,300
1970	1,199	333	812	258	-	1	36	46	...	34	33	10	26	3	276	77	162	58	17	-	-	3,381	12,143	4,118	626	18,100
1971	1,247	573	805	283	-	1	37	47	...	45	23	7	31	19	245	71	165	51	14	-	-	3,664	11,958	3,842	619	10,500
1972	1,294	689	901	272	-	1	35	55	...	28	22	7	32	25	231	73	202	64	25	...	-	3,956	13,610	3,442	538	14,100
1973	1,110	751	1,014	307	0	1	36	58	...	37	17	6	30	55	225	83	272	103	23	...	-	4,128	10,767	2,593	652	16,200
1974	962	671	972	280	1	5	34	52	...	43	13	5	30	22	207	90	286	131	28	...	-	3,832	11,188	2,620	469	19,900
1975	796	533	857	283	3	4	34	56	...	60	8	7	29	22	200	92	203	103	17	...	-	3,307	10,486	2,464	477	16,300
1976	764	527	644	296	5	3	32	49	...	37	8	6	31	36	193	104	253	154	19	...	-	3,161	6,674	2,570	388	16,700
1977	563	442	572	387	13	3	24	38	...	45	-	13	23	41	202	117	206	120	18	...	-	2,827	6,906	2,093	300	14,300
1978	556	441	182	236	25	3	15	25	...	52	-	16	24	55	201	124	232	161	24	...	-	2,372	3,685	1,792	477	17,900
1979	543	406	191	185	37	3	15	26	...	72	-	16	30	61	205	121	198	143	20	...	-	2,272	3,159	1,321	438	12,074
1980	554	460	208	167	36	3	15	26	...	61	-	8	47	82	212	129	207	143	24	...	-	2,382	3,279	1,499	413	29,227
1981	542	464	193	192	28	4	15	26	...	77	-	1	46	96	206	108	169	106	19	...	-	2,378	3,120	1,354	413	15,917
1982	517	438	165	168	36	4	15	26	...	66	-	1	38	127	218	97	153	103	23	...	-	2,326	3,577	921	469	20,133
1983	450	415	158	155	43	4	15	26	...	77	-	1	45	164	220	107	156	100	22	...	-	2,297	3,224	929	453	21,401
1984	425	442	230	222	50	3	15	20	...	65	-	1	47	187	223	98	184	149	23	...	-	2,488	3,027	881	565	18,064
1985	416	376	168	222	38	3	12	21	...	96	-	-	50	186	233	102	119	99	21	...	-	2,303	1,941	717	429	16,116
1986	251	454	357	264	61	3	6	13	...	82	-	-	44	196	229	102	159	121	23	...	-	2,487	1,941	517	382	20,760
1987	-	532	332	351	78	3	7	13	...	82	-	-	51	183	202	101	141	93	19	...	-	1,652	1,941	505	344	30,006
1988	-	491	299	377	73	2	3	12	...	93	-	-	-	225	216	95	141	100	27	...	-	2,284	-	-	190	45,990
1989	-	483	200	305	79	1	2	15	...	110	-	-	-	178	169	85	126	89	23	...	-	2,006	-	-	124	31,349
1990	-	274	148	253	69	1	-	11	...	130	-	-	-	191	169	90	85	73	22	...	-	1,783	-	-	96	24,721
1991	-	76	77	183	69	1	-	16	...	20	-	-	-	238	180	85	110	104	22	...	-	1,517	-	-	210	20,166
1992	-	69	121	199	78	1	-	23	...	17	-	-	-	248	197	91	83	81	19	...	-	1,517	-	-	164	14,163
1993	-	38	122	148	57	1	-	26	...	3	-	-	22	240	205	100	96	93	24	...	-	1,484	-	-	175	16,345
1994	-	25	121	121	58	1	-	24	...	4	-	-	24	231	197	88	89	62	19	...	-	1,384	-	-	129	17,736
1995	-	20	72	99	63	0	-	33	...	3	-	-	15	211	191	86	95	70	9	...	-	1,268	-	-	174	14,541

資料：農林水産省「漁業・養殖業生産統計年報」。いるか漁業は、1978年までは遠洋水産研究所の推定値、それ以降は国際捕鯨委員会（IWC）への報告値。  
備考：① 39年以降さけ・ますはえ縄を含む。② 大中型まき網は、かつおまぐろに限る。③ 遠洋まぐろはえ縄には、母船式まぐろはえ縄を含む。④ 近海まぐろはえ縄には、沿岸まぐろはえ縄を含む。  
-；事実のないもの ...；事実不詳又は調査を欠くもの

表8-5. 遠洋水産研究所の関係する漁業の生産額の推移

(単位: 億円)

年次 (年)	母船式底 びき網等	北方・ 転換ト ロール	北転船	南方ト ロール	えびト ロール	母船式さ け・ます	さけ・ま す流し網	かじき等 流し網	さけ・ま す定置網 ①	母船式 かに	北太平 洋ずわ いがに	北洋は え縄・ 刺網	大中型 まき網 ②	遠洋まぐ ろはえ縄 ③	近海まぐ ろはえ縄 ④	遠洋かつ お一本釣	近海かつ お一本釣	沿岸かつ お一本釣	遠洋いか 釣	いか流し 網	母船式 捕鯨	大型 捕鯨	小型 捕鯨	合計
1955	6	-	-	-	-	177	47	...	14	10	-	-	...	205	⑤	130	⑤	...	-	-	137	23	⑤	749
1960	73	-	-	13	-	203	104	...	15	35	-	-	...	401	45	77	26	...	-	-	211	21	2	1,226
1965	115	34	56	164	...	188	151	...	108	50	-	-	...	618	96	131	58	...	-	-	341	23	2	2,135
1966	118	37	114	204	...	148	150	...	108	58	-	-	...	680	137	158	80	...	-	-	273	15	2	2,282
1967	181	59	137	415	...	164	183	...	142	61	-	...	...	677	123	164	87	...	-	-	234	16	2	2,645
1968	210	97	198	430	...	143	185	...	84	75	...	...	...	723	137	148	82	...	-	-	215	21	1	2,749
1969	206	142	249	441	...	198	223	...	153	78	10	24	29	797	157	195	86	22	-	-	197	22	2	3,231
1970	282	167	264	442	...	174	177	...	135	75	17	39	35	895	188	253	92	21	-	-	243	27	2	3,528
1971	320	194	306	491	5	145	169	...	171	78	15	42	62	1,048	220	340	90	24	-	-	285	27	2	4,034
1972	311	268	373	427	6	133	214	...	127	71	18	29	84	1,077	247	386	129	42	...	-	252	18	3	4,215
1973	316	388	458	487	7	189	317	...	224	66	31	60	85	1,298	314	552	202	37	...	-	301	24	2	5,358
1974	323	385	492	505	58	174	336	...	287	41	25	80	102	1,371	448	646	256	66	...	-	311	22	4	5,932
1975	336	402	478	553	46	179	368	...	469	36	31	87	113	1,428	521	564	290	46	...	-	311	22	4	6,284
1976	410	437	412	654	47	200	373	...	319	42	34	106	156	1,507	624	728	399	61	...	-	183	30	3	6,725
1977	473	484	510	973	51	176	334	...	460	-	83	86	224	1,858	748	701	411	67	...	-	171	32	3	7,845
1978	522	472	241	658	54	170	251	...	650	-	88	64	221	1,606	629	541	344	71	...	-	90	28	6	6,706
1979	455	521	295	492	77	152	200	...	676	-	91	89	352	2,208	792	579	360	70	...	...	73	28	6	7,516
1980	423	440	315	479	81	147	180	...	541	-	47	108	434	2,127	828	698	466	90	...	...	77	42	7	7,530
1981	414	435	328	641	100	140	203	...	656	-	5	111	566	2,097	737	578	406	69	...	380	60	45	7	7,978
1982	478	438	317	608	146	165	242	...	601	-	6	112	613	2,398	741	468	434	81	...	516	81	43	8	8,496
1983	448	393	274	487	119	109	206	...	578	-	6	101	665	2,452	748	397	350	70	...	439	80	43	9	7,974
1984	437	458	312	715	100	91	155	...	513	-	6	146	582	2,707	710	389	356	57	...	432	85	44	10	8,305
1985	441	308	195	721	95	143	151	...	577	-	-	129	701	2,585	701	348	327	66	...	623	62	43	10	8,226
1986	265	331	319	752	77	74	87	...	412	-	-	124	474	2,301	680	279	290	56	...	509	70	40	13	7,153
1987	-	386	240	692	48	85	85	...	549	-	-	145	428	1,905	635	309	272	57	...	444	74	42	13	6,409
1988	-	300	233	682	30	36	106	...	633	-	-	-	402	2,255	671	240	260	66	...	389	-	-	5	6,308
1989	-	283	133	602	24	18	96	...	584	-	-	-	455	2,217	715	253	315	64	...	455	-	-	5	6,219
1990	-	166	111	485	26	-	81	...	645	-	-	-	408	1,934	758	251	270	58	329	439	-	-	5	6,060
1991	-	85	105	453	22	-	84	...	475	-	-	-	470	2,004	671	209	266	54	394	333	-	-	6	5,684
1992	-	98	194	446	22	-	161	...	55	492	-	-	478	2,135	709	210	270	56	305	301	-	-	6	5,938
1993	-	57	156	308	14	-	161	...	16	576	-	-	36	528	2,211	732	209	241	63	456	-	-	7	5,772
1994	-	29	166	240	13	-	114	...	26	398	-	-	35	544	1,734	602	217	205	61	418	-	-	6	4,809
1995	-	20	123	146	6	-	142	...	389	-	-	20	355	1,506	528	226	191	33	251	-	-	-	7	3,963

資料：農林水産省「漁業・養殖業生産統計年報」。

備考：① 39年以降さけ・ますはえ縄を含む。② 大中型まき網は、かつおまぐろに限る。③ 遠洋まぐろはえ縄には、母船式まぐろはえ縄を含む。④ 近海まぐろはえ縄には、沿岸まぐろはえ縄を含む。

⑤ 区分がないため、左欄を含む。

-; 事実のないもの ...; 事実不詳又は調査を欠くもの

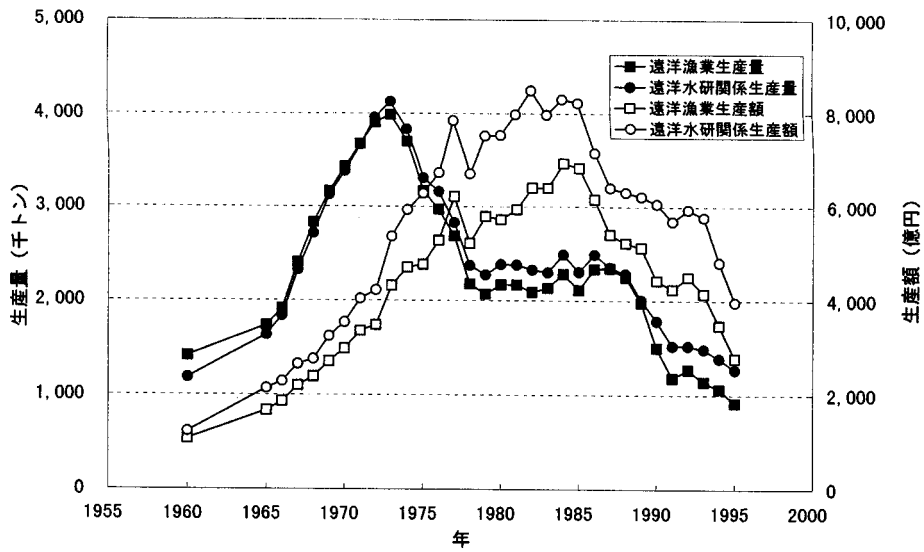


図1. 遠洋漁業生産量・生産額

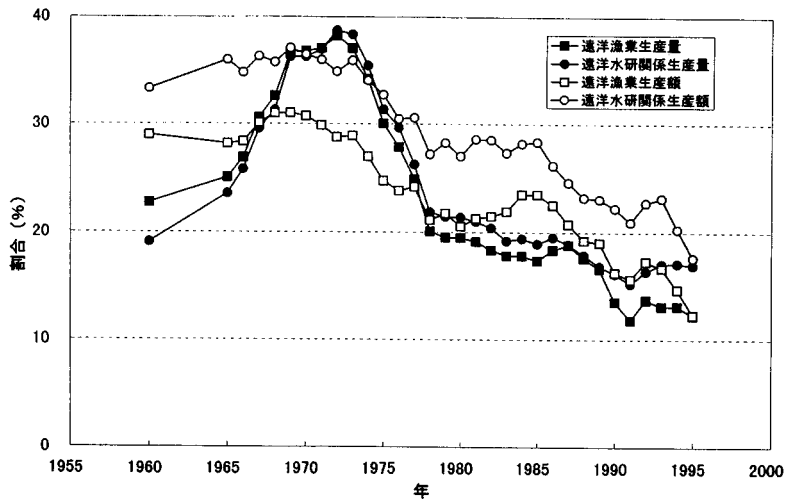


図2. 漁業・養殖業総生産量(額)に対する割合

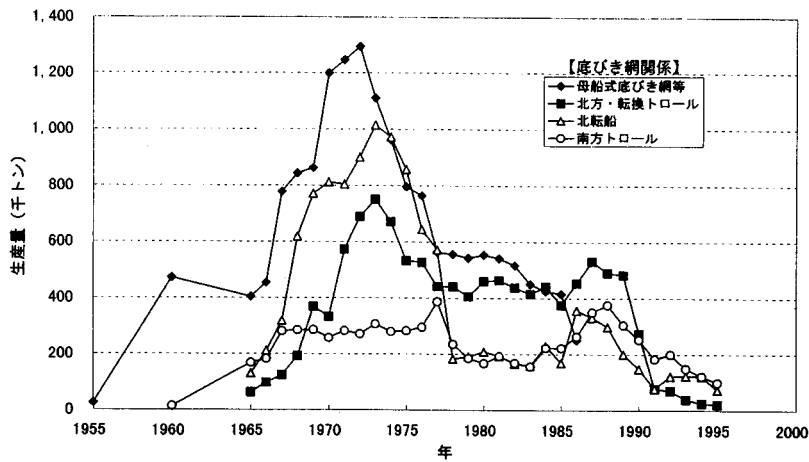


図3. 底びき網関係生産量

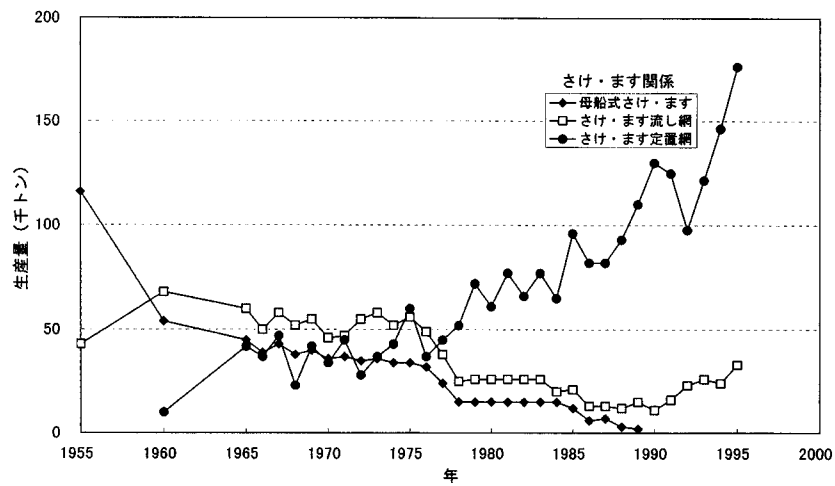


図4. さけ・ます関係生産量

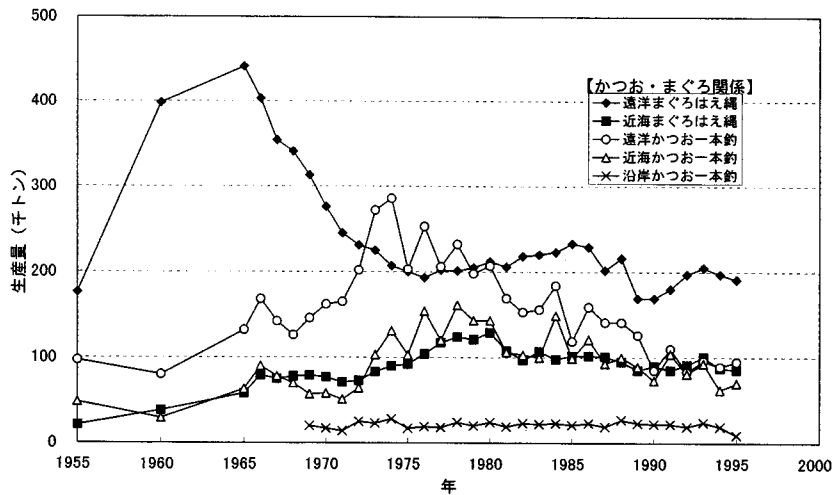


図5. かつお・まぐろ関係生産量

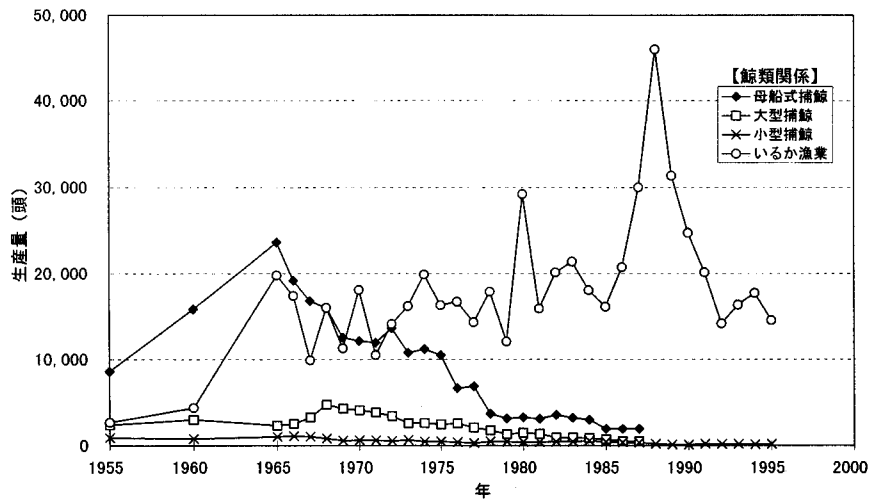


図6. 鯨類関係生産量



表9. 遠洋水産研究所組織体制の変遷

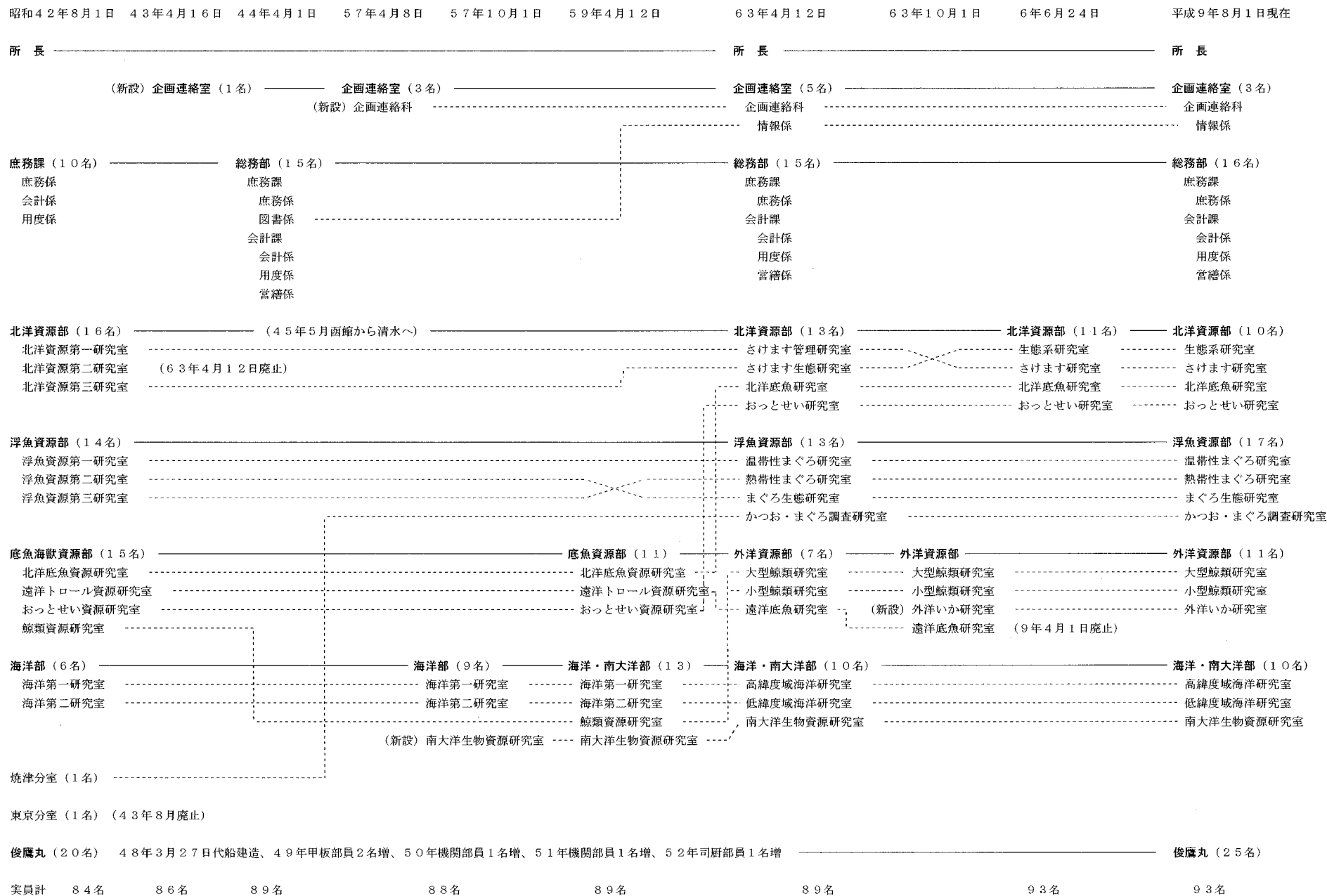


表10. 遠洋水産研究所職員一覽 (昭和62年8月~平成9年8月)

	62	63	元	2	3	4	5	6	7	8	9	
所長	林 繁一		大隅清治		伊藤 準		畑中 寛		嶋津靖彦			
	10		3.16		3.16		3.16			3.16		
企画連絡室長	大隅清治		米盛 保		伊藤 準		畑中 寛		佐々木喬		松村卓月	
	10		4		3.16		3.16		3.16		3.16	
企画連絡科長	本間 操		畑中 寛		河野秀雄		小林時正		川原重幸		石塚吉生	
	4.12		4		4		4		4		4	
室員	清田雅史	中野秀樹	石井晴人	島田裕之	田中博之							
	4	4	10	4	11	4	7.16	4	7.16			
	塩本明弘	上野康弘	木白俊哉	伊藤智幸	岩崎俊秀							
	4	4	10	4	11	4	7.16	4	7.16			
			余川浩太郎			島崎浩司						
			4	11		4	7.16					
情報係長									藤井裕二		渡邊 真	
									4		4	
係員									西川智恵子		岡本大和	
									4.12		4	
									12.31		4	
総務部長	佐伯靖彦		古川有恒		岩澤龍彦		橋爪政男		松岡英二		中村 逸	
	4		4		4		4		4		6	
庶務課長	佐々木 謙	阿部眞雄	小間勝郎		森住 武		山田信隆		河内宣昭			
	4	4	4		4		4		4			
庶務課課長補佐	増田英治	加藤武司	垣谷隆夫		境 清		染木俊博					
	4	4	4		4		4					
庶務係長	角 誠	瀬川幸人		白鳥高志								
	7.5	10		4								
係員	若林恵子											
	池田和典				杉山成一				裕 俊之		岡本大和	
	4				4				4		4	
	井上 功											
図書係長												
	4.12											
係員	西川智恵子											
	4.12											
会計課長	小間勝郎		弘中 茂		森住 武		山田信隆		河内宣昭		山村 豊	
	4		4		4		4		4		4	
会計係長	白鳥高志								鈴木宏一			
									4			
係員	小田利枝											
用度係長	増崎芳				裕 俊之				高井 信		望月昌彦	
	4				4				4		4	
	山田友之		曾根力夫		吉田勝一						久保田直樹	
	4		4		4						4	

	62	63	元	2	3	4	5	6	7	8	9
係員	鈴木 一   佐牟田 強				礒 俊之				久保田直樹   川合 健		
	4				4				5 4		
	藤 隆之   国分光雄		4		4		杉山成一		4 5.11		
	高井 信								4		
					望月昌彦				杉坂幸恵		
営繕係長	瀬川幸人   豊田 友		小山 勉		3.16		堂園法弘		坂井友信		
	10 4		4		4		4		4		
係員	国分光雄		増田 博		池田和典		堂園法弘		杉山成一		
	4		4		4		10 4		5.11		
北洋資源部長	高木健治		吉田主基		佐々木 喬		若林 清				
	10		3.16 4		3.16 4						
北洋資源第一研究室長	伊藤 準								4 4.12		
室員	石田行正								4.12		
	伊藤外夫								4.12		
	東 照雄								4.12		
	堂園法弘								4		
北洋資源第二研究室長	川崎正和								3.31 4.12		
北洋資源第三研究室長	加藤 守								4.12		
室員	小倉未基								4.12		
さけます管理研究室長			石田行正						4.12 6 6.24		
室員	石田行正								4.12 6 6.24		
	伊藤外夫								4.12 6.24		
	東 照雄								4.12 6.24		
さけます生態研究室長	加藤 守				長澤和也				4.12 4 4 6.24		
室員	小倉未基								4.12 4 6.24		
	上野康弘								10 6.24		

	62	63	元	2	3	4	5	6	7	8	9
生態系研究室長									7		
室員									7		
さけます研究室長											
室員											
北洋底魚研究室長											
室員											
おっとせい研究室長											
室員											
浮魚資源部長											
浮魚資源第一研究室											
室員											
浮魚資源第二研究室											
室員											
浮魚資源第三研究室											
室員											



	62	63	元	2	3	4	5	6	7	8	9
焼津分室	藁科侑生										
温帯性まぐろ研究室長	4.12 河野秀雄   石塚吉生   辻 祥子										
室員	4.12 石塚吉生   伊藤智幸										
室員	4.12 4 7.16   竹内幸夫										
	4   松本隆之										
熱帯性まぐろ研究室長	鈴木治郎   辻 祥子   宮部尚純										
室員	4.12 3.16 4   張 成年										
	4.12 宮部尚純   張 成年										
	4.12 小井土隆   辻 祥子   西田 勤										
	4.12 1.16 4   岡本浩明										
	4   池原宏二										
まぐろ生態研究室長	渡辺 洋   魚住雄二										
室員	4.12 西川康夫   松永浩昌										
	4.12 7   中野秀樹										
	10   魚崎浩司										
	7.16   庄野 宏										
かつお・まぐろ調査研究室長	本間 操   藁科侑生   田中 有										
室員	4.12 藁科侑生   西川康夫										
	4.12 4 7   田中 有										
主任研究官	4.12 八百正和   塩濱利夫										
	5 10   3.31										
底魚資源部長	伊藤 準										
北洋底魚資源研究室長	大滝英夫   佐々木喬										
室員	4.12 吉村 拓										
	4.12										

	62	63	元	2	3	4	5	6	7	8	9	
	手島和之											
		4.12										
	水戸啓一											
		4.12										
	若林 清											
		4										
遠洋トロール資源研究室長	畑中 寛											
		4.12										
室員	山田陽巳											
		4.12										
	川原重幸											
		4.12										
	魚住雄二											
		4.12										
おっとせい資源研究室長	吉田主基											
		4.12										
室員	馬場徳寿											
		4.12										
	清田雅史											
		4										
外洋資源部長	伊藤 準   畑中 寛     粕谷俊雄     川原重幸											
		4.12	4	3.16	4							4
大型鯨類研究室長	加藤秀弘											
		4.12	10									
室員	和田志郎     島田裕之											
		4.12	4								7.16	
	木白俊哉											
		11										
小型鯨類研究室長	粕谷俊雄     宮下富夫											
		4.12					4					4
室員	宮下富夫     岡村 寛											
		4.12								4		
	岩崎俊秀											
		7.16										
外洋いか研究室長	早瀬茂雄     谷津明彦											
		10							10	4		
室員	谷津明彦     森 純太											
		4								4		
	島田裕之     田中博之											
		7.16					7.16					
	余川浩太郎											
		4										
遠洋底魚研究室長	川原重幸											
		4.12	6								4	
室員	川原重幸     余川浩太郎											
		4.12	6								11	4
	魚住雄二											
		4.12										4

	62	63	元	2	3	4	5	6	7	8	9
			山田陽巳								
			4.12		3.31						
海洋・南大洋部長	三尾眞一			奈須敬二			松村皐月			宮地邦明	
				4			4			3.16	4
海洋第一研究室長	松村皐月										
			4.12								
室員	平松一彦										
			4.12								
室員	塩本明弘										
			4	4.12							
海洋第二研究室長	水野恵介										
			4.12								
室員	行繩茂理										
			4.12								
	宇都正巳										
			4.12								
鯨類資源研究室長	粕谷俊雄										
			4.12								
室員	和田志郎										
			4.12								
	宮下富夫										
			4.12								
高緯度域海洋研究室長	松村皐月						川崎 清			瀬川恭平	
			4.12				4			10	
室員	平松一彦										6
			4.12								
	塩本明弘										
			4.12								
								萩島 隆			亀田卓彦
								4	4		6
低緯度域海洋研究室長	水野恵介										
			4.12								
室員	行繩茂理										
			4.12				3.31				
	宇都正巳						渡邊朝生				
			4.12		3.31		4				
								岡崎 誠			
								4			
南大洋生物資源研究室長	嶋津靖彦			遠藤宜成			永延幹男				
			4	6	9	4					
室員	一井太郎										
	遠藤宜成						石井晴人			川口 創	
			6				11		8.31		4
主任研究官	小牧勇蔵										
											3.31

	62	63	元	2	3	4	5	6	7	8	9
俊鷹丸船長	船長   吉田伸夫   下島 甫										
機関長	機関長   中仮屋勝   平川 操   齊藤真澄										
通信長	通信長   齊藤武朗   志津孝治										
一等航海士	一等航海士   小野田勝   菅原 敬   團野貞明										
二等航海士	二等航海士   松田 勇   菅原 敬   石森良史   甲斐谷久孝										
三等航海士	三等航海士   菅原 敬   佐々木明   宮本 圭   片岡 洋										
一等機関士	一等機関士   山崎 謙   前田昭紀   秋江四郎   澤井俊樹										
二等機関士	二等機関士   野坂 優   一瀬純弥										
甲板長	甲板長   河野重信   前川 昇   中島知實   鈴木 勝   野沢昭二   菅原新一										
甲板次長	甲板次長   坂下研三   山下峰雄   島貫陽一郎   野沢昭二   高岡純二										
部員	部員   坂下研三   笠井(上田)勉   宮崎孝之   細川礼人   森 耕一   須田清行   日中隆介   高橋 治   阪本良太										
	部員   上津原圭介   昆 秀志   細井 勝   梅田靖徳   本間 晃   増子智志   伊藤幸一										
操機長	操機長   山本賢蔵   君塚静雄   中村 裕   岩波 瑛   平澤忠雄										
操機次長	操機次長   中村晴一郎   小林 豊   山本紋右衛門   小川安信										
部員	部員   山本紋右衛門   山田 一   中野一男   長谷川国浩   荒木 久   居村政勝   片山 慎										
	部員   穴戸正義   杉田一彦   鈴木富士雄										
司厨長	司厨長   山川 等   小川原慶一   砂江拓朗   吉川 進										



	62	63	元	2	3	4	5	6	7	8	9	
部員	十文字弘光			宮下文也								
	松村秀男				漆山栄一				秋武正記			
	4				4				4			

- ① 職場単位に各職員の在職期間を示す。数字は異動の発令された月を示す。欠員は破線で示す。
- ② 主任研究官は5級の職員のみとし、他は研究室の所属とした。在任中にこれらの級に昇格した場合にはそれ以前も含めて主任研究官とした。

表11. 俸給表別職員数の推移

実員は7月1日現在

年度		43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	元	2	3	4	5	6	7	8	9
行(一)	定員	20	27	25	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	22	21	21	21	21	21	21	21	21	20	20	19
	実員	21	25	21	20	20	20	20	21	21	20	20	19	18	18	18	17	17	16	17	16	15	16	16	16	16	15	16	17	17	16
行(二)	定員	6	6	6	6	6	6	6	6	5	3	2	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	実員					1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
研究	定員	55	55	57	55	55	55	55	55	55	55	54	53	53	53	53	53	53	53	53	53	55	55	55	56	56	56	56	56	56	52
	実員	45	44	46	49	51	50	50	48	48	45	45	46	45	44	44	45	46	47	47	49	48	51	46	49	49	50	50	50	51	51
海(一)	定員	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
	実員	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
海(二)	定員	12	12	12	12	12	12	14	15	16	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17
	実員	12	12	12	12	12	12	14	15	16	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	16	17
合計	定員	101	108	108	104	104	104	106	107	107	106	105	104	103	103	103	103	102	102	102	101	102	102	102	103	103	103	103	102	102	97
	実員	86	89	87	89	92	91	93	93	94	91	91	91	89	88	88	88	89	89	90	91	89	93	88	91	90	92	93	93	92	93

表 12. 遠洋水産研究所関連年表

		漁業関連事項	遠洋水研関連事項
1948	S23	IWC 設立 (日本加盟 1951)	
1950	S25	IATTC 設立 (日本加盟 1970)	
1967	S42		遠洋水産研究所設立 (8月1日) 北洋資源部、浮魚資源部、 底魚海獣資源部、海洋部
1968	S43		企画連絡室を設置
1969	S44	ICCAT 設立 (日本加盟 1969)	総務部を設置
1970	S45		北洋資源部を函館より清水に移動
1971	S46	業界によるミナミマグロ漁獲の自主規制	
1973	S48	第3次国連海洋法会議開始	俊鷹丸代船建造
1977	S52	米、加、ソ等 200 海里 (漁業水域) 宣言 西部ベーリング海の母船式かに漁業中止 暫定水域措置法制定	創立 10 周年
1979	S54	NAFO 設立	
1982	S57	IWC で商業捕鯨の一時的停止を採択 (1985 年漁期から) 国連海洋法条約採択 CCAMLR 設立	南大洋生物資源研究室を設置
1984	S59	おっとせい条約失効	組織見直し： 底魚海獣資源部 → 底魚資源部 海洋部 → 海洋・南大洋部
1987	S62	母船式捕鯨出漁中断 母船式底びき網漁業中止	創立 20 周年
1988	S63	沿岸捕鯨中断	組織見直し： 底魚資源部 → 外洋資源部 鯨類資源研究室を 2 室に 外洋いか研究室を設置
1989	H 元	国連総会で大規模流し網漁業禁止決議	
1990	H2	母船式さけ・ます漁業中止	
1992	H4	PICES 設立 国連環境開発会議でアジェンダ 21 等採択	
1993	H5	NPAFC 設立 (INPFC 条約失効) いか流し網漁業中止 公海漁業協定採択	
1994	H6	CCSBT 設立 国連海洋法条約発効	生態系研究室を設置
1995	H7	ISC 設置 ベーリング公海漁業条約発効	
1996	H8	国連海洋法条約を批准 IOTC 設立	
1997	H9		遠洋底魚研究室を廃止 創立 30 周年

## 編 集 後 記

今年、行財政改革を初めとし、新たな中央省庁のあり方、国の研究所のあり方、規制の緩和等がスケジュールに上がり変革をすべき時期に当たっている。水産も我が国200海里内におけるTAC制度の導入と資源管理を実践することとなった。また公務員には綱紀粛正の通達が出され襟を正すことが強く求められている。

このような環境の中で、遠洋水研は創立30周年を迎えた。20周年の編集後記に、「どうも遠洋水研は10周年毎に大きな変動、変革を迎えるらしい。さて次の30周年には何が起こるのだろうか。」と佐伯氏は予期しておられるが慧眼である。前述のとおり確かに歴史の転換期である。このジククスは続くものと思われる。かかる時期に遠洋水研が生き残るためには、変革をプラスに転換する戦略、戦術の処方箋と人的資源とを必要とすることを痛感させられる。

創立30周年記念行事を挙行することが5月の部課長会議で決定され、各部の代表者で構成する実行委員会を発足させ、当委員会で記念行事の一環として「遠洋」の特集号の発行を決めたのは6月3日であった。それ以後、記念特集号編集ワーキンググループのメンバー、川原(外洋)、石塚(企連)、染木(総務)、渡邊(企連)を中心に、編集方針、発行時期、スケジュールの検討、原稿の依頼、校正等多岐にわたり精力を傾注していただいた。

過去2回にわたる記念特集号を見ると、10年刻みの遠洋水研の出来事、研究状況、研究所の整備状況等の歴史が蘇る。30周年を記念する本号においては基本的には過去の記念号の編集精神を下敷きにしつつも、漁業と研究の係わり等の項目を新たに起こし、各部からの記述は過去10年間を中心にまとめ、将来展望を記載することとした。

遠洋水研に関係があった行政の方々、業界の方々、先輩諸氏、調査船に従事された方々からは、短期日の締切りにも係わらず玉稿を賜り、編集子一同厚く御礼を申し上げます。

本号がB5からA4になったにも係わらず資料編が分厚くなったが、本文の裏付け資料であり理解の上から必要であった。読者諸兄のご意見、ご批判の一助となれば幸いです。

最後に、記念行事にご協力いただいた実行委員、石塚(企連)、上野(北洋)、松本(浮魚)、伊藤(浮魚)、川原(外洋)、永延(海洋・南大洋)、河内(庶務)、山村(会計)、染木(庶務)、野村(総務)の名を留め、記念特集号編集ワーキンググループ各位の協力に対して感謝いたします。

今年、8月1日当日は快晴で、水研は30歳を迎えたが構内は蝉時雨の最中で誰からも30歳だよと言う声も聞かず、週末で夏休みのせいもあったためか至極のどかであった。研究課からの緊急な用件があった以外は、次週から新たに遠洋水研週間来所予定表を作成する準備をして大過なく過ぎた。かくして記念すべき30周年の日は平素と何ら変わる所はなかった。

( 創立30周年記念行事実行委員代表 野村 真郷 )



---

平成9年8月1日発行

編 集 創立30周年記念行事実行委員会

発 行 水産庁遠洋水産研究所

〒424 静岡県清水市折戸五丁目7番1号

電 話 0543 36-6000

ファックス 0543 35-9642

e-mail : kiren@enyo.affrc.go.jp

---